白詰草紙

津軽　あまに

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白詰草紙

【Ｎコード】

Ｎ９６２４Ｏ

【作者名】

津軽　あまに

【あらすじ】

この時代に存在し得ないはずの遺伝子工学技術が生み出した、戦闘用人工生命体。それを創造した、深き心の傷痕から己が起源を覗き込んだ異端者。

本来の物語の主役である二者の周りに立つ者こそ、この短編集の主人公。

白詰草紙。これは誰の目にも留まらない、三つ葉の白詰草（わきやく）の御伽草紙である。多分。

白詰草話　－Ｅｐｉｓｏｄｅ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｃｌｏｖｅｒｓ－

二次創作ＳＳ。
サブキャラクターを中心に、本編で語られなかったエピソードを描いています。

1（前書き）

本作は、ドリームキャスト及びＰＣ用アドベンチャーゲーム「白詰草話　－Ｅｐｉｓｏｄｅ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｃｌｏｖｅｒｓ－」の二次創作作品です。

作中には、本作には存在していない独自設定、独自解釈などが含まれておりますので、御了承下さい。

また、本作には、原作の核心に触れる内容が含まれております。ネタバレを嫌う方は、御注意下さい。

1

ノートパソコンが一つ。少女が一人。
それが、部屋にある全てだった。
白い壁面には窓はおろか継ぎ目すら見えない。
照明もなく、壁面自体が淡い光を放っている。
少女の身を包む白い貫頭衣とあいまって、その空間は見る者に無機質な印象を強く抱かせる。
彼女は他に何をするでもなく、端末のキーを叩いていた。
ディスプレイに映るのは、白黒に塗り分けられた格子。
その上をディフォルメされたアイコンが推移していく。
チェス。
彼女に与えられた唯一の娯楽だった。

「チェック・メイト」

いつもなら誰も応えることのない呟き。
しかし、今日は違った。
背後で響く乾いた音。
それが手のひらを打ち合わせる音だと気付くのに、一呼吸。
そしてそれが対象に敬意を示すために使われる行為であることを思い出すのにもう一呼吸の間。
そこまで考えて、ようやく少女は背後を振り返った。
背後に立っていたのは、白衣をまとった女。
少女は自分の身体を弄り回す百数名にのぼる研究者の顔を全て記憶していたが、その女には見覚えが無かった。

「すごいわね。一流のＣＰＵ相手に互角以上」

この部屋に入れる以上、「組織」の研究者、中でも一定以上の地位にいる者であることは間違いない。
しかし。少女は微かな違和感を覚えた。

「だれ？」
「今日からあなたの監視役になった女よ」

彼女は微かに目を細め、口元を歪めた。
その拍子に金髪が光を反射したせいだろうか、少女にはその表情がひどく美しく感じられた。
目を細め、口元を歪め、微かな呼気を漏らす。そんな、女の表情。
思い出した。
昔。他の研究者が誰一人としてしなかった、そんな表情を自分に見せた男がいた。
それを「笑顔」というのだと。教えてくれた男がいた。
彼もまた、この女とよく似た「笑顔」をしていなかったか。
「笑顔」を見せながら、女は少女に手を伸ばした。
半端に開いたまま、自分の腕を取るでもない手。
不思議そうに見る少女の手を取り、女はゆるく握った。
再び浮かぶ「笑顔」。
先程のものよりも眉がひそめられている。
それを「苦笑」と呼ぶことを、少女はまだ知らない。

「アンティークな白のクイーン、ね」

屈みこみ、女は少女と同じ高さで、無表情に見開かれた目を覗き込む。

「なに、それ」
「孤高で、周りの雰囲気に染まらずにすっくと立つのよ。あれは」

覗き込んでくるのは碧眼。まるで綺麗な硝子玉のようだ、と少女は思った。
無造作に伸ばされたこちらの髪を、細くて白くて柔らかい指が梳く。
「鏡を見て御覧なさい。今のあなた、そんな感じ。凛々しくて素敵よ」
「すてき？」
それは、彼女が初めて耳にする単語（ほめことば）だった。

2

夜の新宿といえば、誰もが思い浮かべるであろう、歌舞伎町を代表とする眠らぬ街。
しかし、いざ駅前を離れ、御苑にもさしかかろうというあたりまでくると、夜の静けさは驚くほどに深い。

「あ、チェス盤が画面に」
「ぁは、すごいれす！」
「ふぅん、これで色んな人と遊べるのね」

そんな静けさを、三者三様の少女の声が破る。
御苑の外れに位置するビルを改装した住宅の二階。
モノトーンを基調とした内装の部屋で、ＰＣを三人の少女が囲んでいた。

「このサイトでは国内の人しか相手にできないけれどね」

それを後ろから見守るのは、端整な顔立ちにどことなく幼さを残す若者。
父娘と言うにはあまりにも歳が近く、兄妹と呼ぶには年の差が微妙な三人と一人。
しかし、他人と言うには少女達にも青年にも不自然なところは無い。
一見すれば親戚の子供を預かっているような、微笑ましい光景である。
誰が彼等を見て、世界有数の遺伝工学の権威が、創りだした「兵器」を観察しているという「真実」を想像できるだろうか。
青年の名は津名川宗慈。

桐田製薬代々木研究所第二十四研究室主任、不世出の遺伝子工学の権威、脳神経外科の鬼才。
華々しい様々な二つ名も、彼を正確に言い表してはいない。
表向き、彼が研究をしているのは「ウィルスベクターを利用した遺伝性疾患治療の実用化に関する研究」である。
しかし、それもまた彼の真の研究を世に知らしめないための方便に過ぎない。
そして、三人の少女達。

「んじゃ、私からやってみるね。ハンドルネームは……宗慈さん、黒猫って英語でなんていうの？」

真っ先にＰＣに飛びついたのは、癖のない長い金髪を腰まで伸ばした西洋系の顔立ちの少女。

「『ｂｌａｃｋ　ｃａｔ』。ｂ・ｌ・ａ・ｃ・ｋでスペース。その後で、ｃ・ａ・ｔだよ」
「はーい。入力完了。んじゃ、この人と、勝負！」

聞く者の微笑みを誘う、弾むような快活さが印象的。彼女の名は、Ｅｘ－Ｔｕ－０１「エマ」。

「あー、えま、いいなあ」

言いながら、栗毛の少女がＰＣを占領したエマに、後ろから飛びついた。
舌足らずな口調には、言葉と裏腹にうらやむ様子は全くない。
ただ、じゃれつく口実が欲しいだけなのだろう。
元から幼く見える東洋系の顔立ちに、それ以上のあどけなさが残る表情。Ｅｘ－Ｔｕ－００「沙友」。

二人を少し後ろから見守るのは、ゆるく波打った黒髪に、大人びた微笑みを浮かべた少女。Ｅｘ－Ｔｕ－０２「透花」。
彼女達は、厳密に言えば人間ではない。
人間の本来持つ２３の遺伝子をカスタマイズし、さらにフルプログラミングされた強化遺伝子を付加する。
その操作を通して、自然な人間形態をとりながら持ちえる最大限の物理的能力を引き出された「兵器」。
組織は、彼女達を「エクストラ」と呼称している。
「エクストラ」の開発と維持に関する「Ｅｘ計画」。これが、津名川宗慈が真に手がける研究だった。
独自の知能を持ち、自律行動が可能な柔軟性。
人間形態であることから、他の数ある次世代兵器と比較して従来の個人携帯用武器を流用可であるという経済性。
武器、兵器の輸送は防げども、ただの人間の入国を防ぐことのできる国家など存在しえないという隠密性。
完成すれば、これまでの戦争の概念が覆る可能性のある新兵器。
それが、「エクストラ」であった。
しかし、「人間を強化した存在を作る」と言えば簡単であるが、実現には山のような課題が存在する。
３～５万種の遺伝子が相互に干渉し合い、精緻なバランスを保つヒト染色体。
微かな変化が全てに大きな影響を及ぼす中、特定の能力の強化という結果を導き出す遺伝配列を発見するのは神業に近い。
また、その精緻さゆえ、一部の欠落や余分な存在は全体のバランスを容易に崩しうる。
染色体一つが余分に付加されるだけで、身体的、精神的なハンディキャップを負うケースは珍しくない。
クラインフェルター症候群、ダウン症、ヒト三倍体（トリソミー）……例を挙げればきりのない話である。
そのバランスの崩れを別のバランスの崩れで相殺し、結果身体能

力の強化という長所だけを残す。
そんな都合のよい離れ業なくしては、強化された人間は存在しえないのである。
身体の強化という目的に適合する特殊遺伝子をプログラミングする。
遺伝子を付加したことで乱される生体のバランスを、別の形で安定させる。
この、二つの「神業」無くして、安定した兵器としての「エクストラ」は製作しえない。
一般的にそれを人は「不可能」と言う。
しかし、現に彼女達はそこにいた。
学会や研究業績報告など、表舞台では一切その名を知られていない青年が、二つの「神業」を一人で成し遂げたのである。
その業績は、ただ「奇跡」と呼ばれている。
遺伝工学では国内外を通じて最先端を誇る桐田製薬でも、エクストラ開発に成功した研究室は津名川研を含め、二つのみ。
津名川より一年早くプロジェクトが開始されたその研究所の主任もまた、津名川と同年代の若き才媛であった。
よりエクストラを兵器として特化したコンセプトから、彼女の研究室は先行した時間以上の差を津名川研につけている。
一方、津名川研ではエクストラ達の脳機能にはほぼ手を入れていない。
ゆえに、彼のエクストラは限りなく人間の少女に近い精神構造を持つ。
表向きには自律的判断と柔軟性を確保するためとしてあるこの措置に、異論、反論は少なくない。
しかし、津名川は頑なにその一点だけは譲ることがなかった。
「はいっ、つぎはとーかのばんですー」

勝負は完敗だったにも関わらず、満面の笑みで沙友がＰＣを透花へと譲る。
ゲームは好きでも、勝敗にさして頓着がないのがこの少女だった。

「いいの？」

透花が遠慮がちに沙友とエマに目をやる。

「もちろんですー」
「ダメなわけないでしょ？」
「あ、ありがとう……」

二人の声に、いそいそとＰＣの前に陣取る透花。
宗慈は知っている。彼女が自分の隣で二人を羨ましそうに眺めていたことを。
思慮深いゆえの遠慮。それが、三人の長女役をつとめる透花の数少ない欠点だった。

眉をひそめながら、口元に握った拳を当てる。
透花の視線の先にはディスプレイ内のチェス盤。

「うーん……」
「ねー、透花、まだぁ？」
「まだー？」

将棋などと比較して、チェスは比較的短時間で終わる。しかし、透花の対戦は思いのほか長引いていた。

「透花、苦戦しているようだね」

「ごめんなさい。この人、強くって……」

申しわけなさそうに言う透花の背後で、エマと沙友は本物のチェス盤に駒を並べ始める。

「うーん、じゃ、いいわ。沙友、私達で勝負しよ」

「しょぶ！」

宗慈は、透花の後ろからＰＣを覗き込む。沈黙とマウスの音。

「クイーンズギャンビットからアクセプテッドに応じたのか。それにしても鮮やかに捌かれたね。相手は？」

「『Ｑｕｅｅｎ　ｏｆ　ｗｈｉｔｅ』。『白の女王』……だそうです」

「あまり見かけない名前だけど。実力者だね。静かな手だけど、堅実だ」

「ご主人様も、そう思いますか？」

後ろを振り返る透花。そこで宗慈がディスプレイを指し示す。

「そのクイーンで固められたな。勝負あり、だよ。透花」

「え、ああっ」

慌てる透花。立ち上がった拍子に、手元のコーヒーカップがひっくり返る。

「……あ」

部屋の全員の声が、唱和する。

その視線の先には、コーヒーまみれのチェス盤。

「ふふ、ナーイス透花！　突然のハプニング！　これで今の勝負はなしよね、なし！」

並んでいた駒をぐちゃぐちゃにするエマ。

「あー、エマずるーい。さゆ、かてたのにぃ」

ぶんぶんと手を振り回す沙友。

「ご、ごめんなさいごめんなさいっ！」

慌てて右往左往する透花。

三人を見ながら、宗慈は盛大な溜息をついた。

「……それよりまず、拭かないか？」

3

「ごめんなさい、ごめんなさい、本当にごめんなさい……」

港区白金台。高級住宅地として知られる閑静な住宅街に、そんな声が響く。

「もういいよ、透花」

「でも……」

街中を歩きながら、透花と宗慈はもう何度繰り返したかわからないやりとりを続けていた。

「いいのよ、あんなところにコーヒーカップ置く宗慈さんも悪いんだから」

見かねて隣のエマが口を出す。

「いつも透花が言ってたじゃない。精密機械の周りに水モノはダメって」

びしっ、と宗慈へ指を突きつけるエマ。

「らめっ！」

沙友が笑いながらそれを真似る。

「む。それを言われると辛いところだな」

苦笑いをしながら肩をすくめる宗慈。

「まあ、だからこうして、新しい盤を買いに来たわけだろう？」

「……いいんですか？」

「あれも相当使い古していたからね」

「本当に、ごめんなさい……」

再び沈む透花の表情。それを見て、宗慈はさりげなく話題を変える。

「ほら、あの店だ」

宗慈の指した先には、煉瓦造りの小さな店舗があった。

ショーウィンドーには硝子製のランプシェードやグラス、落ち着いた風合いの小物が並んでいる。

扉を開けるとともに響く、軽やかなカウベルの音。

抑えた暖色の照明が四人を照らす。狭い店内の割に物の量こそ多いが、整然と並ぶのは、数多くの骨董雑貨。

「うわー」

「すごい……」

「いいな、このグラス！　あ、この花瓶も素敵！」

沙友はアンティークテディを中心とするぬいぐるみ、エマはアールデコの硝子細工、透花は年季を感じさせる木製家具。

各々、興味のある品の元へと散っていく。

「気をつけるんだよ。ここは物が多いから」

「「「はーい」」」

三人の声が唱和する。

「おや、可愛らしい声がすると思ったら」

と。店の奥から穏やかな声がかけられた。

「あなたは、いつかの。津名川さん、でしたわね。お久しぶりです」

そこにいたのは、品のある微笑みを浮かべた老婦人だった。

「覚えていて下さったのですか？　以前来たのは随分と昔のはずですが」

「ふふ、忘れませんよ。売り物の盤でチェスをされたカップルは初めてでしたから」

「その節はご迷惑をおかけしました」

「迷惑だなんて。自分の選んだ商品を気に入っていただけるのは、嬉しいものですわ」

店主の老婦人は、三人の少女に目をやると、小首を傾げた。

「ところでそこの娘さん達は、あの時のお相手とのお子さん？」

「な……」

慌てる宗慈。

「ふふ、冗談ですよ。それにしては大きすぎますものね」

「からかわないで下さいよ」

「ごめんなさい。反応がかわいらしいから、つい、ね」

口元に手をあてて笑う店主。
「それにしてもあのソバージュの子、どこかで……」
透花を見る店主の目が細められる。
「あー、ちぇす、みつけたりー！」
突然、沙友の声が店中に響く。
「ちぇす？」
「ああ、そうでした。今日はチェス盤と駒を探しに来ていて」
「はあ。アンティークものを二個目ですか」
「それが……、前のものを少し汚してしまいまして」
宗慈の苦笑に、察したように店主は微笑する。
「なるほど。子供達と使うスペアが欲しい、と」
「まあ、あれも一応思い出の品、ですしね」
「ご、ご主人様の思い出の品？」
いつの間にか後ろに立っていた透花が、それを聞いて泣きそうな顔になる。
店主が宗慈に目配せをする。どうやら、しっかりフォローをしろ、という意味のようだ。
責任感の強い透花の前で確かに、今の発言は失敗だったかもしれない。
「そう。透花との思い出の品だよ」

少女の肩に手を置き、宗慈は微笑んだ。

「……私との？」

「しっかりものの透花がうっかりカップをひっくり返した、って記念のね」

少しおどけたような口調で。

「か……からかわないでくださいっ」

泣きそうな、どこか照れくさそうな、そんな表情で透花は宗慈を見上げる。

「お嬢さん。あなたがチェス盤を汚したことで、想いが一つ、その盤に刻まれたのよ」

言葉をかけたのは、それまで黙っていた店主だった。

「……想い？」

「そう。ここにある品は、そういう想いの詰まった品。汚れていても、美しくても、それに詰まった想いの分だけの価値があるの」

穏やかだが、どこか確信を伴った強い言葉。

「だからこそ、骨董っていうものには惹かれるものがあるのかもしれないな」

「客観的な価値なんてのは、あまり大したことはないんでしょうね。商売人の私が言ったらいけないことかもしれないけれど。

要は、それをどう思うか。そこにあるものを、どれだけ愛せるか

の問題なんでしょうね。確かに、チェス盤は汚れたかもしれない。
でも、そのことで誰かのチェス盤への想いが強くなったなら……
それは、決して嘆くことじゃないわ」

店主はおもむろに透花の頬の涙を拭う。

「だから、お嬢さん、そんな顔はやめなさいな。せっかくの可愛らしさが台無しよ？」
「か、可愛らしい……？」

照れているのだろう。戸惑いで言葉を途切れさせる透花は、珍しく年相応の少女に見えた。

「ねー、それよいちぇす、ちぇす！」

待ちかねてぶんぶんと手を振り、もう片方の手で盤を指差す沙友。

「どれどれ？」

エマと透花を連れ、宗慈もそれを眺める。

「うわぁ、素敵ぃ」
「凄いですね……」
「確かに。いいな」

相当の年を経た風合いと、一方で古びたところのないデザイン。
盤はシンプルでかといって貧素な印象は受けず、駒の細工の細やかさを引き立たせている。

宗慈はその駒の中でも、白のクイーンを手にとる。

「駒一つ一つの細工もいいし、小ぶりで使いやすそうだ。これにするかな」

「ああ、……これですか」

何か含むような店主の口調に、宗慈は思わず問い返す。

「ん？　何か？」

「この盤、いつも見に来ている子がいてましてね。娘さん達より少し上くらいの」

「その子が予約済み、ですか？」

「いえ、予約……というわけではないのですけど、お気に入りのようだったから」

まあ、そうだろう。透花達と同じか少し年上程度の少女がそうそう手を出せるような品ではないはずだ。

「予約してないなら早いもの勝ちよ。ね？」

エマが、気にすることなどない、と言わんばかりに主張する。

「だけど、お店に来て急にお気に入りがなかったら、その子、悲しがるんじゃ……」

おずおずと提案する透花。

「せんせー、どうすゆの？」

「買うにしても了解をとっておきたいところだね」

その言葉に、エマは少し不服そうな、透花は安堵したような表情をそれぞれ浮かべる。

「ありがとうございます。あの子、いつもは夕方頃に来るんですけれど……それまで、お時間ありますか？」
「はい。それじゃあ、どこかで時間を潰して……」
「じゃあ、どうです？　ここでお待ちになります？」
「え？」
「道具は使うためにあるものです。ずっと飾り物にしておくのは、失礼でしょう？」

店主はチェスの駒を並べながら微笑んだ。

4

「ポーンを一つ、いただきます」
「うーん、取り返すべきかしら」

店主の手が止まる。
その時、店主の背後から伸ばされたのは、細い腕。
「ここのナイトをこう動かせば、切り込めますよ」

全員の視線が集まる。
その先には、白のワンピースに身を包んだ少女。
年齢は、透花やエマ達よりもわずかに年上くらいだろうか。
首のあたりで揃えられた癖のない黒髪に、黒の瞳。
物静かな印象を、意志の強い視線が裏切っている。
白の少女と目が合い、透花は息を飲んだ。
鼓動が加速する。
だが、透花には、自分が彼女に対してそんな風に反応する理由がわからない。
恐怖ではない。嫌悪ではない。
取り立てた特徴が、彼女にあるわけでもない。
強いて近い言葉を選ぶとすれば、既視感。
しかし透花はこれまで、同年代の少女と話す機会などほとんどなかった。
第一、もし自分が彼女を知っているなら、いつも行動を共にしているエマと沙友が知らないはずはない。

「どうした？　透花」

透花の沈黙に気付き、宗慈が首を傾げる。
慌てて透花は首を振る。
自分の主人は心配性だ。こんな些細な違和感で、彼に負担をかけたくなかった。
けれど、なおも透花は視線を、白の少女から外せなかった。
その理由を、理解できない。説明できない。
けれど、透花には奇妙な確信があった。
目の前の少女には、自分にとって大きな意味を持つ何かがあるのだと。
相手もまた、それを感じ取ったのか。
漆黒の瞳が、透花を捉えたまま、離さない。
二人の間を走る、張り詰めた空気。
それを砕いたのは、店主の明るい声だった。

「篤子ちゃん、いらっしゃい」

その言葉に、ふわり、と少女の顔に笑みが浮かぶ。
先ほどまでの刺すような視線が嘘のような、年相応の表情。

「こんにちは。おばさま。今日はずいぶんにぎやかですね」

家族同士が交わすような自然なやりとり。
篤子と呼ばれたこの少女は店の常連のようだった。
なるほど、彼女は白金の上品な雰囲気にしっくりとくる雰囲気をまとっている。

「ええ。お陰さまで。お客さん、彼女が例の娘ですよ」

店主は篤子へと席を譲ると、宗慈に少女を紹介した。
篤子は当然のようにスカートの裾をわずかに持ち上げ、まるで絵

本の中の貴族のような一礼をする。
芝居がかった素振りをひどく自然にこなす挙作が、育ちのよさを感じさせる。

「それでね、篤子ちゃん。このチェス盤、この方が買いたいとおっしゃっているのだけれど……」
「……そうなんですか」

店主の言葉に、僅かに篤子が眉根を寄せた。
やはり、少なからず愛着のある品だったということか。
宗慈は頬を掻きながら、篤子に声をかけた。

「お気に入りだ、と聞きましたから。もしよろしければでいいんですが」

遥かに年下の少女に反射的に敬語を使っていたのは、宗慈の性格故か、それとも篤子のまとう大人びた雰囲気のせいか。
事実、篤子の立ち居振舞い、表情は宗慈に強く早熟を感じさせた。
十代の半ば程度の少女に本来あるはずの、大人と対することへの躊躇、戸惑いといったものが全くないのだ。
まるで、日々大人達と互角か、それ以上に渡り合う生活が日常であるかのように。

「義理堅いんですね」

くすりと口元に手を当てて微笑む篤子。
その仕草は透花の癖とよく似ていたが、だからこそ落ち着きがはっきりと感じられた。
透花も、年齢から考えれば相当大人びたところのある少女ではある。

だが、篤子との比較ではいささか分が悪い。
「予約していないんだから、買ってしまわれればよかったのに」
「そーそー。宗慈さんったら、妙なところで堅いんだから」
「だからー」

だが、エマと沙友は、そんな篤子の様子を一切気にした様子はない。
篤子は二人のやりとりを可笑しそうに見つめている。
「買うにしても一言言ってからがいい、って待ってらしたのよ。あ、お茶はカモミールでいいかしら？」
「はい、ご馳走になります。……じゃあ、わざわざお待たせしてしまったわけですね」
「遊ばせていただいていただけだけですよ」

篤子はチェス盤を見下ろすと、まるでそこに至るまでの手筋を遡るように指で駒をなぞる。
「お上手なんですね」
「そんな。まだまだ素人ですよ」
「ご謙遜を。……ぜひお手合わせ願いたいです」

ふと。透花の背筋に、形容できない奇妙な感触が走った。
反射的に篤子を見れば、いつしか彼女の瞳にはどこか剣呑な輝きが宿っている。
「一つ、ゲームをしませんか？」
「ゲーム？」

それに気付いたのは、透花だけのようだった。
宗慈はもちろん、三人の中で悪意や敵意に敏感な沙友でさえ全く異変を感じていないようだ。
篤子はただ、宗慈を見つめて言葉を続ける。
「この盤を使って、チェスをしましょう。勝った方がこの盤を買うことができる。どうです？」
「……どうする？」
宗慈は困惑した様子で三人を振り返った。
「面白いじゃない。宗慈さんの実力、見せちゃいなよ」
エマが握りこぶしを胸の前に作って熱く力説する。勝負事に目がない彼女らしい。
「先生、がんばるです！」
沙友の言葉にも屈託がない。
「……」
ただ、透花だけが、言葉を発さずに篤子を見つめていた。
初めて彼女を見たときからの違和感。
その正体を確かめるの「何か」に触れた気がしたのだ。
「どうしたんだい？」
「ご主人さま。……私に、やらせてもらえませんか？」
透花の言葉は、宗慈にとってひどく意外なものだった。

万事控えめで消極的になりがちなのが、透花の性質である。
だからこそ、その反応は宗慈の興味を惹いた。

「……わかった。頼んだよ、透花」
「はい。ありがとうございます」

深呼吸を一つ。
透花は、宗慈に代わって席につく。

「とーか、がんばってーっ」
「宗慈さんの代打ちなんだから、気合入れてね！」

二人の声援を背に、篤子と改めて向かい合う。
一瞬だけ、白の少女の表情に何かを羨むような色が浮かび、消えた気がした。

「お兄様でなくていいんですか？」
「ごめんなさい。よろしく、お願いします」
「気を悪くさせちゃいましたか？　ごめんなさいね。……始めましょうか」

かくて古いチェス盤を巡り、二人の少女の戦いが始まった。

5

黒白の駒が並べられる。
白の駒を操る、黒服の透花。
黒の駒を操る、白服の篤子。
まるで鏡を挟んだかのように対照的な二人。

（まずは、クイーンギャンビット）

ともにクイーンの前のポーンを二つずつ前に。
次に透花、ビショップの前のポーンを二歩進める。
篤子はしばし口元に手を当て、ビショップの前のポーンを一歩進める。

（スラブディフェンス……、慎重だ）

推移していくピース。
透花のキャスリングに、篤子も次手、キャスリングで応じる。
ナイトとポーンの交換。黒のナイトが動く。

（クイーンの道を開けて、かつ誘き寄せたビショップを狙ってる。
……やられた。ビショップを戻すしかないかな）

透花にとって痛恨の手損。思い返せば、その布石は数手前に巧妙に隠されていた。
表情を曇らせ、ビショップを下げる。
篤子の手に、派手さはない。
ただ、その先読みが卓越しているのだ。
盤上の隅々にまで、黒の瞳から伸びた神経が行き渡っているよう

な錯覚。
まるでこの小さな領域が、自らの支配圏であるかのように。
さながら、親衛隊を駆る、冷徹な貴族の令嬢というところか。
それと比べて、と透花は歯噛みする。
彼女の視線はまだ、眼前のモノしか捉えられていない。
これでは良いようにあしらわれてしまうだけだ。
この感触、どこかで味わったことがある。
透花は、反射的に口元へ緩く握った拳を寄せた。

「……」

顔を上げる。
そこには、鏡があった。
否。そこにあるのは、透花と「完全に同じ」素振りで沈思する、篤子の姿。
突然、堤防が決壊するような唐突さで、透花は理解した。
自分が彼女に感じていた違和感の正体。
あまりにも印象が異なるから、気付かなかった。
けれど、答えはひどく単純なこと。
彼女と自分は、似ているのだ。
似ているからこそ、より違いが明確に感じられただけのこと。
声。容姿。それだけではない。
仕草。
言葉を紡ぐ間。
表情の一つ一つ。
いや、相似しているのはそんな外面的なものだけではない。
もっと。
それは、似ているというより、むしろ――
刹那。

情報の奔流が透花を襲った。

――無機質な研究室。

――ある存在のサンプルとして。単に実験体としての毎日。

――名前などなく。ただ「古きもの（エインシェント）」とだけ呼ばれた日々。

――一人目のタカミヤ。

――癖っ毛の男研究者との邂逅。

――ケンジ。自分を人として扱った初めての人。

――二人目のタカミヤ。

――金髪の女研究者との出会い。

――エレン。自分を「すてき」と呼んだ初めての人。

――自分の能力を発揮できる場。

――エクストラと呼ばれる兵器の開発。

――自らの分身。双子の生物兵器。

――ＰＣの前でネットチェスをする自分。

――白の、女王。

それは「薬」を飲み忘れたときに起こるフラッシュバックによく似ていた。

だが、いつものそれが自分の記憶の去来なのに対して、これは明らかに自分の記憶にはない光景。

その記憶の中心にいるのは、透花ではなかった。

光景が、切り替わる。

篤子と相対するチェス盤。

篤子の周囲に、ほのかに漆黒の水蒸気のようなものが立ち上っている。

見れば、透花自身の身体からも、同じ色の「それ」が漂っていた。

視界内のエマや沙友、店主や宗慈からは、それぞれ異なる色の「

それ」が放たれているにも関わらず。
ただ、向かい合う二人の放つ「それ」だけが、全くの同じ色。
盤へと目をやると、残像のようにチェス盤の上を推移していく、手を象った漆黒の「それ」。
「それ」が何を意味しているか、透花には、何故か確信があった。
それは、多分――

「どうか、しましたか？　透花さん」

怪訝な表情で尋ねてくる篤子。
その言葉に、透花は現実へと引き戻された。
長い夢を見ていたような感覚。
だが、周囲の反応からすると、意識が飛んでいたのは僅かな間だけだったらしい。
チェス盤、そして篤子へと視線を移す。
あの水蒸気のような存在は視界より消えさり、いつもの世界が戻っていた。

「ご、ごめんなさい！」

慌てて駒に手をつける透花。
再開された試合の決着がつくまで、さしたる時間はかからなかった。

「参りました」

しばしの沈黙を、その一言が破る。
ぐったりとうなだれる透花。
微笑む篤子。

「参りました。……あなたの勝ちですよ」

言葉を続けたのは、篤子。

「……ウソ」

「これは、すごいな……」

「やったー！」

ぽかんと口を空けるエマ。額の汗を拭う宗慈。はしゃぐ沙友。

憔悴しきったように椅子に寄りかかる透花。

「途中からの追い上げ、見事でした。ナイトの隙を完全に突かれましたね」

挑むような視線は変わらぬまま、だがどこか嬉しそうに篤子は敗因を分析する。

「……透花、こんなに強かったっけ」

違う。エマの呟きを透花は心の中で否定する。

チェスの腕前が上がったのではない。

ただ、透花には、見えていたのだ。

呆とした意識の中で視認した、黒の靄の形で。

篤子が、次にどんな手を望み、どんな展開を思考しているかを。

それが、勝因。

けれど、そんなことを口にして、誰が信じるだろう。

「お疲れ様、透花。大丈夫かい？」

「は、はい……」

宗慈の声に、はにかむように答える透花。
彼女は気づいていない。
自分の笑顔が、幻視の中の少女のそれと似ていたことに気付いたことに。
垣間見た光景の中の少女が、金髪の研究者に向けていた、その表情と。
今、宗慈に向けている己の微笑みが、まるで同種のものであることに。

「完敗です。こちらの手の内が全部読まれました」

そんな様子を目を細めて眺めながら、白の少女は、席を立った。

「その盤と駒、大事に使ってください」
「いいんですか？」

その言葉に、篤子は振り返りすらせず。

「『白の女王』に二言はありませんよ」

颯爽と立ち上がり、ドアへ向かった。
しかし、その背中を、小さな手が引き留める。

「あの……」

透花だった。
首を傾げる篤子の手に、透花は何かを握らせた。
篤子はそれを一瞥すると微笑みを返す。

「ありがとう。透花さん」

今度こそドアノブに手をかけて、振り返って。
「今度は近いうちに、専門の分野で戦いたいですね。津名川宗慈さん、透花さん」
最後の彼女の笑顔。
それは、子供と大人ではなく。
偶然出会ったチェスの同好としてでなく。
「次は互いに「最強」を追う者として」
純然たる「敵」に向ける、表情。
「では、近いうちに、また」
閉まる扉。響くカウベル。
「……Ｑｕｅｅｎ　ｏｆ　ｗｈｉｔｅ」
沈黙の中、透花の呟きが、宗慈の耳を撫でた。

6

桐田製薬品川研究所第十七研究室。通称高宮研。
公式見解では津名川研と同じく、ウィルスベクターを利用した遺伝性疾患の治療研究を行なっているはずの空間。
その研究室の一角には、二人の少女が蛍光色の灯りで照らし出された培養液の中で眠りについている。
少女達の名は、それぞれＥｘ－ＴＡ－０１「知佳」とＥｘ－ＴＡ－０２「知登」。
彼女達もまた、津名川研の少女達とおなじく、厳密に言えば人間ではない。
人間の本来持つ２３の遺伝子にフルプログラミングされた強化遺伝子を付加された生体兵器、「エクストラ」。
研究室の薄暗い照明の中、端末に向かうのは一人の少女。
白衣の合わせ目から覗くのは飾り気の無い白のスカートと同じ色のベスト。
無造作に切られた黒い髪。むしろ同年代の少女と比較してもむしろ幼くさえ見える顔立ち。
彼女の名は、桐田篤子。
この少女こそ、高宮研におけるＥｘ計画の進行を二倍速めたとされる桐田製薬の秘蔵っ子である。
ＰＣのキーボードをたたきながら、篤子は背後にいるはずの女性に声をかける。
「知佳と知登の他。いたんですね、私と同じ遺伝子を元に作られた、三体目のエクストラ」
「知っていたのね」
その言葉に答えたのもまた、この場に相応しからぬ若い女性だっ

た。
高宮エレン。
津名川宗慈とともに、古痕のエクストラ製造を可能とした二人目の「奇跡」の頭脳の持ち主。
弱冠二十四にしてＥＸ開発研究の主任に抜擢された才媛である。

「ええ、津名川研の、Ｅｘ－Ｔｕ－０２『透花』です」

その言葉に、エレンの表情がかすかに曇る。

「彼女と、会いました」
「……そう」
「彼女に、チェス、負けちゃいました」

淡々とした口調。
背を向けたままでは篤子の表情は窺い知れない。
ただエレンは黙ってその言葉の続きを待った。
しばしの沈黙。そして

「私、言ったんです。近いうちに自分たちの一番得意な分野で勝負をしよう、って」

込められたのは、静かな意思。
桐田篤子は、桐田製薬が保管する最優の遺伝子から生み出された実験体である。
この遺伝子はＥＸ計画にも使用され、高宮研の知佳と知登、そして、津名川研の透花を生んでいる。
端的に表現するならば、桐田篤子は、この三体のエクストラと姉妹関係にあると言ってよい。

「いいの？」

研究者としては是非を問う必要もない部分について、敢えてエレンは篤子に確認をした。

それは、他研究室の者が見たら、首を傾げる光景であったろう。

外部において高宮エレンは厳格な上司、研究にのみ心血を注ぐ冷血の類であるかのように評価されている。

しかしそれは、実際のところ誤りだ。

高宮エレンは決して必要以上の厳しさをもって研究員に接しているわけではない。

評価すべきところは評価し、個々人が最善を尽くせる環境の構築には余念がない。

無論、研究員の精神衛生への気遣いも細やかなものがある。

ただ、彼女の仕事への熱意と気遣いが研究員達を惹きつけ、結果として自律的な厳格さが生まれているだけの話。

篤子もまた、そうしたエレンに惹かれた研究者の一人であった。

いや、研究者としてだけではない。

女として。そして、人間として、彼女を尊敬する少女だった。

また、篤子は知っている。

エレンが真に厳しいのは、自身に対してのみであることに。

だからこそ。

「……もちろんです」

振り向かないまま、篤子は頷く。

エレンは、口元を歪めて篤子の肩に手を置いた。

「悪いわね」

出会った頃は笑顔と苦笑の違いもわからなかった篤子も、今は、

微笑みに隠された悲しみすら感じることができる。
だから、少女はこう言うのだ。
「……いえ。私が好きでやっていることですから」
新宿研究所の津名川研が、３体のエクストラの製造に成功し、擬似戦闘試験が開始されたのが一週間前。
それからエレンはろくに睡眠をとっていない。
表にこそ出さないが追われる立場となった焦燥もあるのだろう。
持ち前の気丈さでもって押し隠しているが、ここ数年、常に彼女といる篤子にはエレンの衰弱が容易に理解できた。
だからこそ、直接両者を戦わせ、エレンを安心させたい。
知佳と知登は、間違いなくあの三人を凌駕するはずだ。
その事実は何より、エレンの励みとなるだろう。

「……そうと決まれば、早い方がいいわね。まず反射行動プログラムの見直し。忙しくなるわ」
「わかりました……あと、知佳と知登、互いの感応能力について、データをとっていただけませんか？」
「感応能力？　エクストラがテレパシーを使うとでも？」
「同型遺伝子を持つ場合に限定して、ですが。考えられます。ヒト通常体においても双子のテレパス能力についてはある程度の結果が出ています。神経系が鋭敏なエクストラの場合、より尖鋭的な形で発現する可能性があります。Ｅｘ－Ｔｕ－０２と会って、そう感じました」
「なるほど、ね」
頷くエレン。
（あのとき。彼女は、間違いなく、私の手を、……思考を読んでい

た。そうでなければ……）

篤子は拳を口元に当て、あのときの透花を思い出していた。

（そうでなければ、あのとき彼女に）

自分の去り際に、「それ」を握らせた、もう一人の自分。

（私の欲しいものが、わかったはずがないもの）

彼女が視線を移した、その先には、アンティークの白のクイーン。

「……完璧なコンビネーションを誇る双子のエクストラ、か。いいわね、試してみましょう」

篤子の視線の先には、研究室の各員に指示を出す高宮エレン。

あの時、自分を「すてき」と呼んでくれた人。

自分を初めて、人として扱ってくれた人の娘。

白い光を照り返す金の髪。

白衣に身を包むその姿は、さながら「白の王」の如く。

浮かんだ連想に、篤子の指はいつしか白い駒を慈しむように撫でていた。

言葉にするまでもない、桐田篤子にとって、根源とも言える誓い。

彼女が「白の王」だとしたら。

自分は、それを守る最強の駒になろう。

あの日、彼女がつけてくれた名にかけて。

――自分は、「白の女王」なのだから。

1

雨が、降っていた。
男が、倒れていた。

「すまないね。ダメな、父親だ……」

少女が、すがっていた。
男が、倒れていた。

「エレン。強く、なるんだ」

男の手が、少女の頬に触れた。
少女の手が、男の手を握った。

「どんな理不尽にも負けないほど、強く……」

手が、地に落ちた。
頬が、紅で塗れた。

「――――!!」

雨が、降っていた。
それが、彼女の古痕（ふるきず）だった。

◇　◇　◇

嵐が過ぎ去ったような残骸の中に、不似合いな四人の女性。

「……行ったわね」

誰もいないプールサイドで女が呟く。

桐田製薬品川研究所第十七研究室主任、高宮エレン。

赤を基調とした水着に身を包むその姿は、白衣に身を包んだ普段の中性的な印象と裏腹に、明確な「女」を感じさせるものだった。

エレンは控えめに言っても美女の部類に入る女性である。

ただ、普段はその図抜けた才気がそれを押し隠しているだけ。

その身に半分流れる西洋の血からか、日本人らしい顔立ちの中に、通った目鼻立ちとオリーブ色の髪。

すらりとした身体のラインは、女性を感じさせるぎりぎりのラインでその繊細さを保っている。

「終わりました、ね」

応えるのは、黒髪の少女。

桐田製薬品川研究所第十七研究室主任補佐、桐田篤子。

こちらは水色のブラウスにプリーツスカート。

ただでさえプールサイドには不似合いなその異質さを、手にした武骨な拳銃が一層のものとしている。

だが。その凶器すらこの場に立つ、残り二人の少女と比べれば玩具に過ぎない。

人間の本来持つ２３の遺伝子にフルプログラミングされた強化遺伝子を付加することで、生きながら兵器となった存在。

桐田製薬品川研究所第十七研究室の主要プロジェクト、ＥＸ計画の産物。

Ｅｘ－ＴＡ－０１「知佳」とＥｘ－ＴＡ－０２「知登」。

誰が見ても可憐なこの水着の双子は、世界で最も危険な兵器の一

つ。

「……終わったわね。多少悔しい気もするけれど」

改めて周囲を見回す。

どこもかしこも陥没し、ひび割れたプールサイド。

天井にも幾つか何かが激突したようなへこみがあり、窓のいくつかは粉砕されて温い風が吹き込んでいる。

未曾有の戦闘兵器同士の戦いが起こったにしてはまあ、被害は少ない方だろう。

そう。

史上初のエクストラ同士による戦闘。

高宮研のＥｘ－ＴＡ－０１「知佳」、Ｅｘ－ＴＡ－０２「知登」。

津名川研のＥｘ－Ｔｕ－００「沙友」、Ｅｘ－Ｔｕ－０１「エマ」、Ｅｘ－Ｔｕ－０２「透花」。

２対３の戦いが、つい先ほどまで行われていたのだ。

結果は引き分け。そのことがエレンにとっては不服であった。

「２対３でここまでできたんです。上々ですよ」

篤子が気遣うように見上げてくる。

確かに、彼女の言葉ももっともである。

高宮研のエクストラは数の不利をものともせず、最初から最後まで津名川研のエクストラを圧倒し続けた。

もしも一対一であれば、知佳と知登の優位は揺るがなかっただろう。

それでも高宮にとってこの結果は満足できるものではなかった。

そもそも、エクストラプロジェクトに着手したのは高宮が一年も先。

しかも、高宮研ではエクストラの脳に手を加え、人間としての能

力を全て削ぎ落とし、兵器として尖鋭化したチューンを行っている。
感情もなく。迷いもなく。
ただ、対象の殲滅と命令の遂行に邁進する。それが高宮の生み出したエクストラだ。
故に、津名川のエクストラのようには、知佳と知登は語らない、笑わない、怖れない。
戦闘において両者の間には圧倒的な差があって然るべきであり、分けという結果は彼女にとって到底認め得ぬものだった。
漏れる溜息を押し殺し、まだ幼さの残る補佐を振り返る。
自分がこれでどうするのだ。
前を進む者が立ち止まっては、後に続く者に徒に不安を与えるだけだ。

「さあ。帰るわよ、あつ……」

瞬間。
世界が、揺らいだ。
いや、違う。
揺らいだのは、彼女自身の身体。

「エレンさん？」
「悪いわね。少し、疲れてるみたい……」

疲れだろうか。身体を支えようと足を踏み出そうとして。その足が信じられないほど重く感じることに気付く。

「あぶないっ！」

傾きかけた世界が静止する。倒れかけた身体を篤子が支えたらしい。

額に当てられる、ひんやりとした感触。
細く、白く、柔らかな手。
「やっぱり……すごい熱っ！」
慌てた様子の篤子に、微笑みを返す。傍から見たら苦笑も同然の強がりかもしれないが。
「そんな大げさにしないで。大声は、頭に響くわ」
「突然熱が出たってことはないですよね。なんでこんな状態でっ！」
決まっている。
今日を逃せば、この貴重な実戦の場が確保できないからだ。
それに比べればこの程度の不調、さしたら問題ではない。
そう言ったら、目の前の少女はどんな顔をするのだろうか。
顔を真っ赤にして携帯電話を手にしている篤子の顔を見て、エレンは口を閉じる。
「もしもし、記録係？　篤子です。エレンさんが倒れたの。車をすぐ出してください！　あと今の映像データの解析頼みます。ついでに伝言お願いできますか？　まずは高崎さんに機械開発室に「爪」の依頼を頼む、と。グリップの改良案が私の端末の一番「浅い」ところにに入っているからそれを添付して。ニューロ班にはデバイスの改良案は明後日までにエレンさんか私までメールするように。コンセプトは先日送った通りで…はい。知佳と知登は無事です。……はい」
本来なら自分が送るはずの数々の指揮を淀みなくとる少女。
普段は他人に全く関心を払わないように見える彼女は、その実よく人の挙動を観察している。

平時からエレンの指揮を観察していなければこの手際のよさはありえない。

（私よりリーダーに向いているわ、きっと）

言葉にならない軽口を残して。

自らを支える柔らかい温もりを感じながら、エレンの意識は闇に落ちた。

2

少女が目を覚ますと、脇の椅子には男が浅く腰掛けていた。

「うー。頭痛い……風邪のばかぁ」

ぺたり、と額に冷たい感覚が心地よい。

「昔に比べればまだましさ。おまえは昔から扁桃腺がでかいからな」

氷枕を脇によけつつ、

「おかげでマラソンも万年ビリだし。母さんからのお下がりじゃなければ切ってるわ」

少女は抗議の意味も込めて、ぷうっと頬を膨らませる。

「父さんの遺伝だったら切ってるのか？」

「もちろん」

間髪入れない返答に、今度は男の方が頬を膨らます。おおよそ大人の表情とは思えない。

「……ぬぅ。わざわざ仕事を休んで愛する娘の看病をする父親に、そうまで言うか？」

一瞬顔を見合わせ。どちらもともなく噴き出した。

「いじけないの。これじゃどっちが子供かわかんないわよ」
「はいはい……と。で、喰いたいものでもあるか？」
「特にないかな。あ、代わりにさ。せっかくだから授業やってよ。久しぶりに」

もぞもぞとベッドから起き出して枕元のカーディガンを羽織る。

「あのなぁ」
「お願い。聞いたらちゃあんと寝るから」
「お前に聞かせてわかるような話、か。……ド・フリーズの話はしたことがあったか？」
「ううん、聞いたことなかったと思う」

結局のところ、男は少女には甘いのだ。

「じゃあ、少し待っていてくれ」

部屋を出る男。しばらくして、戻ってきた彼の右手には、植物図鑑があった。

「この花は知ってるか？」

指差したのは、背の高い花の写真。黄色い花がちょこんと生えている。

「わかんない。どこかで見たことある気はするんだけど」
「オオマツヨイグサ。今じゃ線路脇に生えているような雑草さ。多分探せばそこらの庭にも生えているぞ」
「で、その雑草がどうしたの？」
「ド・フリーズという学者がいてね。彼はオオマツヨイグサに、た

まに変わった形の個体が見られることに興味を持った」
「変わった形？」
「そう。葉や花びらが極端に細長かったり、葉脈が赤かったりするものがあったんだ」
「四葉のクローバーみたいなものね。幸運の印って感じかな？」
「そうだね。当時の人もそう思って、さして気にもとめなかったに違いない。けれど、彼はそうは思わなかった」
「神経質だったんだ」

ベッドに腰掛け、手足をぶらぶらさせながら屈託なく笑う少女。男もつられて笑みがこぼれる。

「そうだな。かくして、その神経質さんは十年近くかけて、これらの形質の表れ方について調査を行った」
「十年！　神経質なだけじゃなくて、相当執念深かったのね」
「はは、違いない。」
「研究者って、そんな人ばっかりなの？」
「エレンはどう思う？」
「父さんを見てるとそんな気がする」
「……次、続けるぞ」
「あ、ごまかしたぁ」

咳払いを一つ。
男は、口調を改めて語りだす。

「ごほん。研究の結果、多数の株の中に葉や花弁の変化の特徴は遺伝することがわかった」
「……つまり、父さんの神経質で執念深いところは私にも受け継がれてる、ってこと？」
「そういうこと。だからあんまり父さんを悪し様に言うもんじゃな

いぞ」
「むぅ」
「で、後の研究でそうした変り種の多くが染色体異常によるものと確認された。これが、染色体の構造や数の変化によって起きる突然変異、染色体突然変異の発見とされている」
「それでおきる病気を治すのが父さんのお仕事、ってわけね」
「……まあ。そういうことに、なるんだろうな」

何気ない少女の言葉。
それによって、饒舌だった男の歯切れが悪くなった。

「この前も言ってたじゃない？　昔、死んじゃうはずの赤ちゃんを助けた話」
「ああ。そういえば、そんなことも話したっけ」

よく覚えているものだと思う。
男が少女にそのことを話したのは、確か3年近く昔のことだ。
男が若い頃、遺伝的異常により流産になるはずだった胎児に「処置」を施し、無事出産にこぎつけた。
少女に話したのは、ただそれだけのこと。
それが彼女にとっては男の仕事の全てであるようだった。
確かに。「本当の仕事」など、言えるはずもない。

「まあ、幸か不幸かあの時には「手段」があったからね」
「幸か不幸かって、いいことじゃないの？」

小首をかしげる少女。

「一概には言えないぞ。確立していない危険な方法であったことは確かだし、初めての試みだ。その後でどんなことが助かった子に起

きるか、誰も想像がつかない」
「でも何もしなければ死んじゃったんでしょ？　悪いことじゃないわ」
「そうかな？　僕は、一つの命を実験台にして、新しく得た知恵を確かめたかっただけなのかもしれない。神の不条理を理由にして、遺伝子を操作し、生命の仕組みを組み替える。それは好奇心で神の領域を侵す暴挙かもしれない」
「そんなの関係ないよ。その子はちゃんと生まれて、今でも生きてるんでしょ？」
「……なんとかね」
「じゃあ、いいじゃない。父さんは間違ってない。私が保証したげる。せっかく生まれたのにすぐ死んじゃう命をわざわざ作ったのが神様なら、そっちの方が不条理よ」

身を乗り出す少女の剣幕に、男は微笑を返す。

「そうか。それは心強いな」
「そうよ。死ぬはずだった人が生きたのよ。病気を治すのが悪いはずないじゃない」

真っ直ぐ向けられる目。
それを、どんな言葉で否定できよう。
男が返せるのは微笑みだけ。

「……さ、約束だ。もう寝るんだぞ」

立ち上がりかける男の袖を、少女が掴む。

「ねぇ、父さん」
「なんだ？」

「わたしも、父さんと同じような研究をするよ」
それは幼さに不似合いな、決意の言葉。
「なんだか、腹立ってきた。神さまに」
「まずいことを教え込んでしまったかな？」
横になった少女の額に、濡れたタオルが換えられる。
その冷たさに、目を細めて。
「もう遅いわよ。一度決めたらとことんやるのは父さん譲りなんだから」
「お前は、この仕事をやるには優しすぎるよ。その言葉だけで十分さ」
大きな掌の温もりが頬を包む。
「それに」
武骨な指越しに見えた父の表情が、一瞬。
「――おまえは僕が護るから」
少女には今にも泣きそうに見えて。
「「こっち」に至る傷痕を、おまえには、つけやしないから――」
その時、幼き日の高宮エレンは父の言葉の意味を理解できず。
そしてその答えに思い当たる頃、それが正解か確かめるべき人はもう、この世界にはいなかった。

3

額の、濡れたタオルが換えられる。
目を覚ますと、脇の椅子には少女が浅く腰掛けていた。
気がつけば、見慣れた殺風景な部屋。

「あ……。起こしちゃいましたか」

時計に目をやれば、既に午後の４時。戦闘終了時刻が２時だったから、ほぼ２時間の間眠っていたことになる。

「すまないわね。あなたも早退させてしまって」
「気にしないで下さい。私も使うあてのない有給が溜まっていましたし」

言外に「貴女ほどではないですけれど」、と言われて苦笑する。
確かに高宮エレンに、古痕に入ってから自主的に休日をとった記憶はない。
家にいても研究データの検討や整理をするのであれば、設備の揃っている研究室にいた方が効率がいい。
そしてそれは目の前の少女、桐田篤子にしても同様である。
仕事が趣味、というわけではない。ただ、仕事以外のことが二人にとっては「余分」であるのだろう。
そんな彼女にとって、体調を崩して寝込むなど「余分」の極みである。
思考に靄がかかったまま、これからやるべきことを考えて気が重くなる。
貴重な実戦データをとることができた直後だ。すべきことはそれこそ山のようにあった。

「慣れないプールで冷えたのね。年甲斐もなく水着なんて着るんじゃなかったわ」
「そんなことありませんよ。エレンさん、スタイルいいんですから」
「ありがとう。お世辞でも嬉しいわ」

身を起こしたまま携帯電話を手にとろうとして、少女の小さな手がそれを押し留めた。

「だめです。今日はちゃんと休んでいてください」

いつになく強い語調。いつも淡々と指示を聞いている姿からは想像もできない様子に、溜息をつく。
自分はこの少女にこんな態度をとらせるほど弱っているらしい。

「それじゃ。何か暖かいものでも持ってきますから」

エレンの視界の端。席を立ちかけた少女の背中に、ある光景が重なった。

「……研究者の可愛らしい助手の女の子、か」
「な……っ」

その呟きに、篤子は敏感に動きを止める。

「傍から見たらどう見えるのでしょうね？　姉妹？　それとも怪しい関係かしら」

お返しとばかりに追い討ちをかける。
やられてばかりはエレンの性に合わない。それは何も研究の領域

だけの話ではなかった。

「もうっ！　からかわないでくださいっ！！」

ちらりとこちらを振り返る頬は、目に見えて赤く。

それで溜飲を下げて。

ふとエレンの視線が遠くへと向けられる。

「……昔は憧れたわ。あなたみたいな立場」

視線の先には、机の上の写真立て。

篤子の位置からは光の加減で、何が映っているのか見ることはできず。

「そうなんですか？　……少し意外です」

「私にだって人並みに少女時代はあったのよ。あなたよりは少しおてんばだったかも」

「エレンさんの子供時代ですか。ちょっと、想像がつきませんね」

しばしこの才媛の少女時代に思いを馳せ、篤子はくすりと微笑んだ。

「こら。どういう意味？」

軽く拳をかざしながら、エレンの口元には少女と同じ、穏やかな微笑み。

「っと、怖い怖い。じゃあ、そろそろ失礼しますね、おやすみなさい、エレンさん」

高宮研究室の研究者が見たら皆驚愕するであろうやりとりを交わし、篤子は部屋を後にした。

扉の閉まる安っぽい音を聞き流し、エレンは脱力したように再びベッドに倒れこんだ。

意識の奥が、波を打っている。

静かに、揺らぐことのないはずの水面が、ゆらゆらと映るものを歪めている。

熱のせいか。

否。それだけではない。

今日、高宮エレンは初めて津名川研究所のエクストラと接触した。Ｅｘ－Ｔｕ－００「沙友」、Ｅｘ－Ｔｕ－０１「エマ」、Ｅｘ－Ｔｕ－０２「透花」。

兵器として、それはひどく歪な存在だった。

余暇の外出を楽しみ、意味のない戯れに興じ、創造者である津名川の挙動に一喜一憂する。

ある者は戦いを恐れ慄き、ある者は戦いを好み、先走る。

兵器に意志は必要ない。

まして、あんな少女の精神など。

兵器とは、戦闘の道具以外の何物でもなく。

戦闘とは、命の奪い合いでしかなく。

命の奪い合いとは、感傷や脆弱さを持つ少女の心に耐えられるものではない。

頭で何をすべきかわかっても。決して体がそれを許しはしない。

未熟さがそうさせるのか。女であることがそうさせるのか。

とにかく、少なくとも二月のあの日。

ある少女は、父の命が奪われるのをただ見ていることしかできなかった。

もし彼女が強く、心を凍らせた存在であれば回避できた破滅。

今回もそうだ。
創造主を慮る一瞬の隙すらなく篤子に襲い掛かれば、津名川が人質になることはなかった。
カタログスペック通りの性能さえ発揮すればそれは可能であったはずだ。
だが。少女の心が、それを不可能にした。
心。
それが津名川のエクストラの、致命的な欠陥。
エクストラは、兵器。それはもはや人間ではない。それを彼は認めない。
その分だけ、自分のエクストラの優位は揺るがない。ただそれだけのこと。
なのに。
理由のない苛立ちが、高宮エレンの意識に波を立てる。
浮かぶのは、津名川のエクストラの笑顔。
それはいつか去り際の桐田篤子の微笑みに変わり。
最後に、写真立ての中で、父と笑う幼い少女と重なって、霧散した。

4

手渡されたカップには、灰色がかった乳白色の液体が湯気を立てている。
お世辞にも食欲をそそる色ではない。
漂う香りは、……よく言えば草原を思わせる香り。有体に表現するならば、

「……青臭いわね」

エレンの感想は率直だった。

「これ、何なの？」
「カモミールティーを豆乳で割ったんです。味付けは蜂蜜で」

篤子の口から出たのがとりあえず聞き覚えがある単語であることに、少し安心をする。
何せ目の前で微笑んでいる少女は、一般常識から完全に隔離された世界の住人だったのだ。
得体の知れない何かを調合していても不思議ではない。
桐田篤子。
エクストラプロジェクト以前に存在していた別プロジェクトの実験体。
その計画の頓挫と、エレンとの出会いで初めて「人」として扱われるようになった少女。
以前の彼女がどのようなコンセプトで作られ、どう扱われていたかをエレンは知らない。
調べようと思えばいくらでも方法はあったが、興味はなかった。
優秀な頭脳と、裏腹な少女らしい精神、華奢な肉体の持ち主。そ

れでエレンには十分である。
それ以外の特殊な価値は付加物でしかない。
ある意味でひどく科学者らしからぬ真実の探求の否定。これもまた、高宮エレンを高宮エレンたらしめている一。
少女の微笑みに勧められてカップに口をつける。
数滴口に含んで舌の上で転がす。

「なんだかいかにも草らしい味ね」

まったく、匂いから予想できる通りの素直な味だった。

「慣れないとそうかもしれません。でも、我慢してください。天然の睡眠薬なんですから」

まるで母親が言い聞かせるような素振りでもう一口と勧めてくる少女。

「あなたハーブティーなんて、詳しかったかしら？」
「近所の骨董品のおばさまが教えてくれるんです。パックはいつも持ち歩いてるんですよ」

飲みつけないハーブティーの香りにではなく。そう笑う篤子の表情に、エレンは言葉を失った。
そう。それは、ただの微笑みだ。
けれど。
この瞬間だけを見た者の中で、その笑顔の輝きの価値を、誰が知ろう。
初めてエレンが少女と出会ったとき。その整った顔立ちは彫像のような無貌であった。
感情は、他者の感情を模倣して生起し、成長する。

彼女には模倣すべき感情などなかった。
周りの人間は全てマスクで顔を覆い、かけられる言葉は無機質な検診のみ。
彼女に与えられた娯楽はチェスのみであり、それすら機械のモニタとキーボードが介する。
その耳は愛を知らず。その肌は温もりを知らず。その目は笑顔を知らず。
故に、その心は情を知りえない。
それを変えたのが、高宮エレンであった。
実験体であった「エインシェント」を解放し、その演算能力と記憶力を理由にエクストラプログラムのスタッフとして接収。
それまで研究室の一室が全てだった桐田篤子の世界は、一変した。
「外界」の常識を教え。外出を許可し。そして、二人の共同生活が始まって。
5年前のことだ。それは、長かったのか、短かったのか。
無貌であった白の女王は今、どこかで見たような、穏やかな笑顔を浮かべている。

「変われば変わるものね。研究に必要な専門知識しか知らなかった子が」
「エレンさんのおかげですよ。第一、外出だってエレンさんが口添えしてくれなければ無理だったんですから」

桐田篤子の肉体は、それだけで古痕の最高機密の塊である。
施設外への外出はもちろんのこと、単独での買い物や散歩など許される道理もない。
その道理を無理で駆逐したのが、エレンだったのだ。

「そんなこともしたかしら」
「しました。忘れるはずないです。……私をヒトとして扱ってくれ

たの、エレンさんが初めてでしたから」

まるでその言葉を落とさぬように、握り締めるように。
胸の前で両手を合わせる篤子の姿は、祈りにも似て。

そう。
この笑顔は、それと同じ種であった。
父に、あの日病気の少女が向けていた笑顔と。
津名川に、あのエクストラたちが向けていた笑顔と。
それは、少女の心の具現。
高宮エレンが、兵器を作る上で否定した欠陥。
高宮エレンが、今の姿であるために否定した脆さ。

「エレンさん？」

その優しさは、痛い。
その想いは、熱い。
それを向けられて、受け入れられるほど。
高宮エレンは、美しくも汚れてもいない。

「篤子」

言葉を、搾り出す。

「知佳と知登、どう思う？」
「どう……って？」

頭がぐらぐらと揺れる。その言葉は、口にすべきではないものだ。
少女の想いを受け入れろ。そして、使いこなせ。
彼女はそれで、全ての力を高宮エレンの目的の成就に費やすだろ

う。

「あなたは二度、津名川研のエクストラと会っているわよね。違いは、肌で感じているでしょう？」

　些細な矛盾だ。
　口にしなければ、消えてしまうような。
　だから、蓋を開くな。押し殺せ。
　これまで5年間、そうしてきたように。

「まあ、そうですね。実力差は歴然としてますし。何より、あの子達と知佳と知登は、別のコンセプトで作られていますから」
「そう、それ。それを、どう思う？」

　言うな。言うな。言うな。

「……と、いうと？」
「憎くないかしら？　あの二人の心を殺して、兵器としてしか扱わない私が」

　――それでも。
　高宮エレンの唇は、そんな言葉を、紡いでいた。

「あなたが私を慕ってくれる理由と矛盾したことを、今の私はやっている。そうでしょう」

　篤子の表情は、わからない。
　すぐ隣にいるにも関わらず、その表情を確かめることがためらわれた。

「あなたには私を憎む権利がある。あの二人の素体を決めたときから、少なくともその覚悟はしていたつもり」

それは半分嘘で半分真実。

知佳と知登の遺伝子は、桐田の遺伝子バンクに存在する中で最も安定した優秀な遺伝子をリプログラミングしたものである。

優秀な遺伝子。それを作り出すプロジェクトの一つの結果が「エインシェント」、桐田篤子。

つまり。

高宮研究所のエクストラは「桐田篤子」の遺伝子を元に出来ている。

篤子にしてみれば、三つ子の妹にも等しい二人。

それを高宮エレンは、兵器として扱っている。

なのに桐田篤子は、高宮エレンを「自分を人として扱った女」として慕い。

あまつさえ、妹達を兵器とする手助けをしている。

なんて、矛盾。

「あなたには、私を手伝う理由なんてない」

言葉を。呼気と共に吐き出した。

もう、取り消すことはできない。

桐田篤子は離れ、高宮エレンは些細な感情を理由に、有能な右腕を失う。

ひどくシンプルで馬鹿らしい結論。

沈黙を破る、呼気。

それは、あいかわらずの笑顔と共に吐き出された。

「知佳と、知登に、心は、あります」

何の躊躇もなく。

「わたしは、エレンさんに人にしてもらいました。二人は、エレンさんが産んでくれました。どうして、憎む理由があるんですか？」

少女は、言い切った。

「あなた達を利用しているだけかもしれないじゃない」

「いいんです」

「わからないわね。それで、あなたに何の得があるの？」

「エレンさんは、優しい人ですから」

噛み合わない会話に、エレンは痛む頭を必死に働かせようとする。こちらの悩みの、基盤となっている前提から、目の前の少女は否定している。

いや。そんな前提すら、彼女にとっては否定するほどのさしたる問題ではないかのように。

「……あなた、頭はよくても人を見る目はないわ」

何とか、言葉を返す。

今の自分を見て「優しい」などと。

能天気にも程がある。

「そうかもしれません。でも、いいんです。わたしが勝手に信じてるだけです」

屈託がないのか、何も考えていないのか。

溜息を一つ。

「私は、壊れているのよ。きっと」

ベッド脇の写真立てを手にして、エレンは篤子に手渡した。

簡素な木枠の中では、無精ひげの男と金髪の少女が腕を組み、微笑んでいる。

「目の前で父親が死んだことがあるわ。トラウマなんて名前をつけるにも十分な体験でしょう？　占い師によれば、何でも私の魂の起源とやらは、『復讐』らしいわ。どんな生き方をしても、私の在り様は、その方向性に引きずられていくんですって」

少女から笑顔が消え。

エレンの言葉は、止まらない。

「私が古痕に入った理由は、つまるところ、そういうこと。復讐よ、不条理な神とやらへのね」

ただ、自らの痕を抉り出すような言葉。

深く魂に亀裂を入れる傷痕（トラウマ）。

ある男は、それこそ、人が己の起源に覚醒するための道であると言った。

起源覚醒者（オリジン）。

それこそ、高宮エレンが、エクストラの創造という禁断の知識を得ることができた理由。

元より、異常者であることこそ、ここに立てる資格である。

ならば、この先の道程は優しさを抱いたまま進めるものでなく。

歪みと、歪みをこそ真っ直ぐに貫くことができるモノのみが歩むべき道。

「だから、もう、やめておきなさい。元からろくでもない道。ここから私について行くには、あなたは優しすぎるわ」

いつか。彼女の内に生まれた少女の心は、この道を行く枷となるだろう。

それに、桐田篤子は気付いていない。

あの頃、幼かった高宮エレンがそうであったように。

ああ。

父が語っていたのは、そういう意味であったか。

今なら確信できる。

桐田篤子は自分と来るべきではない。

彼女にはまだやりなおせる。

輝かしい道へと進むことができる。

なのに。

彼女はどうして、真っ直ぐにこちらを見つめて。

「エレンさんは間違ってなんかいません。わたしが保証します」

そんな言葉を、口にしてしまうのだろう。

「悲惨な運命なら、抵抗すればいい。不条理な神なら、殺してしまえばいい。それで、いいじゃないですか」

愚かな、決断だ。ひどく愚かな決断だ。

「そんなエレンさんだから、わたしも、知佳も知登も、好きなんです。……だから、逃げません」

懸命に。一心に。その一途な想いの全てを賭けて。

彼女は敢えて、誤った道を行こうというのか。

遠くない未来の苦しみを、確約しようというのか。

「……失礼します」

扉を閉める、乾いた音。

「『わたしが保証する』……か。簡単に言ってくれたものよね」

エレンが一瞥した窓の外には、草が揺れている。

あの日、あの人と見上げた、丈の長い草が。

5

丈の高い草が揺れる線路脇。
踏み切りの下りた遮断機の前に立つ、男と少女。

「あ、発見！」
「ん？」
「あれでしょ、オオマツヨイグサ。この前話してくれた」

少女の指差した先には、線路沿いに揺れる丈の長い草。

「ああ、本当だな。そういえば、そろそろ花の季節か」
「へえ、夏の花なんだ」
「ああ」
「んじゃ、今度から通るとき、気をつけて観察しようかな」
「花を見るためなら、そりゃ無駄骨だぞ」
「なんで？」
「オオマツヨイグサは、大きい宵を待つ草と書く。別名は月見草」
「月見草って、「富士には月見草が良く似合う」って、あれ？」
「そう。あれだ。その名の通り、夜にしか咲かない」
「はぁ……そうなんだ」

がっくりとうなだれる少女。

「日の出ているうちは決して花を開かず、月の光の下でのみ人知れず咲く花。なかなか風情があっていいじゃないか」

けれど少女は、不満気に唇を尖らせる。

「……ただのひねくれものよ。夜咲いたって誰にも見てもらえないのに」

男は、いつもの苦笑を浮かべる。

「確かに、大した変わり種。が、この変わり種の花に、これまた変わり者の研究者が注目して、遺伝工学は生まれた」
「変わり者の学問ってわけね」
「ああ。人に媚びず、名誉なき事を厭わず。願わくはこの花のようにいたいものだね。ド・フリーズの後継者としては」
「それ、ただの道楽者って言わない？」
「お、踏み切り、開いたぞ」
「ごまかしたぁ。って、こら、置いて行かないのっ！」

それは、幸せな追憶。
カサブタのように触れれば心地良い痛みを響かせる、女の古い痕だった。

6

雨の音。
カーテンの隙間から漏れる薄明かり。
身を起こすと、額からタオルが落ちる。
随分と身体が軽い。
どうやら、突然の熱は、去り際もまた突然であったらしい。
汗で濡れた寝巻きを換え、ガウン代わりに白衣を羽織る。
ベッドの隅には突っ伏して寝息を立てる篤子。夜通しここにいたのだろうか。
彼女にも、白衣をかけてやる。
机には木の盆。その上にはラップのかかった椀に粥が盛ってある。
いつの間に料理など覚えたのだろう。
外食ばかりの生活の合間に、彼女なりに練習をしてきたのだろう。
これも「骨董品屋の主人」の影響だろうか。
一度くらい挨拶に行くべきなのかもしれない。
カーテンを開けると、窓の外には丈の長い草。
雨に打たれ、微かに揺れている。世話もしないのに丈夫なものだ。
薄曇りの明りは、それでも浅い眠りを覚ますには十分であったらしい。
もぞもぞと篤子が、身じろぎをする。

「……あ。ぉはょぅございます」
「悪いわね、起こした？」
「少しうつらうつらしちゃっただけですから。気にしないで下さい」
「そう」

寝起きの頼りない足取りで隣に立つ篤子は、心なしか以前よりも

大きく見えた。

「熱は下がったわ。心配をかけたわね」

「そうですか！　よかった……」

「それで、昨日のことだけど」

小首を傾げる篤子。彼女にとって、あのやりとりはさして重大な意味を持っていなかったということか。

少し拍子抜けしつつ、言葉を続ける。

「昨日言ったことは、忘れてちょうだい。つまらないことを言ったわ」

「嫌です」

即答だった。

「昨日はエレンさんが、本音で話してくれましたから。私、これでまたしばらくは、信頼してもらってるんだって、思い込めます」

言葉が、出ない。

ただ見つめるだけのエレンを尻目に、篤子は小さなあくびを噛み殺して、窓の外を見つめている。

「はあ。……バカみたいね、私」

エレンの顔に苦笑いが浮かぶ。それは、津名川がエクストラに見せるのに似た、穏やかな苦笑い。

少女時代の彼女に、父親が浮かべていたのと、同種の微笑み。

窓際に立つ二人。窓の外には、丈の長い草。

「丈の高い草ですね。なんですか、これ」
「オオマツヨイグサ。一般的には雑草扱いね。梅雨明けには、黄色い花を咲かすわ」
「ああ、これが、……私達の先祖の道を迷わせた毒草ですか」
「ええ。とんだ道草もあったものね」

見合わせたのは、姉妹のような笑顔。けれど、多分そんな表情はこれで最後。
この部屋を出たら。それよりこの身は女ではなく。まして少女の心は鋼に変えて。
高宮エレンは、待宵草の遺志を継ぐ。そのためだけの存在になる。
だから、せめて今だけは。
ほんの一時の、休息を。

「雨ね。……もう梅雨かしら」
「まだそんな時期ではないと思いますけど。ちょっと、憂鬱になりますね」
「あの子達は？」
「ほとんどダメージも残ってませんし。スリープ・モードで眠らせてありますけど」
「昨日…もっといい方法があったのかしら」
「あったかも知れませんけど。やっぱりこれで良かったんだと思います」
「何も良くないわよ」
口元に手を当てるエレン。
「……でも。それもまた良しなのかしら。とりあえずの気は済んだし」

窓の外に視点を移し。

「圧倒できなかったのは、やっぱりまだやることがあるってことよね」

「そうです！　そういう風に考えなきゃ。そんなにボーッとはしてられませんよ」

「……でも」

窓の外に視線を移し。

「今くらいはボーッとしてましょうよ。……せめてこの雨が上がるくらいまでは」

二人は、庭の丈の長い草、オオマツヨイグサを見つめる。

いつかの親娘と同じ微笑で。

ド・フリーズの娘に。待宵草の後継者に。

ほんの一夜の、休息を。

1

突然振られた雨。
飛び込んだ行きつけの店。
男を出迎えたのは、いつも通りのジャズの音色と、初老の主人。
そして、大学時代からの悪友だった。
注文するまでもなく出されるいつものグラス、いつもの銘柄。

「筒井先輩、今日は随分早いじゃないですか」
「ああ。接待でひどい相手に当たってね。適当に言い訳をして逃げてたんだ」
「なるほど。それは災難でした」

先客とグラスを交え、一口琥珀色の液体を含む。
主人はいつも通り、グラスを拭く手は止めることなく、店全体に注意を払っている。
それはあまりに自動的で、揺るぎのない挙動。
洗練された動きというのは、たとえどんな領域のものであっても美しい。

「高宮、君の方はどうだい、仕事は順調かな？」
「可もなく不可もなく、と言いたいところですが。なかなか厳しいですね。覚悟をしていたとはいえ、命に直結する仕事っていうのは、中々に心を削るもんです」
「命を扱うものが、それに緊張を感じなくなったら、終わりだと思うけれどね」
「そう言ってもらえると、多少気が楽になりますよ」

高宮賢治。

国内有数の製薬会社である、桐田製薬所属の研究員である。
筒井とは大学時代、サークルが一緒であった縁で今でも友人を続けている。
高宮の類稀なる知識と、裏腹な感傷的な言動に、筒井は好感を持っていた。

「古びたバー。雨音をバックに流れるジャズ。カウンターに座る、若い男。お膳立ては完璧ですね」

窓の外を眺めながら、高宮が笑う。

「その心は？」
「ドラマの一場面のようだ、と思いまして。これで女性が一人入ってくれれば、それでメロドラマが一つ、始まりますよ」
「……この時間に女の人かい？　それはないだろう。ここいら界隈は深夜に女性が歩く場所じゃない」
「賭けますか？　次の客が女性か、男性か」

まるで子供めいた笑顔。
それに釣られて、筒井も笑う。

「そりゃ、男性だ」
「私は女性に一票。希望的観測、というやつでもありますが」
「君が負けたら一杯おごりだとして、僕が万が一負けたら、どうする？」
「……そうですね。先輩からその女性に、とびきり歯が浮くような台詞を言ってもらいましょうか」

まったく、高宮の悪い癖が始まった。
数ヶ月前に妻帯してからというもの、高宮は何かと筒井を女性と

関係付けたがった。
彼曰く「こんないい先輩が幸せにならない理由はない」だそうだが、筒井からすれば閉口することしきりであった。
だから、これは一時の気の迷いだったのだろう。
商談がうまくいかず、自棄になっていたのか。それとも、一口のアルコールで酔っていたのか。

「了解。まあ、一言だけだよ？」
「ええ、寸劇みたいなものです。言い終わったら、私がことの顛末を説明しますから」
「……了解。ただ、男だったら、ちょいと高いのを頼むからね」
「いいでしょう」

悪い酒は、紳士を子供に戻す。
良い酒は、紳士を童心に帰す。
二人の男を酔わせていたのは、果たしてどちらであったのか。

雨の音。そして、おもむろに鳴るカウベル。
顔を見合わせる二人の男。
軋む扉の音。

デニム地のパンツ。同じ生地のジャケット。
釣り目がちの瞳が、睨むような勢いで二人を見据える。
傘も差さずにいたのだろうか。細い顎からは汗だけとは思えないほどの雫が滴っている。
額にはべったりと髪が張り付き。
雨ざらしで惨めとも思える格好でなお、その女性は胸を張っていた。
何かに。全てに。憤るように。
何かを。全てを。振り払ったように。

震えることなく、立ち尽くしていた。

高宮が目配せをする。

さて。賭けの勝負は決まり。
寸劇を始めよう。
なに、今宵限りの芝居。
大根役者が独り、恥をかくだけのこと。

「……大丈夫ですか？」
「あなた、何者？」

立ち尽くす二人。
開いたままの扉。
響く旋律は雨音に消えて。

それが、筒井敬一郎と。その妻、千里との出会いだった。

2

ＪＲ東海道線。
横浜駅から２０分ほどの駅からバスで１時間半。
山に一筋、石段が延びている。
その下に、初老の男が二人。
年のころは同じ。だが、その様相は正反対である。
一人は見事なまでに白く染まった髪を短く刈りこみ、黒のジャケットに身を包み。
一人は完全なまでの剃髪に、和装といういでたち。

「久しいな、筒井」
「こちらこそ。ご無沙汰していたね、上代」

ジャケットの男の返事に、剃髪は眉根を寄せる。

「今は神代（ジンダイ）だ。俗人、カミシロトウジは廃業したと、何度も言っているだろう？」
「そうだったな、すまないね。住職」

階段は、長い。
この先には神代住職の寺がある。
そしてその先にこそ、筒井の目的の一つがあった。
道のりは長く、鈍り始めた初老の身体には厳しい。
膝が軋み、肺は喘ぐ。
けれど、だからこそ意味があると筒井は考える。
まあ、ただの被虐趣味と紙一重と感じることがあるのも事実だが。

「しかし、ここに来るときにはいつも黒だな」
神代の言葉通り、筒井の服は上下黒で統一されている。
「目的に合わせているだけさ。普段は着ないよ」
「『黒い服は死者に祈るときにだけ着る』というわけか」
「……また、聖書か？」
神代住職は禅宗の僧でありながら聖書に傾倒しているという変り種である。
二人の出会いも最初は、寺ではなく教会である。
その時の二人は僧と古本屋の主人ではなく、公安調査庁の職員と、証券会社勤務のサラリーマンであった。
その頃から彼が引用する語といえば、聖書くらいのものだったのだが。
「いや、宇多田ヒカルだ」
神代住職は、筒井の予測を一言で切って捨てた。
「ウタダ？」
「知らないのか？　藤恵子の娘だよ。一昔前に流行した歌い手だ」
「ああ、彼女、娘がいたのか」
母親の方の名前なら筒井にも記憶があった。
二人が若い頃に歌謡曲で一つヒットを飛ばした女性歌手だった。
「世の中では娘の方が売れたことになっているぞ。相変わらず、本以外には興味がないか」
「おまえが最近の邦楽を聞くとは思わなかったね」

それは筒井にとって素直な驚きだった。
元はといえば神代は筒井以上にそうした芸能の類には縁のないはずの人間だ。

「娘の影響さ」
「娘？」

一つの驚きは、さらなる驚きによってかき消された。
このご時勢、僧が妻帯を禁じられていることなどないが、少なくとも神代に妻はいなかったはずだ。
まして、子供など……

「養子だよ。色々あって子供を引き取った。キリタの関係でな」

その言葉で、筒井は全てを悟った。

「……高宮の縁か」

高宮賢治。筒井と神代の共通の友人であった男の名。

「ああ。奴の患者だった子さ。何でも、とある実験の被検体だったとかいう話だ。まあ、ただの我侭娘だが」

医者として、ある研究施設で「画期的な」医療実験をしていたという若き天才。
彼が何をしていたのかは機密とやらで二人は知らなかったし、知るつもりもなかった。
ただ、その尽力の結果幾つもの死すべきはずだった命が永らえたこと。

そして、その才こそが彼に何らかの煩悶もたらしていたこと。
それだけは確かだった。
「娘を育てるというのはどんな苦行にも勝るな。悟りなどとは言っていられなくなるぞ」
その言葉が、筒井の脳裏に一人の青年の姿を思い起こさせる。
三人の娘を連れた若者。
筒井があの青年に目を留めたのは、彼がいつかの知己、高宮によく似た青年だったからということもあった。
高宮もまた、彼とよく似た、子煩悩なお人よしであった。
「……それじゃあ、私は外を廻ってくる。お前は適当に部屋を使えばいい」
山門を前にして、神代は踵を返し、軽い足取りで階段を下りていく。
どうやら、わざわざ話をするためだけにこの段を上っていたらしい。
公安随一の武闘派、往年の「無銘のサムライ」の身体能力は今でも健在ということか。
過去の経歴を見れば身体の鍛え方が違っていて当然なのかもしれないが、息一つ乱していない神代には感心する他ない。
「托鉢か。なら、私も何か別のことを手伝ったほうがいいかい？」
「衆生無辺誓願度　煩悩無尽誓願断　法門無量誓願学　仏道無上誓願成」
「それは？」
「喜捨を受けた時に言う文句さ。曲がりなりにも、自分達はそういう覚悟で宗教をやってる。少なくとも、そういう名目で、金を貰い、

食料を貰い、それでも地域に大事にしてもらってる。信用って奴さ。なら、全ては、自分がやらなきゃならん」

憮然とした表情を向けられて思い出す。そういえばこの男は、妙なところで助力には頑固だった。

「……そうだな。そうかもしれない」

「「汝、なお一つを欠く」。何でも自分がやろうとするのはお前の悪い所だ」

「今度こそ、お得意の聖書だな。わかったよ。お言葉に甘えさせてもらう」

「ああ。さっさと千里さんに顔を見せてやれ。彦星並に薄情な旦那だ、彼女も文句の一つや二つあるだろうからな」

手をひらひらと振るうと、神代は滑るように階段を降りていった。

3

黒白の入り混じった石を磨き、段の前に花を添える。
決して狭いとはいえない墓地に、人気はなかった。
この場所に、筒井敬一郎の妻、千里は眠っている。
長年連れ添った連れ合い、とは言えない。
あの雨の日から結婚まで、半年。
結婚生活は、およそその半分の短さだった。
特別な事故があったわけではない。
ただ、千里はあの雨の日に既に死病を患っていて、筒井はそれを知った上でなお、彼女を愛しただけの話。
小説になるような大袈裟な出来事はなかった。
ただ、平穏に日々を過ごし、平穏に終わりを告げた穏やかな記憶。
ロマンチストめいていると笑われることを承知で言うのならば、筒井にとってそれは、冬の寒さから身を暖める暖炉だった。
その薪を取りに来るために、年に一度、彼はこの場所へとやってくる。
オルゴールの螺子を巻きなおすように。
答える人のいない言葉を、冷たい石へと放つ。

「久しぶりだね。しばらく顔を見せられなくてすまなかった」

一年ぶりの墓は、住職が手入れをしていたのだろう、ほとんど箒をかける必要もなかった。
水を代え、花を挿し、墓石の前で屈みこみ、手を合わせる。
線香に火を点すと、肺をくぐもった香りが満たす。
通り一遍、型どおりの墓参りを済ませると、筒井は小脇に抱えた鞄から、その場に似つかわしくない品々を取り出していく。
ポット、コーヒーミル、サイフォン、フィルター、豆袋。

「……最近ね。君と良く似た女の子と会ったよ。客人の若者の娘だそうだ」

ミルに豆を入れ、ゆっくりと挽いていく。

ごり、ごり、と。

腕に力を込めるごとに、懐かしい香りが鼻をくすぐる。

一説によれば、人は五感の中でも特に、嗅覚によって過去の記憶を想起するという。

「目のさめるような明るさで、はっとするような深いところを突いてくる。本当に良く似ている。君の親類なのかもしれないな」

短い結婚生活の中で、毎週休日には欠かすことの無かった、朝の行程。

向かいに妻が笑っている、そんな錯覚。

詮無い幻視であると知りながら、言葉を紡ぐ。

「その親がまたいい青年でね。己の限界を真摯に見極めようとしている。本人は苦しいだろうが、見ていて好感が持てるよ」

ハンドルにかかる抵抗が消えたところで、ミルを傾け、挽いたはかりの粉末を残らずサイフォンのフィルタへと落とし込む。

ポットからの湯は、フィルタの周りから湿らすように。くるり、くるりと輪を描くように注ぎ込む。

「世界はまだ私と外をつなぐ門を閉じずにいてくれるようだ。ありがたいことだよ」

一滴。また、一滴。

「それとも君がそちらでお節介を焼いているのかな。神様をなだめすかして脅かして」

フィルタ越しに、琥珀色の液体が落ちていく。

「……なら、感謝しなければいけないな。コーヒーはどうだい？最近、ようやく美味いコーヒーが淹れられるようになってきた。まだまだ君には及ばないけれど」

ちょっとしたこだわりの重なり。
美味しいコーヒーの淹れ方。
全ては、妻から教わった手順だった。

4

「『死に至る病』、っていうのはね、癌でも心臓病でも何でもないの」
「と、いうと？」
「絶望よ」
「ああ。キルケゴールかい」
「ご名答。さすが本の虫。……じゃ、キルケゴールがどこからこの言葉を引用したかは知ってる？」
「それは知らないな」
「答えは聖書。ヨハネ十一の四曰く「主言いたもう、この病は死に至らず」って一節よ」
「聖書なのかい」
「そ。原典では死病にかかったラザロって人の姉妹にイエスが言った台詞らしいわ。でも結局、ラザロは死んでしまう」
「『死に至る』わけだ」
「そう。で、そこからは宗教物語のお約束通りというか、ラザロはイエスの奇跡で復活するんだけどね」
「まあ、パターンではあるね」
「でも私の考えじゃ本当は、ラザロって人はやっぱりただ病気で死んじゃったのよ。きっと」
「ふむ」
「ただ、イエスに会って、少しは絶望が和らいだとは思うのよ。ダテに神の子名乗っちゃいないだろうし、カウンセリングの類は得意でしょ」
「なるほど」
「病気が治るわけじゃない。体が動くようになるわけでもない。けどその瞬間から、それは死に至る病じゃなくなった。……そういうことだと思うのよ」

「ふむ」
「だから、そういう意味じゃ私の病気は治ったも同然ってヤツよ。あなたも気に病まないことね」
「……そう見えたかい？」
「見え見えよ。あなた、自分で思ってるより、顔に態度が出る方なんだから」
「ご忠告痛み入るよ」
「あなたは私の数少ない鎮痛剤ですからね。勝手に落ち込まれたら迷惑なのよ」
「光栄です、お姫様」
「……やめてよ。歯が浮きまくって総入れ歯になるわ」
「はは。ひどい言われようだな」
「まあ、経験者は語っておくけどね。「死に至る病」ってのは、世界と自分とが切り離されることからはじまるわ。だから、落ち込みそうになったら、何でもいいから世界に自分から、どーんと門を開くようなことをやるのがいいのよ」

男は知っていた。

「商売なんかがベストだけど、あなたに商才はありそうにないから……、うーん、何がいいかしらね」
「古本屋、とかはどうだろう」

女の余命があといくばくも残されていないことを。

「古本屋かぁ。いいわね、採用。売る本なら仕入れなくても私とあなたので腐るほどあるし、適度にお客もぽつぽつで、あなた好みのしか来そうにないし」

それでも、二人の意見でことさら旅行に行くようなことはしなか

った。

「仮にもこれで営業畑も経験しているんだけれどな」

「でも苦手でしょ？」

女もまた、気づいていたに違いない。

「まぁ、好きではなかったかな」

いつもと同じように朝を迎え、コーヒーを味わい、そして眠りにつき。

「ほーら。決定。本も、読んで面白がってくれる人の手に渡れば喜ぶってもんよ」

その穏やかな日々こそが、大切なのだと。

それは珈琲の香りが呼びおこす小さな日常の断片。

筒井敬一郎が胸に抱く、特別な当然だった。

5

「ハンカチ、落ちてた。あなたのだろ？」

背後から声がかけられる。

「ああ、すまないね、お嬢さん」

灰色のハンカチを差し出してきたのは、まだ若い女性だった。

筒井、顔を上げる。

「……泣いてたのか」

「いや、年寄りになると涙もろくなっていけな……」

言いかけて、筒井は気付く。自分の頬を涙は伝っておらず。それどころか、瞳は潤んですらいない。

「ああ、安心しなよ。あんたは涙は流しちゃいないよ。ただ、そんな匂いがしただけさ」

わけのわからないことを言いつつ、女は気にした風もなく筒井の横に立った。

「墓の前で思い出し泣きか。悲しいこと？」

妙な女だ。突然話しかけてきたと思ったら、ずけずけと距離を測らずにこちらへと踏み込んでくる。

しかし、何より妙なのは、それが筒井にとって不快でなかったと

いうことだ。
人により、心地よいと感じる他人との距離は異なる。
筒井はそれが人より少しばかり遠い。それは年齢のせいだけでなく、彼が生まれ持った感覚によるところも大きい。
その彼が、突然懐に飛び込んできたこの若い女を、なぜか不快と感じなかった。

「考えようによっては。私にとっては大事だけれど、もしかすると、忘れた方がいい記憶かもしれないな」

漏れた言葉は、筒井にとって偽らざる言葉だった。
過去を大切に持ち続けるということは、新たなものに伸ばす手を失うということでもあるのだから。
妻のことを大切に想う気持ちに偽りも後悔もない。ただ、それが最善だという自信もありはしない。
そして何より。
その幸せな記憶を思い起こせば思い起こすほどに、喪失の悲しみを自覚するのもまた、事実である。
果たしてそれは、幸せな在り方と、万人に胸を張れることだろうか。
そんな胸のうちを知ってか知らずか、女の目がわずかに細められた。

「……わたしは」

女は墓前に手を合わせると、そこに手折ったばかりであろう一輪の草を置いた。

「わたしには、悲しいことを覚えていられる気持ちはわからないけど。それは、とても幸せなことだと思うよ」

白詰草。
決して墓前に手向けるような花ではなかった。
「どういうことだい？」
その問いは、花の意味に対してか。女の言葉に対してか。
言葉を発した筒井にすらそれはわからなかった。
「忘れるって、心を亡くすことじゃないか。心は記憶の積み重ねでできているんだから」
返ってきたのは、花の意味ではなく、言葉への問いに対する答え。
「完全な忘却ってやつ。覚えていたいことも忘れてしまう痛み。ううん、違うな。痛くない。ただ、大事なものが抜け落ちる感覚だ。あんたには、わからないだろ」
「君には、わかると？」
「わからないね」
即答だった。
「だって、それさえも忘れてしまうんだから」
滑稽な話だ。
筒井も知識として「そういう人間」がいることは知っている。
前向性健忘。
脳に中途障害を負った人間が、その時点以降の記憶を、保持できなくなる症候群。
ただ、そんな人間がただ一人でこんな場所を歩いていることなど、

あるだろうか。
けれども、女のまとう気配が、筒井にその言葉を信じさせた。
「君は、「そういう子」なんだね」
「そ。因果なものでね。神様ってのはいつだって不条理だと思うよ」
神は、不条理。
どこかで聞いた言葉。
誰かが繰り返していた言葉。
それは誰だったろう。
「だからせめてあなたは覚えていてあげなよ。その痛みを後生大事にね」
女の笑顔は筒井だけでなく、その背後にいるものにも向けられたかのようだった。
「随分突き放した言い方だね」
「人事だからね。他人事だとは思わないけど」
女は、一言も筒井を励ましはしなかった。
それどころか、苦しいのならばそのままでいろと言い放った。
けれど
「よく似ているな」
「誰に？」
「私の妻だった人にさ」
それこそが、彼にとっては何よりの声援であった。

「その人は、記憶を持ちつづけられる人だった？」
「ああ」
彼は、誓ったのだ。
「そう。じゃ、他人の空似、か。でもいいや。楽しかったし。できるならあなたのことは忘れたくない。でもダメだよね」
女は筒井の背中を乱暴に一度叩くと、
「……だから、サヨナラだ」
ゆったりとした足取りで、墓地の奥へと消えていった。

墓標に捧げられた花。
白詰草の花言葉。――「約束を思い出して」。
「そうだったね」
そうだ。妻との別れの日に、筒井敬一郎は。
「この痛みだけは、忘れないと誓ったんだ――」

6

境内に戻ると、神代が笠を下ろしていた。
一足玉砂利に踏み込むか踏み込まないかのところで彼は筒井へと向き直った。

「今、帰りか。ゆっくり会ってきたようだな」

足音を立てたつもりは全くない。
いつものことながら、神代の感覚に筒井は舌を巻く。
若い頃は武芸百般の猛者であったという噂は嘘ではないのだろう。

「ああ。まあ、色々あってね」
「ほう。墓地で色々とは……幽霊でも出たか？」

冗談めかした口調で神代は笑う。だが、筒井はその言葉にどこか、納得していた。
なるほど。墓地に幽霊。そうであればあの雰囲気も、自分が不快と感じなかったことにも納得がいく。
なにせ、自分が苦手なのは人間と近い距離に立つことだ。幽霊ならば例外となるに違いない。

「そうかもしれない。幽霊に説教をされるとは、貴重な体験だね」

さすが僧籍と言うべきか。さして驚く風もなく、神代は筒井を寺の中へと通す。

「何があったかはわからんが。お前が「される側」になるとは珍しいな」

互いが互いを詮索することはない。話したいことは話し、そうでないことは相手に任せる。
それがこの二人の付き合い方であり、数十年来の関係となった理由でもあった。
おそらく、神代は人との距離のとり方において、自分と同類なのだろうと筒井は思う。

「私には説教なんてできないさ。聴き手が勝手に私の言葉をきっかけに、何かを掴むことはあるかもしれないけれどね」
「それは「説いて教える」のではない、ということか」
「得るのは、聴き手が「最初から持っていた」ものだ。孵る直前の卵が近いな。偶然殻が、私という衝撃でひび割れただけ」

そう。あの青年のように。
筒井は最近知り合いになった津名川という青年を思い出した。
思慮深く、同時に悩み深き青年。
筒井にとってまるで、今は亡き友人の若い頃を見ているような錯覚を覚える、そんな存在。
彼に対して筒井は幾度か助言めいたことを言っている。
けれど、それは筒井からみれば元々、彼の中で既に出ている答えを言葉にしたものに過ぎない。
もう、あの青年は気付いているのだ。けれど、それを認めるのに躊躇がある。
それを自分は、明確にしているだけだ。
けれど

「それは禅を軽んじる発言だな」

神代は一言で切って捨てた。

「そうかい？」
「禅によって得られるとすれば、それは自分の中で積み重なってきたものだ。だが、それが禅の価値を貶めるものではあるまい」

なるほど。
禅とは、教えを受け、学ぶものではないと聞く。
それは己が見つけ出していく過程であり、見つけ出そうとする意志であるという。

「……それができるなら、そいつは、大した説教というものさ」
「そんなものかね」
「そうしたものさ」

肩を竦める神代の後に続いて堂へと足を踏み入れると、香ばしい匂いが筒井の鼻をくすぐった。

「……味噌の匂いかな？」
「今日は典座がいるからな。料理は任せている」
典座（てんぞ）――寺における食事番を指す言葉である。

「ここはおまえ一人の寺じゃなかったんだね」
「まあ、そうなるか」

さて。どんな人間がこの男と寺を切り盛りしているのだろうか。
典座の立場は、寺の中でも特に高いものであると聞く。
少なくとも神代が一目を置く人間なのは間違いないだろう。
この気難しい男が寝食を共にするのみならず、食事を任せるのだ。
凡百の人間であるとは思えない。

「じゃあ、挨拶させてもらうかな」
「やめておけ。一度何かやり始めると梃子でも動かん。下手に手を出すとかみつかれるぞ」

……なるほど。やはり凡百の人間ではないらしい。

「禅僧にはそんな人間ばかりか？」
「私をお前がどう見てるかはよくわかったとして……」

苦笑い一つ。

「今料理してるのは、坊主じゃない。うちの娘さ」
「同居していたのか」
「いや。たまたま帰ってきた。いつも気が向いた時にしか帰ってこないからな。偶然だ」

だが、その苦笑いはかつての皮肉気なそれとは違う。

「……変わったな」
「そうか？」

そう。それは、筒井がなれなかった――そして少しばかり憧れた、親としての笑顔。

「険が取れた、と言うべきなのかな。禅のせいか、娘さんのせいかはわからないが」
「ただ歳をとったせいかもしれんぞ」
「なるほど。お互いに、円くはなったかもしれない」

二人の笑いが唱和する。
と。それを聞きつけたか、廊下の角から顔を出したのは
「メシ出来上がったぞ、親父殿――」
「ぁ――」
一人の、女。
短く切りそろえた髪。太いながらも切れ長の眉。
小柄な体型を、すっと伸びた背筋が感じさせない。
それは、
「あ、あんた」
間違いなく。
「君は」
墓場にいた、あの女だった。
「なんだ、知り合いだったのか？　まり」
まり。それが、彼女の名前らしい。
上代まり。なるほど、それらしい響きだと、筒井は納得した。
「いやぁ、その……なんてーか、ははは……」
目を逸らしながらの作り笑い。
墓場で出会ったときには随分と大人びて見えたが、その欠片もみられない。
双子の別人、と言われれば納得がいきそうな差だった。

「君が、上代の娘さんだったのか」
「ごめん！　悪気はなかったんだ。許してくれ、この通り！」
手を合わせ、盛大に頭を下げる女。
「おまえ、今度は何をやらかしたんだ？」
筒井が初めて聞く親としての神代の声は、気の毒になるほどの諦観を含んでいた。

7

「……ということは、「記憶」の話は？」
「ウソ」

卓袱台を囲んだ女……上代まりは、誤魔化し笑いを浮かべつつ答えた。
神代の視線に身を竦ませているあたり、罪悪感はあるのだろう。

「にしては、随分真に迫った印象があったがね」
「昔の友達に、そういう娘がいてね。その子のを真似してたら言葉がすらすら出て。ああ、倖だったらこう言うだろうな、って」

下を向いた上代まりは、ほんの少しだけ微笑んでいた。
懐かしむような。どこか苦みを自分から進んで噛み締めるような。
なるほど。
つまるところ、そういうことだったのだ。
自分がこの少女との距離を不快に感じなかったのは。

「だったら、君は僕に何もしていないのだろうさ」
「……へ？」

自分はあのとき、妻だった人を悼んでいて。
彼女はあのとき、友だった人を悼んでいて。

「あの時、私に語りかけたのは、本当に「記憶を持てない」君の友達だったんだろう」

箸を手にし、手を合わせて並べられた食事に一礼する。

上代はそんな筒井の様子に、首を傾げた。
「やってもいないものを、気に病む必要はないよ。……ご相伴にあずかることにしようか」
まあ、わからないのならばそれでいい。
わからずとも、あの時間は互いに意味を持ち、何かを刻んだことに変わりはないのだから。
「だ、そうだ。冷めないうちに喰うぞ、まり」
これまで、とばかりに神代が箸をとった。
それを合図に三人の箸が茹で上げられたうどんへと伸びる。
「ありがと、筒井さん」
呟かれた声など聞こえなかったふりをして、うどんを啜る。
柚子の香味と、ネギの歯ざわり。硬めに茹でたうどんの喉越し。
生きている。生きているから、味わえる。旨いと感じる。
これもまた、出会いの一つの形。
この出会い、一つ一つが、人を死に至る病から解き放つ。
彼女がこの身に託した願い。
世界への扉は、それを求める者に等しく開かれるのだろう。
それは、自分が拒まない限り、どこにでも最初から開かれているはずのものなのだから。
彼女の分まで、人と出会おう。一つ一つ、見つけていこう。
この手にあるものを大切にするのが筒井の持論ではあるが、それは新たなものを否定することと同義ではないのだから。
「……求めよ。さらば、与えられん、か」

新たな出会いが、己の内にあるものをより輝かせる。
妻と出会いで生まれた自分の感情が、今や手放すことのできない大切であるように。
たとえいつか別離があるとしても、出会いには意味がある。

「ん？　筒井さん、もうお代わり？」

上代まりが、厨房に立とうとする。

「……お前には、侘び寂びってものを教えなおす必要がありそうだな」
「なんだよう。このタイミングじゃ誰だってそう思うだろ。ねえ、筒井さん」

二人の姿は眩しい。
けれど、本人達はそれに気付いているのだろうか。
きっと意識などしているまい。
それは二人にとって当然な特別。
死に至る病を退ける、唯一つの特効薬。
それはとても単純なこと。
そこにある繋がりに、手を伸ばす勇気。
それを、きっとこの古い友人なら、聖書の言葉を借りて一言で表すのだろう。

『求めよ、さらば、与えられん』

今度は心の中で繰り返し、筒井は今度こそ、うどんのお代わりを催促することにした。

1

１９９７年、４月１日。
消費税増税で世がにわかに騒がしい中、年度の変わり目を尻目に、青年が屋上のベンチで大の字になっていた。
空は高く、雲は流れ。まだ僅かに肌寒い風が短く刈ったばかりの髪を揺らす。
髪を切った直後は人目を避けるのがこの男のクセだった。
周囲に人はいない。
この時間に大学の屋上を訪れる変人などそうはおらず、男はそのそうはいない変人の一人だったからだ。
視界を小さな翼が横切る。
なんということはない小鳥。それを羨ましいと思う自分がいる。
けれど、それは自分が人だからであるということを男は知っている。
自分がもしも空を行く鳥であったのなら、こうしてのうのうと寝そべっている自分を羨むに違いない。

「人になれば鳥を羨み、鳥になれば人を羨む、か」

幼い日。自分の命を救った男がいた。
そうなりたいと願った自分に、男はそうとだけ言い残して立ち去った。
真意はわからない。
その姿は今でも、自分の憧れだ。
誰にも負けぬ力と。
決して揺るがぬ正義と。
悲劇を防がんと望む意志。
そんな「ヒーロー」になりたいという気持ちは、今でも消えてい

ない。
武道を嗜むのも、医学を志したのも、形は違えど誰かを救う「ヒーロー」を目指したからだ。
けれど。
もしそこに辿りついてしまったら。
自分が、鳥になることができたなら。
自分は、人を羨むのだろうか。
目の前が真っ暗になる。
それは、決して比喩的な表現ではなく。本当に男の視界には、誰かの影が落ちていた。
どうやら、そうはいないはずの変人がもう一人いたらしい。
視線をやると、腰に手を当ててこちらを見下ろす女。
品藤聡美。大学のゼミで知り合った女生徒だった。

「荒山さんっ！」

頬をわずかに膨らませて中腰になる。
いかにも怒っていますよ、と言わんばかりのポーズ。
だが、整った顔立ちとはアンバランスな子供っぽい素振りに、漏れるのは苦笑だけだ。
ともあれ、スカートの女性相手に寝そべったままでの応対は失礼だろう。
荒山と呼ばれた男は大きく伸びを一つ、のそのそと体を起こした。
「またこんなところにいるんだから。みんな探してましたよ」
「悪いね。いつも」
「そう思うならもうちょっと真面目に実験やって下さいよ」
一応、自分がいなくても全て滞りなく進むようにメモは残していたのだが。

結果が出ようと、やはり主研究者が立ち会わない実験は問題があったかもしれない。

「少し、考え事があってね。すぐ戻るよ」

白衣の裾についた砂埃を払う。その背中に、品藤が溜息交じりの言葉を返した。

「……まあ、わかりますけどね。荒山さん。最近はキリタからの話も大変そうですし」

キリタ。

その言葉が出た瞬間、荒山の動きが止まった。

呼吸を殺し、踵から足先へと重心を移動させる。

「……なぜ、君が知っている？」

答えによっては、――

どうする？

答えによっては、どうするのだろう。ここから逃げる？　それとも、彼女を――

その逡巡などお構いなしに、品藤は続けた。

「私、秘密組織の諜報員なんです」

――

思考が停止する。

ああ。死んだ。

荒山は確信した。キリタとの関係を持ったときから、警戒は続けていた。

もし、この言葉を紡いだのが品藤聡美でなかったのなら。
彼は躊躇なく間合いを詰め、相手の両腕を折って無力化していただろう。
けれど、ダメだった。
現在、荒山鳥人に存在した、唯一の死角。
品藤聡美は右腕を挙げ。それを荒山へと向けて。

「ばんっ」

悪戯っぽい声をあげた。
向けられていたのは、細く真っ白な人差し指。
響いたのは銃声ではなく、どこか幼さを感じさせるソプラノの声。

「……は？」

と、品藤、くすりと微笑んで。

「なーんて。ひっかかったひっかかった」

停滞した時間が再び、元の早さを取り戻す。
あまりの変わりよう。とりあえず、荒山は全身から力を抜く。

「荒山さん、今日、何月何日か、ご存知ですか？」

その脱力を知ってから知らずか、品藤は荒山の隣へと立った。

「……エイプリル・フール」
「そう。四月の馬鹿。一年に一度、嘘をついてもいい日」

ふわり、と柑橘系の香水が香る。

「桐田には、私にもお呼びがかかったんです。荒山さんの話もそのときに聞いて」
「……そうか」

目を逸らして、視線を空へ。
春風とは違う温もりがすぐ傍にある。
人を遠ざけることで目指すものへと走り続けてきた自分にとっては、不慣れな温もり。
目ざとくその視線に気付いたのか
「ふふ、荒山さん、慌てるとかわいいんですね」
「なっ」

先ほどとは別の意味で荒山は硬直する。
「さ、早くいかないと、教授、かんかんですよ！　話の続きは実験の後、です」
振り返ったその笑顔が、どうしようもなく陳腐な言い方をするならば
——太陽くらい、眩しく見えて。

◇　◇　◇

十年の歳月も、空の色を変えるには短すぎる。

あの時と同じ抜けるように青い空を見上げて、女は一人、鼻歌を紡いでいた。
それはいつしか、旋律だけから、小さく歌詞を口ずさむものへと変わり。

「――あの頃きーみはー、若かったー」

錆びたフェンスに手をかけて。
ここにいた頃には既に懐メロと化していた曲を歌う。

「随分と古い歌だな」

女の背中にかかる影。振り返って口元だけで微笑む。
いつか、誰かに「太陽くらい」眩しいと思わせた笑みとよく似て。

「懐古趣味なのよ。意外？」

けれど、決定的に違う、笑顔。

「久しぶり……というべきかしらね。荒山鳥人」

2

「いらっしゃいませ」

扉につけられた鈴が軽やかな音を響かせる。

蒸しタオルを広げていた主人は、新たな客に対して深く頭を下げた。

地元の住人を相手にする床屋に、見知らぬ客とは珍しい。引越しでもしてきたのだろうか。

「申し訳ありませんが、今日は予約で四時までいっぱいなので……」

「荒山さんに伝言をお願いしに。今日、来るのでしょう？」

が。言葉が終わる前に、その客は言い切った。

改めてその客の顔を見る。

若い女だった。

真っ直ぐに伸ばされた髪は艶めいて、脱色や染色の経験がないことを伺わせた。

丸い顎やふっくらとした頬はティーンを思わせるが、髪の色艶と手入れの仕方から考えて二十代、それも後半といったところか。

一瞬で主人はそう判断する。

まだ、切るには早いだろう。

前髪は視界を邪魔するにはきれいに流されており、この長さであれば彼女は十分手入れをできるはずだ。

よって、客ではないということになる。

「あなたは？」

改めて、問うた。客でなく、かつ、荒山の名を口に出したその女性に。

「荒山鳥人の知人です」

口調を変えることなく、淡々と女は答える。

まるで実験中に話しかけられた研究員か、仕事中のサラリーマンのようだ。

いや。それはおそらく、比喩ではなく。

「荒山さん……といいましたか。そういった方は……」

「来ます。だから、お願いします」

またも、主人の言葉を女は途中で遮る。それは、断定だった。

どうする。

主人は改めて、相手を観察する。

これが、他の客を訪ねてきたのならどうということもない。

だが、荒山鳥人を名指しでやってきたのなら、話は別だ。

沈黙する主人に、品藤は気にした様子もなく言葉を続けた。

「先に屋上に行っている。彼にそう伝えてください。聡美からと言えばわかるはずです」

サトミ。その言葉に、主人は敏感に反応した。

「あなたがそうでしたか。失礼しました。こちらで待たれますか？」

「いえ。彼の月に一度の楽しみを、邪魔したくはないですから」

それだけ。

素っ気無く答えると、聡美と呼ばれた女性――品藤聡美は、主人

に背を向けた。

「あなたは、彼の、敵ですか？」

肩越しに投げかけられられた言葉に、

「それがわかっていたら、この世にもうどちらかがいませんわ。そう、思いません？」

猛禽にも似た鋭い一瞥を返して。

「伝言、お願いします」

女は今度こそ、店を後にした。

「……なるほど。話通りのお嬢さんだ」

取り残された主人は一人。ぺちり、と白の混じった頭を叩いた。

◇　◇　◇

「いらっしゃいませ」

背後で大気が動いた感覚を受け、主人は振り向きもせずに挨拶した。

誰かを確認するまでもない。

この店を訪れる客の中で、ドアについた鈴を鳴らさずに入ってこれる客は二人だけ。

そのうち完全に気配を立って主人の背後に立てるのは、一人しかいない。

「毎月第一金曜日の夕方六時三十分。相変わらず、時間ぴったりだ」
「そうか」
抑揚を感じさせない低い声が返ってくる。
「変わりませんね」
「このことぐらいさ。変わらないのは」
声の主は、主人よりも一回りは若い壮年の男であった。
長身の痩躯をスーツで覆ったその姿は、しかし凡庸な勤め人とは異質な気配を放っている。
裏路地で地元の少年や老人の髪を手入れしている床屋に、こうした存在はひどく不似合いであった。
「ちょうど、十五年になりますか。あなたがここに通いだしてから」
「この街に来てすぐだから……そうなるな」
けれど。この男は間違いなくこの店の常連であった。
初めてこの店を訪れたとき、この男はまだ青年と呼ぶべき年齢だった。
今ほどの鋭さはないものの、人を寄せ付けない気配はその時からのものだった。
終始無言であり、どのように切ったものかの希望も聞けずに難儀したことを主人は今でも忘れられないでいる。
けれど、話はそれでは終わらない。
おそらく青年の気配に当てられたのだろう、あろうことか主人は彼に千円のはずの釣りを一万円支払ってしまったのである。
単純に、札の種類を間違えたのだ。

まあ、そこまでならよくある話だ。
青年もろくに札を確認せずそれをポケットに詰め込んで帰っていったから、それは彼の責任ではない。
単に、主人の失敗。青年は思わぬ幸運を得た。それで終わり。
もしも良心があったら翌日、返しに来るかもしれない。
そういう話のはずだった。
なのに。
男は、その日の深夜。台風の中を、訪ねてきた。
折れた傘を片手に、それでも無言で、一万円札を突きつけてきた。
部屋に迎え入れ、茶を勧めながら、主人は青年に何故と問うた。
明日でもいいはずだ。
少なくともこの風雨の中、青年が無理をしてここまで来る必要はなかったはずだ、と。
青年は髪を切っていたときと同じように終始無言であったが、やがて。

「それは、ヒーローらしくないからだ」

と、答えた。
それが、主人と青年――荒山鳥人との出会いだった。

「思い出すと、つい最近のことのようです。そんな年月が過ぎたとは思えませんね」
「そうか？　俺は、あまりにも多くの時間が過ぎた気がするよ。ここ十年間で、何もかもが変わってしまった」

髪に霧を吹き、鏡越しに荒山の表情を一瞥する。
十年の年月を経て。男の表情は確かに、変化した。
いや、変化というのは適当でない。
それは削ぎ落とす過程であり、研ぎ澄ます経過であり、結局のと

ころ、純化していったに過ぎないのだから。

「変わりませんよ。あなたは」

だから、主人は断言した。

「俺こそ、ここ十年で一番変わってしまった存在だと思うがね」

いや。変わってなどいない。

「あなたこそ、ずっと変わらないままですよ。十五年見てきた、私が断言します」

男の根底にあるものは、あの嵐の日から、そしておそらくはそれより遥か昔から、何一つとして変わっていないのだ。

髪に櫛を入れると、荒山は瞳を閉じて全てを主人に任せる。

普段ならここから切り終えるまで、主人の方から語りかけることはない。

だが、今日は違う。

「先ほど、女性が、あなたに会いにいらっしゃいましたよ」

「……ほう？」

「「サトミ」と名乗っていました。「先に屋上で待っている」と伝えてくれと」

瞬間。肌をぴりぴりと冷水が刺すような錯覚を覚える。

何ということはない、荒山が鏡越しに睨んできただけのことだ。

だが、主人は揺るがない。冷水に手を浸すのは職業柄慣れている。

「品藤聡美さん、ですね？」

「覚えていたか」
「一時期、あなたの口からその名前が出なかったことはなかったですからね」
「昔の話だ」
揺るぎのなかった口調に、今は微かな苛立ちが混じる。
「華も棘もある強い女性だ。あなたが惚れるのも、無理はない」
「やめろ」
ここが潮時か。
「おやおや、それは失礼」
おどけたように肩をすくめて、主人は櫛を置き、はさみを手にした。
もし、もう一言余分にからかいの言葉を口にしていたら、主人の命はなかっただろう。
それを承知で、主人は荒山鳥人という人間で、遊んでいた。
大きく息をつき。荒山は再び目を閉じた。
肌を刺す殺気も、それによって霧散する。
「……今の知り合いで、俺を恐れないのはあんたぐらいのものだ」
「私にとっては、そこらの野犬も、よく砥がれた剃刀も、あなたも、同じようなものですから」
じゃっ。軽い音がして一房、髪が床へと落ちる。
「どれも私を殺すには十分なものです。それ以上の強さは、私の範疇外ですからね。どれも同じだけの恐怖しか私には与えない」

リズミカルな音が店の中に響く。

「なら、野犬に餌をやるのも、あなたをからかうのも、仕事で剃刀を使うのも同じことです」

「言ってくれるな」

「今更、此岸に未練のある身でもありませんし。……もっとも」

それがどんな動きであっても、練達の動きは美しいものである。

「整える人のいなくなったあなたの髪がどうなるか、それを見届けられないのは少しばかり、残念ではありますがね」

そして、それが放つ音もまた、然り。

「降参だ」

ひらひらと片手を上げて、荒山は大きく息をついた。

一瞬だけ、その表情が十年前の青年のそれへと戻った、そんな錯覚。

やはり、この男は変わっていない。変わったとすれば、それはただ。

「荒山さん。また無理をしましたね」

指の上に落ちた髪に触れ、主人の表情が曇った。

「あなたがどんな「力」を手に入れて何をしているのか、私にはわからないですが」

それでも手つきは淀むことがなく。

「これでもプロですから。一ヶ月で髪をこんなにしてしまうような力が、どんなに本人に負担をかけるかぐらい想像はつきます」

機械の正確さでハサミはリズムを刻んでいく。

「わかるものなのか」

「髪にはあらゆる不摂生が表れます。寝不足、病気、栄養失調……」

若い頃と比べればひどくクセのなくなった荒山の髪は、整える側にとっては扱いやすい。

けれどそれは、髪の勢いが失われたということでもある。

齢を重ねれば自然であることだが、この男の場合、それがあまりに急であり過ぎた。

「でも、あなたみたいなのは、初めてでした。そのどれでもなく、どれでもある。強いて言えば、命を削られた人間の髪、ですかね」

「命を削られた、か」

ヒーローを目指しているという青年の髪に手を入れるようになってから5年が過ぎたある日。

主人は、その日訪れた男が、常連の青年だとは信じられなかった。

例え一日に脱色と染色を何度か繰り返したとしても、これほどの髪にはなりえない。

一度殺した上で、無理に生まれ変わらせようと生命を弄ったならば、こうなるだろうか。

冗談でも誇張でもなく、そんな印象を受けた。

それからずっと。

主人は、髪を通して、変わらないまま変わり果てたこの男の道程

を垣間見ている。

「これが俺の仕事だ。仕方ないさ」

そう。たとえ何を言っても、この男の道は変わらない。
ヒーローを目指した青年が、ヒーローになった。
それは、そんな物語。
だから。
その道の果てに何があっても。
その夢の先には苦難しかないとわかっていても。
変わることなど、できるだろうか。

「……十年になりますか。あなたがそうなってから」

前髪に、ハサミを入れる。

「あなたが桐田をやめて、「サトミ」さんの名を聞かなくなってから」

不規則な軌道を描いて、

「もう、十年になりますか……」

黒髪が、蛍光灯を照り返す床に散らばった。

3

黒髪が、蛍光灯を照り返す床に散らばった。
発砲音が聾した耳にも音が戻り、煙の匂いも霧散する。
あのときと同じ距離。同じ二人。
屋上での会話から、ちょうど一年。
違うのは。女が男へ向けていたのは白い指ではなく、黒い銃身。

「荒山……さん」

おそらくは、背中を視認した瞬間に撃ったのだろう。
振り返った自分を見て、女の表情が強張ったのが、強化された荒山の知覚には感じられた。

「意外だな。訓練されたいい動きをしている。それが君の本職というわけか？」

掴み上げていた警備員の体を放り投げて、荒山鳥人は、品藤聡美へと向き直った。

「侵入者、と聞いていたけど、「脱走者」……しかも、あなただったとはね」
「士気に関わるからだろう。内部の、しかもたった一人の研究者風情に古痕の警備がここまでやられているんだ」

警備員の拳銃を握りつぶす。
警備員の命はすでになく。人を殺したのは初めてで、けれど荒山には興奮も恐怖もなかった。

少なくとも、それを感じることはなかった。
「エイプリル・フールの冗談……ではなさそうね」
「あいにくと、既に2分前から、世界は四月二日だ」
情の揺らぎを感じさせないその態度が、品藤にわずかばかりの冷静さを取り戻させたか。
「こんなことをして、どうするの？」
下がりかけた銃を構えなおし、彼女は「脱走者」へと照準を定める。
「正義。そいつを探しに。どうやらここにはないらしい」
向けられた銃口は意に介することもない。彼女は、撃たない。撃ったとしても、それは自分を殺せない。
「……EX計画。あなたを実験台にしていたなんて」
「勘違いしないでくれ。これは俺が言い出したことだ」
彼女にだけは、誤解されたままでいたくはなかった。だから、一刻も早く立ち去るべきこの場で、荒山は言葉を重ねた。
「科学者は、自分の作り出したものに責任を持たなければならない。それを曲げたら、俺は俺でなくなる」
何のために？
彼女に退いて欲しかったのだろうか？　違う。彼女が退かずとも自分は無傷でこの場を立ち去れた。

彼女を味方にしたかったのだろうか？　違う。それができるような女ならば、自分は惚れたりしなかった。
彼女を、傷つけたかったのだろうか？　違う。けれど。きっと。
「しかし、自分でも、ここまでとは思っていなかった。こんな力を独占して扱おうとしていたあの男に、怖気が走ったよ」
言いかけた言葉を飲み込み。代わりに出てきたのは。
「グラハムにこれ以上力を与えてはいけない。今の人類に神はいらないのだから」
荒山鳥人の言葉ではなく、「ヒーロー」の言葉だった。
「私は……」
銃口を再び下ろし、俯く品藤。
そのとき、荒山鳥人は確信した。
自分は、鳥になったのだと。
そしてやはり、鳥は人ではないのだと。
人であった頃に望んだ鳥の力が今はある。
けれど。
力を得て、限りなく「ヒーロー」に近い存在となった自分。
その代償は、
鳥が羨む人の在り方、そのものであったのだと。
立ち上がり、女の立つ出口へと歩いた。
男は、銃を構えたままの彼女を、抱きしめた。
きっと二度と触れることのない温もりを、抱きしめた。

◇　◇　◇

「結局、俺は彼女が何者なのか、わかっていなかったのだろうな」
「……これは、プレゼントしますよ。お気に入りでしたよね」
「いいのか？」
「ええ。あなたほどぴったりの人もいないでしょう」

手渡された、暗緑色の瓶。
それは「英雄」の名を冠した整髪料だった。

4

「ここにいたのか、聡美」
「荒山さん、いいんですか？　研究室の方は」
「ああ。どうにも煮詰まっちゃってね。一息入れようかと思ってさ。教授に黙って出てきた所」
「ふふ」
「――聡美」
「はい？」
「さっきの話の続きさ。君はここを出たら、キリタに行くんだったな」
「……ええ。情報部に。私には他に進むべき道なんか見つかりそうに無いですし。これで……いいんだと思います。最初から、選ぶ権利なんて、無いのかもしれないけれど。……荒山さんは？　どうするつもりなんですか？」
「……俺も、キリタに行こうと思う」
「え？」
「君とは部門が違うが、俺の専門は遺伝子工学だからな。俺はキリタの、古痕のやり方に諸手を上げて賛成できない。科学者が自分の技術に責任を持たないなんて、間違っていると思う。けど。古痕の力は、正義のために使う事だって、できると思うんだよ。『正義』なんて、照れくさい言葉だけど。……そう、思うんだ」
「荒山さん」
「なに？」
「私は、あなたがどんな結論を出しても、あなたの味方よ」
「ありがとう」

１９９７年４月１日。

エイプリルフール
四月馬鹿の日に口にした。
そのときは、何よりも真実の言葉だと、信じていた。

◇　◇　◇

「もう、十年ぶりかあ」

山手線の最寄りの駅からバスで１０分ほど。
閑静な住宅街の中にあるかつての母校は、１０年前とまったく変わらぬたたずまいで品藤聡美を出迎えた。
古びたチャペル、講堂に校舎。正門から真っ直ぐと続く道を、様々な建物を横目に進む。
午後の講義が始まったばかりなのだろう。敷地内を歩く学生は少なく、稀に講義をエスケープして雑談に興じる者がいるくらい。
なんの屈託もなく談笑する姿に、頬が緩む。

「若い頃は私も……なんて思っちゃうのがオバサンたる所以なのよね、きっと」

研究棟は講義棟から見て奥まった位置に建てられている。
銀杏並木を抜けようと足を速めたそのとき。
目に留まる、チャペルの影で抱きしめあう一組の男女。

◇　◇　◇

男は、銃を構えたままの女を、抱きしめた。
一時は毎日、毎時間、毎分と感じることを求めていたその温もりが。
きっと、二度と触れられないだろうことを、女は確信した。
女には、二つの名があった。
「品藤聡美」。
日本国籍。地方公務員の父と専業主婦の母の元、小中高と公立校を卒業、知能以外平凡を絵に描いたような女。
「エイプリル」。
米国籍。生物学的両親不明。「軍」における「剣」直属の「目」。任務は「イカロス」「K2N」の監視。
そして、「エイプリル」の意志は全てにおいて品藤聡美のそれに優先される。
今、「エイプリル」は己を抱きしめる「イカロス」を、ここに繋ぎとめよと囁いた。
だが。

「……ごめんなさい」

その日、初めて。
「品藤聡美」の意志は、「エイプリル」に嘘をついた。
二分前に終わりを継げたエイプリル・フール。
それが、力を貸してくれたのかもしれない。

「そうか」
「私は、行けない。貴方も……ここに留まるべきじゃない」

久しぶりに触れた胸板は、記憶にある以上に硬質な印象を受けた。

「お前は、それでいい」

軽く触れただけの女の手に突き放されたように。

荒山鳥人……「イカロス」と軍が名づけた男は口の端をわずかに歪めた。

「俺は、もう「荒山鳥人」という人間ではない。今の俺は、それ以外の何かだ」

その、言葉は。

「だから、お前は、ここにいろ」

間違いなく「あの日」の言葉を意識したものだった。

『あなたがどんな選択をしても、私はあなたの味方よ』

あの日、あの時の言葉。それは、「エイプリル」の言葉ではなく。品藤聡美の、心からの言葉であった。

嘘まみれの彼女が発した、ただ一つの本当のはずだった。

でも。

ああ、あれは確か。あの日は、一年前の昨日。

彼も、そして私自身も疑いもしなかった言葉。

それすらも、今は。

――四月の愚者の、独り言。

けれど。それを嘘にしないために、この男は言っているのだ。

オマエが約束をした相手はもう死んだのだと。

目の前にいるのは、約束の範囲外の「ナニカ」であると。
女の口約束を真実にするために。自分が自分であることすら否定してみせる。
まったく、この人らしい。
この人は、どこまでもヒーローであり続けようとする。
誰かを救うために。誰かを傷つけないために。
自分だけが全てを引き受けようとする。
彼を愛する人にとって、彼のその正義ほど、辛いことはないというのに。
何も口にしなかった。
言葉を紡がないことが、品藤聡美がエイプリルに対してできる、最大限の抵抗だった。
その沈黙に、荒山鳥人は何を思ったのだろう。

「……じゃあな、聡美」

数えるほどしか聞けなかった、自分の名を呼ぶ声。
それを残して、荒山は、背を向けた。
古痕に。桐田製薬という機関に。品藤聡美という女に。
小さくなる姿に、手を伸ばす。
もしも彼を行かせれば、間違いなく彼は己の正義に向かって邁進するだろう。
太陽を目指してその翼をはためかせたイカロスのように。
もしも彼を行かせれば、間違いなく彼は己の身体と精神を削り潰れるだろう。
太陽に蝋の羽根を溶かし、地へ堕したイカロスのように。
品藤聡美は、その危うさに憧れた。
エイプリルは、その危うさに、怯えていた。
だから。――止めなかった。
夜の闇に、消えた男。

取り残された女。

「――April the fool（エイプリル あなた バカよ）」

呟きが男にまで届いていたことを、女は知らない。

5

十年の歳月も、空の色を変えるには短すぎる。
あの時と同じ抜けるように青い空を見上げて、女は一人、鼻歌を紡いでいた。
それはいつしか、旋律だけから、小さく歌詞を口ずさむものへと変わり。

「――あの頃きーみはー、若かったー」

錆びたフェンスに手をかけて。
ここにいた頃には既に懐メロと化していた曲を歌う。

「随分と古い歌だな」

女の背中にかかる影。振り返って口元だけで微笑む。
いつか、誰かに「太陽くらい」眩しいと思わせた笑みとよく似て。

「懐古趣味なのよ。意外？」

けれど、決定的に違う、笑顔。

「久しぶり……というべきかしらね。荒山」

逡巡と、悔恨と、敵意と、懐古と、様々な感情が波打つのを理性の鎖で押さえ込む。

「よく、床屋の話を覚えていたな」

「昔言ってたじゃない。毎月同じ日に行くんだって」
十年前は、同じゼミの学生だった二人。
「いいご主人ね。あなたが気に入るのもわかるわ」
九年前は、恋人同士であった二人。
「……用件を聞こう。今更世間話、ということもないだろう？」
そして今は、互いに護るものを違えた二人。

荒山鳥人が、公安調査庁の職員として古痕を探っていることを品藤率いる調査部が知ったのは、五年前のことだ。
公安調査庁。
１９５２年公布の破壊活動防止法や１９９９年公布の「無差別大量殺人行為を行った団体の規制に関する法律」に基づき、日本国に対する治安・安全保障上の脅威に関する情報収集、即ち諜報活動を行う法務省の外局組織である。
暴力主義的破壊活動を行う危険性のある団体について諜報活動を行い、その結果規制の必要があると認められる場合には団体の解散や取締り等を行うことを職務とする。
桐田製薬――古痕は、表向き医薬品と医療技術の開発、研究を行うことを目的として活動している。
しかしその実、ＥＸ計画等「危険な」数々の研究を進めている、公安側からすれば「一級指定」の危険組織だ。
エクストラの能力と、古痕に関する知識を欲した公安。
古痕と戦う為の社会的な後ろ盾を欲した荒山。
利害が一致した両者が手を組むのは無理からぬことであり、かく

して。
公安調査庁調査第一部第二課特殊統括調査官（ナンバーレス・エージェント）……原則として名前の公表が為されない調査官の中でも、戸籍を始めあらゆる公的記録に残らないことを保障され、優越的な権利を以って特定の諜報活動にあたる特殊調査官……それが、今の荒山鳥人を表す肩書きとなった。
対する品藤は、今や古痕日本支部情報部部長の肩書きを背負う存在。
情報の漏洩を防ぎ、組織に不利益な情報を隠蔽するために奔走するのが、彼女の職務。
知るものと、隠すもの。
相容れない二人。
けれど、だからこそ、通じる取引がある。

「情に訴えるなんて野暮な真似をする気はないわ。ただ、交換をしようと思ってね」
「そちらの条件は？」
「ＥＸ計画の最新情報。全員のスペックも含めてね」
「話にならんな。軍ならともかく、公安にはもう既に「俺」がいるんだぞ」

プロトタイプエクストラ。
ＥＸ計画の初期、後天的に人間の成体をエクストラ化する研究がなされ、その唯一の成功例にして、研究の責任者が荒山だった。
そういった意味では、ＥＸ計画の情報はほぼ全てが公安によって把握されている。
価値のない情報では価値のある見返りは望めない。
だが。
「私は「全員」と言ったのよ。当然、高宮賢治と西条倖のエクスト

ラの情報も含まれるわ。あと、これはサービス。西条のデュラは、軍にいる」

その言葉に、荒山の表情が曇る。

「そうか。やはり軍は、エクストラの本当の価値に気づいていたか」
「ええ。バベルの鍵としてのエクストラの存在について、剣は認識している。御座にはデュラを据えるつもりでしょうね」

一つ息を吐き出して、空を見上げる。
あの日と同じように、鳥が翼を広げていた。

「いいだろう。それで、そちらの要求は？」
「津名川のエクストラが「完成」する手助けをすること」
「津名川の娘に、バベルの御座を任せるつもりか」
「高宮の娘達は芽を潰されている。今、可能性があるのは、六人だけ。一人は行方不明、一人は軍に押さえられ、一人は力を封じているんですもの。あの子達に託すしかないでしょう？」

見れば、品藤もまた、空を行く鳥を仰ぎ見ていた。

「あの力は、俺には大きすぎる。重すぎる刃なら、構えるべきでないだろう」
「それがあなたの正義ってやつかしら？」
「ああ」
「変わらないわね」
「お互いな」

あの日と同じ空。同じ場所。
だからこそ変わってしまった二人。

「体、気遣えよ」
「知ってたの？」
「情報のエキスパートは、古痕にだけいるわけじゃない」
「優秀な部下がいるようね。うちに欲しいくらいだわ」
「いつまで、持ちそうだ？」
「来年のエイプリル・フール、あなたに嘘がつけたら御の字ってところね」
「そのときには、完全な敵同士かもしれんがな」
「そのときには、覚悟していてね。完璧に騙してみせるから」
「楽しみにしよう」

背を向け、煙草を持った手を軽く上げて、荒山、屋上を去っていく。

それは、鳥の人と、四月の愚者。
二人が言葉を交わした、最後の日。

6

薄暗い部屋。
モニターの前で、一人の男がキーボードを叩いている。
複雑に暗号化されたその文字列が意味するのは、以下のようなものだった。

『二月』より報告。『イカロス』が『四月』と接触。

だが。
途中まで打ちかけた文章を全て消去して、男は首を振った。
端末の電源を落とし、カーテンを開けて空を見上げる。
夜明けの空に、鳥が行く。
真っ直ぐに。翼を広げ。まるで太陽まで届かんとするかのごとく。
その凛々しさに、眩暈がした。
吐き気がするほどの鮮烈さ。
その気高さに。
英雄（エロイカ）に相応しい髪を持つ男に。

おそらく、自分もまた、魅入られたのだろう。

「『四月の愚者』にあてられましたかねえ」

呟きを引き金に。
男はその表情を、二月のエージェントより、平凡な町の床屋へと作り変えた。

1

公安調査庁。
１９５２年公布の破壊活動防止法に基づき、日本国に対する治安・安全保障上の脅威に関する情報収集、即ち諜報活動を行う法務省の外局組織である。
彼らは暴力主義的破壊活動を行う危険性のある団体について諜報活動を行う。
その結果規制の必要があると認められる場合には団体の解散や取締り等を行うことを職務とする。
公安調査庁調査第一部第二課特殊調査官。
原則として名前の公表が為されない調査官の中でも、戸籍を始めあらゆる公的記録に残らないことを保障され、
優越的な権利を以って特定の諜報活動にあたる特殊調査官を、その立場を知る者たちは、畏敬と侮蔑を込めて呼ぶ。
――ナンバーレス・エージェント。数えられざる者、と。

◇　◇　◇

その年、一つの時代が終わった。
長い時代だった。半世紀がその元号の元に過ぎた。
その間にこの国は、多くを失い、多くを得て、気がつけば全く別のものになっていた。
「陛下の後を追うように、漫画界と歌謡界から次々と巨星が落ちる、ですか。ヤな世の中っすね」
戦後の残滓を引きずってきたものたちが、一つ一つ消えていく。

それは、人々に夢を与えた漫画家であり、人々に希望を与えた歌姫であった。

「世紀末を語るには十年ほど早いがな」

「けど、こいつを見てると、そうも思いたくなりますよ。僕達の所管じゃないですけど」

同僚から放り投げられた資料に、男は目を通す。

内容は、一見なんということもない失踪事件についてのものに見えた。

失踪したのは、ある弁護士とその一家。

前半には、依頼者の金を使い込んだ結果、消費者金融の多重債務を抱え失踪、という県警の見解が書き連ねられている。

だが。

後半には、それとは全く異なる筋書きが展開されていた。

失踪した弁護士はある新興宗教に関する問題の解決に携わっており、脱退や寄付金返還等の問題を扱っていたこと。

その教団に関する、過去取り上げられた奇妙な問題、構成、指導者の特質。

団員の当日の行動にみられる、教団ぐるみの犯行の可能性。

「まるで、小説ですね。トリヒトさんはどう思います？」

「クロだろうな」

「僕もそう思います。けれど、上はこの教団の危険性を、荒唐無稽な妄想だと笑ったらしいですね」

確かに、あまりにも荒唐無稽。

実態を隠そうとするならばあまりにもコミカルで杜撰な行動の数々。

だが、それこそが、二人の目には違和感として映った。

素人の集まりであるが故に、経験に裏打ちされたプロの目では、逆にその危険度を見誤りかねない。
実態は想像よりも遥かに根が深いのではないか。それが、二人の結論だった。

「調査しかできないってのは、因果なもんですよね。もしかしたら、僕らが観察している間に、誰かが犠牲になってるかもしれないってのに」

深く溜息をつく同僚に、トリヒトは煙草の煙を吹きかけた。
溜息を咳に変え、恨めしそうにこちらを見る視線を悠然と避わす。

「それが、俺等の仕事だろう」

彼らに許されるのは調査のみ。
ある組織の危険性を報告したところで、政府や警察がその意見に同意しなければ何もできない。
耳と目はあっても手がない。それが、公安調査庁という組織の限界だった。
おそらくは、かつての特高警察の反省なのだろう。
だが、暴走を防ぐブレーキは同時に、機敏な行動へのリミッターでもある。

「俺達は黄金バットや鞍馬天狗じゃないってことさ」
「正義の味方、か。一応、世の中の平和の役に立ちたくて、この仕事に就いたんですけど」
「多くを助けるために、少ない犠牲には目を瞑る。愛国者たる資格はあるが慈善家たらんとすることは望めない。それ以上の正義の味方はあるか？」
「僕は黄金バットや鞍馬天狗になりたかったんですよ。彼らは正義

の味方じゃないんですか？」
「あれはヒーロー。俺達（セイギノミカタ）とは、根本からして違う存在だ」
トリヒトの言葉の意図を聞こうと言葉を紡ごうとして、同僚の男は思い出す。
彼の知人が、つい先日亡くなったこと。その知人を殺したのが、トリヒトと自分が担当する組織の関係者だと疑われていること。
淡々と、ヒーローと正義の味方を区分する口調から、彼の思いは窺い知れない。
だが、この仕事の制約に苛立ちを覚えているのは、自分よりもトリヒトの方であるはずだった。

「……すみません。知ったようなことを言いました」
「構わんさ。鳥を羨む人間は、鳥になれば今度は人を羨む。無いものねだりこそ、人が人たる所以だろう」
「聖書か何かっすか？」
「そんな大したものじゃない。いけ好かない爺の戯言だよ」
指を炙るほど短くなった煙草を灰皿に押し付け、トリヒトは席を立った。
「トリヒトさん、どちらへ？」
「日付が変わった。今からは非番だ」
壁に立掛けてあったゴルフバックを肩にかけ、職場に背を向ける。
「正義の味方は一休み、日曜限定（パートタイム）のヒーローをやりに」

2

日曜の早朝、新宿の街を歩く人間はまばらだった。
胸ポケットから煙草を取り出し、ライターで火をつける。
トリヒトにとって、無意識のうちに染み付いた動きだった。
これほど身体に馴染んだ動きは、他に一つくらいしか思い当たらない。
この煙草は台湾に出張したときの戦利品。龍とつけられた名に相応しく、ひどく螺子くれた味のする煙だった。
荒事の直前にのみ吸っていた縁起物も、これが最後の一箱。
全身を満たす煙に、思考が澄み渡っていく錯覚。
まるで、小説。同僚の言葉が頭を過ぎる。
まったくだ。世界の常識は人々が考えているよりも、随分といい加減にできている。
友人が死んだ。
一番早死にをすると思っていたトリヒトを置いて、さっさと行ってしまった。
人を捨てて国を守る自分とは違う、人を生かすための技術を極めんとした男。
月並みな表現をするならば、神は愛した人間から天へと召し上げるのだろう。
だから、友人は死に、自分は生きている。
なればこの世界は、神から拾い上げられなかった者だけが集う掃き溜めか。
信仰の類を持たない聖書読みに、世を儚む資格などない。
だが、それでも世界の不条理に対する怒り程度は抱いても構うまい。
残された彼の娘は、葬儀で一滴の涙すら流さなかった。
どれほどの傷が、彼女の涙を枯らしたというのか。トリヒトには

想像することもできない。
肩にかけたゴルフバックよりも重い、死人からの手紙をポケットに捻りこむ。
肉体的にも精神的にも、これが、トリヒトにできる最後の荒事となるだろう。
後のことさえ考えないのであれば、世の中は大体うまく行くようにできている。
今まで、破滅的な方向にひた走ってきた幾つもの組織を見てきたからこそ理解できる。
彼らの強さの理由。
明日を望まず、今に全てを捧げるからこその力。
まさか、自分がそのような存在になるとは思ってもいなかった。

再度肺に煙を満たし、脳を賦活。今まで得てきた情報を整理する。

友人が所属していたのは、「古痕」という組織。
構成員の多くは、化学、物理学、考古学、民俗学、生物学、工学その他、およそ考えられる雑多な研究分野で異端と言われた研究者たち。
倫理的、資金的な問題から一般的に行うことが不可能とされる様々な研究を支援していることから、「闇の学会」とも呼ばれる。
その活動規模は全世界に及び、それにも関わらずその名が世の表側に出ることはない。
目的不明。代表不明。資金源不明。本拠地不明。
日本における活動は十年ほど前から、国内有数の製薬メーカー、桐田製薬株式会社の名で行われている。
ここまでは、公に報告をしている、「マニュアル通りの方法で」入手した情報だ。
だが、トリヒト個人は、職務とは別の手段により、これ以上を把握している。

友人が携わっていた研究は、古痕の中において無数に存在するプロジェクトの中でも、別格のものとして扱われていた。
B計画。
名称以外具体的な内容が一切不明なそのプロジェクトの中で、友人が研究したのは「人の強化」。
ヒト遺伝子に染色体を追加し、高い能力を持った新たな生物を作り出すこと。
出来の悪いＳＦのような話だが、当人達は大真面目にそれに取り組み、あろうことか一定の成果を上げていたらしい。
だが、ある時期から、プロジェクトの中心を担っていた研究者が活動の継続を放棄。
それから時を置かずして、その研究者は謎の死を遂げた。
研究者が活動を放棄したのは、桐田製薬が米国有数の製薬会社、ＡＭＳとの提携を発表した時期と一致する。
ＡＭＳは、米軍若手急進派と繋がりの強い企業であり、その資金の流れの隠れ蓑としての役割を担っている。
米軍急進派の息がかかった金脈が、研究にどのような影響を及ぼすかは容易に想像できる。
研究成果の兵器への転用。
組織の方向転換に、誰もが器用についていけるわけではない。
彼は、命を救うために身に付けた技術が、人の命を奪うことに耐えられなかったのだろう。
まったく、青臭いアイツらしい。
能力はあっても、ネズミを取らぬ猫は悪い猫。
かくて、組織の中で理想論者は現実主義者に切り捨てられた。これは多分、それだけの話。
仇など、とれるはずがない。
相手にするのは、この国ですら静観を決め込んでいる謎の組織と、表向きの同盟国たる大国の軍。
一公務員に対抗しうるものではない。

そもそもこれは単なる組織の内部紛争。この国に与える影響が存在しない以上、正義の味方には関係のない物語。

だが、今のトリヒトは、ヒーローの類。

多数のために少数を切り捨てる職業人（プロフェッショナル）ではなく、目の前にある取りこぼされたものに手を伸ばす馬鹿者（アマチュア）だ。

勝算も後ろ盾も不要。そこに、ただ「放っておけない」という意志があればいい。

理由など、ポケットの中にある一枚の手紙で十分だった。

『――お願いだ。僕がこの世に生み出した少女を、ただの兵器にしないでほしい』

3

戦いとは、ひどく簡単な比較で計算できる、単純なものである。人数。腕力。武器。多い方が勝ち、少ない方が負ける。それが、男の哲学であった。

故に、戦いとは開始時点で勝負が決しているものであり、戦いの中での駆け引きなど、およそ戦況の決定要因としては瑣事に過ぎない。

かつて、弓と馬とが戦場を席巻した時代ならばいざ知らず、銃が誕生してからの近代戦において、個人の技量は戦場を左右しなくなった。

技巧がなくとも防御不能な致命傷を生み出し、膂力がなくとも遠距離に攻撃が可能。

加えて、最低限扱えるようになるまでの訓練時間は著しく少ない。そういった特性を持つ銃は単に武器というよりも、「一流ではないが二流程度に戦える兵士を量産する」ツールとして優秀なものであり、「達人」の価値を相対的に低くした。

少なくとも、そのはずであった。

だが。であるとすれば、目の前の存在は、何であるのか。

極東の小国。平和に飼い慣らされた国民と、勤勉だが素直すぎる官憲。

酔った若い娘がスカートで街を闊歩できるほどお上品な街で、得体の知れない小娘を拘束、監視するだけの、簡単な任務のはずではなかったのか。

味方は五人。歴戦の兵士ではないが、少なくとも軍属を名乗ることができる最低限の訓練はこなした者ばかりだった。

偽装のため、防具の類はないにしろ、火器で武装した軍人が五人。

それが、ただ一人の中年に、次々と無力化されているのだ。

中年男の手には、銃などない。あるのは棒切れが一つ。

一人目がやられたのは仕方ない。
朝帰りがの酔っぱらいが、物珍しい外国人に声をかけて来ただけ。そう油断をしたところを、一撃。
ここまでは、不意を打っただけのまぐれ当たりと言えなくもない。
だが、そこから先の展開は、全く男の理解の外であった。
異常に気づき、男に掴みかかろうとした同僚が、何の脈絡もなく空へ跳ね上がる。
体重９０キロ近い身体が、イタリアンレストランのピザ生地のように宙を踊る様は冗談としか思えなかった。
残る三人はここでようやく銃を構えた。反応が遅いと叱責するのは酷だろう。男が現れてから、三秒程度も経過していない。
クレイジーな中年男はちょうど、落下している最中の９０キロの巨体の陰だ。
万有引力に引かれて間抜けな同僚が地面にキスをしてから、コインが落ちた瞬間に早撃ちガンマンがそうするように、三挺の拳銃が男を穴あきのチーズにするはずだった。
距離にして数歩。障害物がなくなれば、男に逃げ場はない。
だが。
あろうことか、中年男は這うような低い姿勢で、落下してくる９０キロの兵士の下を潜り抜けてきた。
まるで四足の獣か、虫の類。
掬い上げるようにして棒切れが振るわれ、一人、また一人と味方が地に伏せていく。
体重（パワー）も身長（リーチ）も、武器も、人数も。
何一つ、中年男が勝っている要素など、ありはしないのに。

「く……そっ」

意味がわからない。状況が理解できない。
中年男はさして力を入れているようには見えない。

にも関わらず、ただの棒で一度叩かれただけで、何故鍛えられた兵士が悶絶しているのか。
木の棒。野生の猿ですら操ることもあるような原始的なモノで、銃を所持した兵士がねじ伏せられる。
それは、男の価値観を根底から覆す悪夢だった。
しかも。男は、左手をポケットに突っこんだまま、抜こうともしない。
この状況で、余力を残し、なお優越するという理不尽。
「おい、二月っ！　襲撃、鴉か猿（マフィアスパイ）か、とにかく一匹だ。応援を！」
通信機の先にいるのは、本国から派遣されたエージェント。
得体の知れない男であり、何より剣と繋がりのある相手に借りを作るのは致命的だったが、こうなってはやむを得ない。
だが。
「失礼。私は打って出る戦闘は専門外でして。相手の目的がB（こむすめ）の鍵なら、私のところへ来ることになるでしょう。そのときに迎撃しますよ」
「冗談ではないっ」
「冗談はそちらの方でしょう。猿一匹に醜態を晒したこと、剣には報告させていただきますからね」
慇懃な言葉を最後に、通信が切れる。
眼前には、棒を両の手で弄ぶ、中年の日本人。
「お喋りは終わりか、ミスター」
ジャパニーズマフィア、ヤクザにしては、男の気配には険がない。
まるで理不尽な暴力に不似合いな、穏やかな声。片言の英語が、

男の神経を逆撫でする。
吐いた唾は避けられることなく、中年男の頬を濡らした。
「棒が似合いだな原始人（バナナ）。人の言葉を囀るなよ」
「OK、その認識が間違いだ、ミスター。こいつは、棒（スティック）じゃない」
この銃を構え、狙い、引き金を引くよりも先に、このバケモノは一撃でこちらを無力化するだろう。
それでも、男は銃に手をかける。形はどうであれ、男は確かに、任務に忠実であった。
緩慢に引き延ばされた意識の中で、男は自分に振り下ろされる凶器を見る。
まるで害意を感じない。吸い込まれるように落ちてくる棒を見て、最後に男は悟った。
自分は今まさに、叩かれるのではなく、斬られるのだということに。
そう。
男の手にあるのは、原始的な道具としての棒ではない。
どこまでも洗練された技巧によって振るわれる、それはもはや、
「刀（ソード）だ」

4

息が切れる。鼓動は跳ね回り、血がぐるぐると体内を駆け巡っている。

火の入った全身を確かめるように、トリヒトは手にした棒を振るった。

もはや肉体の一部となった、三肢の延長。

破門同然で飛び出した師の教えが、今でも自分をこうして生かしている。

なんとも、皮肉なものだと一人ごちる。

トリヒトは超人ではない。類まれな才能に恵まれているわけでもない。

鍛え、磨き、律してはいるが、身体的に人に倍する性能を誇る部分などありはしない。

カタログスペックで戦力を比較するならば、銃を持つ複数の職業軍人に、勝てる道理などない。

ならば、そのカタログスペックの外で、戦いを制する。

それが、トリヒトの叩き込まれた護身の術の提要であった。

言い換えるならば、間の制御。空の間を捉えるということ。

物理の間。人体が効率よくエネルギーを伝え、あるいは殺すことのできる間の制御。

知覚の間。通常連続性を持っていると人が錯覚している、感覚に生じる間の制御。

意識の間。理性と感情。並列する二つの精神の構成要素の間に生じる間の制御。

相手の最弱となる間で受け、こちらが最強となる間で攻める。

それらの間を間違いなく間取り、敵を間問(まど)わせ、力を間引く。

相手を負かすとは間化(まか)すことであり、それを間違えるような間抜

けは命を落とす。
身体的な不利があってもいい。生得的な枷があっても関係ない。
それが問題となる前段において、勝負を制するための戦術。
唯一無二の命で三界を駆け、四苦を抱えた五体を許し、六道に臨むための術。
宗教家（おがみや）でもあった師は、そんな精神論（オカルト）を語っていたが、若かったトリヒトにとって、そんな思想論には興味がなく。
単に、誰かを助けるための力が欲しいと、叩いた武の門だった。
その武で、師をも超えたと理解した日。
同時に、この術では数多くの人は救えぬと、師の制止に耳を貸さず、公安に身を投じた。

「鳥を羨む人間は、鳥になれば人を羨む」

まったく、今になればあの老師の語った意味が理解できる。
多くを救えると思い、選んだ立場はその実、少なきを救えない立場と同義であった。
かつての無頼としての自分であれば、友の悩みに身を投げ打って、何とでも喧嘩を張り通しただろう。
この国の平穏を守るために就いた職務に縛られ、友の命一つ救えずに、今こうして、その代償を払うかのように、パートタイムのヒーローの真似事に興じている。
全く定まらず、ふらふらと心根が揺らぐ様子を、師が見たらなんと言うだろうか。

「莫迦らしい」

意識的に思考を中断するのと、見張りを拘束し終えるのは、ほぼ同時だった。
昔から、命の危機と追想の類は切っても離れぬ連れ添いだ。

縁起などを気にするわけでもないが、益体もない思考で刃が鈍るのも間抜けな話である。
今は、友人との約束を果たすために進めばいい。
全てが済んだ後、なおもこの身が思考を許されるならば、そのときには幾らでも過去を顧みればいいだろう。
木刀を握り直し、古びた、だが埃は積もっていない廊下へと踏み込む。
罠どころか、巡回の兵もいない。
事前の情報通りであれば、このビルに詰めている兵士は、あと一人。
フェブラリー。
米軍若手急進派に属する、諜報を得意とする工作員である。
二月、という名から類推できるように、同派閥には十二名のエージェントの存在が確認されている。
そのいずれもが、志願兵審査から身体的な障害によりふるい落とされた「変わり種」。
ある者は視覚に障害を持ち。ある者は不知の病と診断され。ある者は四肢の一部が生来欠落していた。
それを拾い上げたのが、最先端の医学技術を保有するＡＭＳと、米軍若手急進派の息がかかった戦略兵器開発部。
彼らに「自由になる肉体」を与える代償として、危険な任務を与え、手駒としているという。
己を殺し、国の為に身を鉄火場に晒す。そのあり方には親近感を覚えなくもなかったが、だからといって手心を加えようとも思わなかった。
大義を掲げた人間は強い。命を懸ける覚悟のある人間は強い。
そのどちらもの条件を併せ持つ人間は、さらに強い。
この先にいるのが、その種の存在でないことを祈りつつ、トリヒトは歩を進める。

階段を登った先には、開け放たれた扉。
空城の計に慄くような繊細さは持ち合わせてはいない。
踏み入れたその内には、無数の同じ顔をした男達。

「ようこそ、トリヒトさん。天下の無銘（ナンバーレス）のサムライ（エージェント）にお会いできて、光栄ですよ」

……否。トリヒトは一瞬で、その錯覚を否定する。
上下左右が鏡張りの部屋。
そこに、柔和な笑みを浮かべた男が一人、立っていた。

5

忽然と。
まるで、影がいつの間にか生えてきたような自然さで、トリヒトの前に、男が立っていた。
矮躯の男だ。
頭頂の髪は頼りなく薄く、白髪が混じり、頬には深い皺が刻まれている。
年齢はトリヒトと同じか、もしくは多少上といったところ。
スーツに身を包んだ姿は、通常であれば、うだつの上がらない勤め人といった風情である。
しかし、鳥人の直観は眼前の対象の剣呑さを告げている。
張りつめた弓の弦を連想する。
触れれば指が切れそうな、鋭い緊張。
あまりにも「正しい」姿勢。
左右にぶれず、前後に揺らがず、まるで木が生えるように、安定した体軸。
ぞくり、と身体が悪寒を感じる。
いや、事実、その部屋は、奇妙に温度が低かった。
季節を考えてもあまりにクーラーが利き過ぎている。
四方上下鏡張りの部屋。冷え過ぎた空調。
違和感しか存在しない空間で、矮躯の男の姿のみがあまりに自然。
銃を持っている様子もない。腰にナイフを隠すでもなく下げているが、それを抜くでもない。

「随分暑がりじゃないか、フェブラリー」
「お互い名前を知り合う仲でございましたか。それでは、自己紹介は不要でございますかね」
「そちらは情報を得るために、お喋りに興じるかと思ったがね」

「貴方からは、有益な情報は何も引き出せないでしょう。私は無益な消耗が嫌いでして」

流麗な日本語だった。東洋的な顔立ちも相まって、日本人だと見まごうばかりである。

会話を続ければ、相手の流れに飲まれる。それは即ち、間を奪われるということでもある。

トリヒトの見立てにおいて、フェブラリーの間合いは、およそ完璧に近いものだった。

物理的な間はおろか、知覚の間、意識の間にも緩みがない。

先ほどの見張りは、こちらの風体、武装、人数差によって、油断……心理的な間が生じていた。

この相手には、それがない。

徹頭徹尾、欠片もこちらを侮ることなく、全ての意識をもってこちらを警戒している。

先ほどのような、一方的な掃討ではない。ここからは、対等かそれ以上に困難な戦闘を要求されると判断する。

何が、諜報を得意とする工作員か。事前に得た情報に、トリヒトは心中で悪態をつく。

眼前にいるのは間違いなく、武の達人の類であった。

「さて。ここに来たということは、B計画の阻害が目的でしょうが……」

言葉の途中。その瞬間に、フェブラリーの腕が後方へと一閃する。

しかし、それはこちらへの打突を目的としてものではなく、投擲のための挙作でもない。

武器を抜いたとしても、その挙作ではこちらに攻撃などできるはずがない。

故に、トリヒトはそれを看過した。

しかし。
次の瞬間、赤が目を灼いた。
左眼が視界を失う。光線。レーザーポインタの類。鏡の部屋。光線の反射。やられた。
後悔よりも先に、身体が警戒に身を竦ませる。
しかし、それよりもなお、フェブラリーの動きの方が早かった。
潰された左の視界に回り込むように、距離を詰められる。
間を取られた。
がむしゃらに地を蹴って距離を取る。
右の腕に熱が走る。直後に痛覚が裂傷に似た警告を告げた。
薙がれた。対象は無手。右手の機能に障害なし。まだ手は木刀を握っている。
眩む視界の中、当てずっぽうに木刀を振り下ろす。
自分ならばこの隙を逃さず、突撃をしてくるという根拠のない予測。
果たして、滑り込むように足元に踏み込んできたフェブラリーは、その牽制に身を崩す。
再び一足一刀の間合い。
左の眼は未だ白黒の意味のない刺激を伝えてくる。
迂闊。奇妙な部屋に踏み込んだ時点で警戒するべきであった。
無駄にこんな場所で自分を迎撃する必要はない。
何か理由があって、敵はこちらをこの場所に誘い込んでいるのだ。
もしも、これが真っ直ぐに自分へと向けられた照射であれば、トリヒトはその動きを察知し、回避できただろう。
彼は拳銃ですらその抜きはらい、構える腕の動きから避けることができる。
光の速さで迫るポインタにおいて、光線の発射を見てから躱すことは不可能だが、直接こちらに向けられる腕の動きそのものは可視の範囲だ。
だが、反射光までは把握することができない。

どうして、己の体から離れていく方向へ向いた手が、自分を害するなどと即座に反応できようか。

「見事」

「そちらこそ」

組み合いでなく、打突で攻めてきたのは、視界を奪った利を離さぬためか。

片目が利かなくとも、組みの間合いであれば、その他の感覚で間を図ることができる。

視覚が最も有効に作用するのは、近接戦闘ではなく、白兵戦闘である。

なるほど組み打ちから関節を取れば、それで制圧も可能だろうが、万一返された場合には目を灼いた利点を失う。

油断がない。隙がない。焦りもない。

相対するには最も厄介な手合いである。

改めて木刀を構え、距離を取る。

相手は無手。物理的な間の利はこちらにある。

剣道三倍段という俗説をそのまま信じるわけではないが、相手が攻撃できず、こちらが仕掛けることのできる間合いがあることは、単純に有利だ。

痛みは人を鈍らせる。

先制攻撃とは攻めであると同時に、相手の攻め手としての性能を削ぐ防御でもあるのだ。

今のような不意さえ打たれなければ、容易く懐に潜り込まれることもない。

搦め手を使用したということは、正道で攻めるには何かが足りぬということである。

片目は焼かれたが、距離と先ほどの攻防で速度はおよそ見当がついた。

「参りましたね。今で終わりにしたかったので」

脈絡のない言葉の途中での体捌き。

先ほどの動きから加速に要する時間を先読みし、木刀を振るおうとして、

トリヒトは、信じられないものを見た。

一歩目から、最高速度。加速などない。何か第三者の見えない腕に弾き飛ばされたかのように。

知っている。そういった身体運用があることは、トリヒト自身把握している。

地を蹴って踏み出す西洋のスポーツ科学に基づく身体運用ではなく、体重と引力をそのまま移動に生かす古流武術の歩法。

だがまさか、それを米軍の兵、しかも諜報を専門とする者が駆使するとは、誰が想像できるだろう。

滑り込むように足元へと這い寄るフェブラリーが、腰のナイフを抜きはらう。

謀られた。先ほどの一閃はブラフ。

あれが自分の最高速度であると誤認させ、必殺の一撃を当てるための布石としたのである。

だが、しかしてトリヒトとて間を制するを磨いたもの。

身を捩るに後方へと下がり、その回転を利用して相手の肩口を打ち据える。

移動速度は相手の方が遥かに上。次の瞬間に、フェブラリーのナイフはトリヒトに届く。

ならば、少しでも痛みを与え、刺突の精度と威力を減衰させる。物理的な間をとり、感覚的な間を作り出して、刃を逸らす防御とする。

果たしてみしり、と。肉を打ち、骨を軋ませる感覚が木刀を握るトリヒトの手に伝わった。

大の大人でも悶絶せしめるほどの一撃。
それを受けたフェブラリーは。

顔色一つ、変えなかった。

「な」

無意識のうちに、言葉が漏れる。
フェブラリーの動きは。手にした刃は。欠片も、微塵も、揺らがない。
意識の間を突かれたのは、トリヒトの側。
二人の中年の姿が交錯し、フェブラリーのナイフは過たずトリヒトの身体を切り裂いた。

6

脇腹に灼熱感が走る。
浅い。痛覚が反射的な回避の成功を告げる。
流血もこの程度であれば、しばらく致命傷になるまい。
あと僅かに身を逸らすのが遅ければ、出血で数分と経たぬうちに行動に支障が出ただろう。
一撃に合わせるように繰り出した苦し紛れの膝蹴りは空振り。
フェブラリーは再び距離を置き、ナイフを鞘へと納めた。
今の攻防で、汗ひとつかいていない。
痛打を受ければ、脂汗の一つ頬を伝ってもおかしくはないはずなのにも関わらず、である。
ドラッグの類ではない。使用者に特有の高揚や衝動性を、フェブラリーからは感じない。
もしもそうであれば、トリヒトは容易くこの男を制圧できただろう。
しかし、この敵は全く理性的であった。命を危機に晒しているという危機感すらないかのように。

「この期に及んで致命傷を外しますか。まったく驚かされますよ。流石、才能のある身は違う。羨ましい限りです」

違和がちりちりと脳を焼く。
おかしい。この相手は、何かが、変だ。
痛みに掻き回される思考の中で、トリヒトの経験が回転を始める。
相手は強い。
特殊な体捌き、居合にも似たナイフの扱い、間を外した一撃でなおこちらの腕を抉る膂力。
単純な強さを持ちながらさらに、搦め手を使うことに躊躇しない。

こちらの間を外し、針の穴に糸を通すように隙を突く戦法。
しかも。
こちらの攻撃を受けても、全く動きに鈍りが見られない。
まるで、こちらの一撃を受けてなどいないかのように。
勝てない。
このまま単純な戦いを続けていては、あと数手で詰められる。
だが。
トリヒトの経験が、これまでの幾多の戦いで組み上げた歯車が軋々と回っていく。
鏡張りの部屋。効き過ぎる冷房。攻撃に全く怯まぬ相手。
ばらばらのピースから、一つの意味を汲み取ろうと、思考を研ぎ澄ます。
フェブラリー。工作員。同派閥には十二名のエージェントの存在が確認されている。
そのいずれもが、志願兵審査から身体的な障害によりふるい落とされた「変わり種」。
何故彼は、階下で見張りに加勢をしなかったのか。
何故一度抜いたナイフをまた納めるのか。
何故痛みに汗ひとつかかないのか。
一つ一つの違和感を寄り合わせ、糸くずを綱へと変えていく。
それはこの劣勢から這い出すための命綱。
彼我の実力の間を埋めるための、救いの蜘蛛の糸。

「トリヒト。貴方は何故、この期に及んで、片手で戦っているのですか？」
「ポケットに手を突っ込むのが俺のスタイルだ。ハードボイルドに見えるだろう？」
そう。
トリヒトの左手はまだ、ズボンのポケットの中。

戦闘においては百害あって一利のない行為を、トリヒトはここまで通している。
否、トリヒトにとってのみ、そこには確かな意味がある。
しかしそれを今は、看破されるわけにはいかなかった。

「……驕りですか。これだから、才能がある人間は気に食わない」

フェブラリーの言葉に、初めて感情の揺らぎが浮かぶ。
理性と感情の乖離。そこに一瞬の間を見出して、トリヒトは言葉を捻じ込む。

「オマエさんには、欠落があるからかい？」

フェブラリーの表情が、変わった。

「貴様に何がわかる！　持つ者は持たざる者を理解できない。高みから見下ろしていることを知らず、憐みと侮蔑の視線を投げかける！」

表情を歪めて叫ぶ矮躯の男のその姿に。
かちり、と。トリヒトの脳で、全ての歯車の動きが噛みあった。
パズルのピースが集まり、新たな絵が描き上がる。
フェブラリーとトリヒト。二人を隔てていた力量の差。その厳然とした間が埋まったと、確信する。

「ああ、理解できないし、したくもない。生まれつき何かが欠けていたが故に、アンタがどんな苦しみを背負ったかなんてな！」

フェブラリーの怒号に、トリヒトも呼応するように声を荒げる。

「自分が不遇だから恵まれた人間が気に入らないか。僻むなよ三下。器が知れる」

怒声と共に振り回した木刀が、背後の鏡を叩き割る。

派手な音を立て、亀裂はたちまち壁全体へと走り、硝子の欠片が床に散乱した。

「見せてやろう。欠落者のアンタが羨む、俺の左手（サイノウ）ってヤツを」

7

「見せてやろう。欠落者のアンタが羨む、俺の左手（サイノウ）ってヤツを」

虚勢。それが、トリヒトの言葉に対してフェブラリーが下した結論だった。

腕に擦過傷。脇腹に裂傷。

連戦でスタミナは消耗し、痛覚はトリヒトから冷静な判断を奪っている。

こちらの怒号に容易く感情を揺らしたのがその何よりの証左。

フェブラリーが衝動的に感情を露わにしたのは演技ではない。

欠落なく生まれ、あまつさえ人に乗ずる才（ギフト）を授かる、そんな存在への嫌悪は厳選としてフェブラリーに存在し、トリヒトの言葉にそれが暴発したのは事実。

だが、それを御し、もしくは有効に利用することこそ、彼のプロフェッショナルたる由縁である。

こちらの怒りに引きずられて相手の感情を揺らすことができたならば、結果として意味がある。

最初の二手で相手を圧したものの、フェブラリーにも余裕があるわけではない。

本来であれば、二手目で戦いを終えなければならないところであり、今なお相手が立っていることは、ともすれば致命傷になりかねない事態だった。

だが、それを気取られてはならない。

怒りを煽り、実力差を強調し、相手に攻め急がせて、無力化する。

上司からは可能であれば捕縛を命じられていたが、場合によっては殺害もやむを得ない。

八つ当たりの暴挙とはいえ、鏡を割られたのは痛手だった。

こうなった以上、ナイフは最後の瞬間にしか使えない。

「いいでしょう。見せてもらいましょうか、その奥の手とやらを」
木刀と無手。変わらずリーチはトリヒトの側に分がある。
二度は不意を打って懐に潜り込んだが、次はそうはいくまい。
いかにその点を克服するか。そんなフェブラリーの内心の逡巡を知ってか知らずか。
トリヒトは、無造作に、木刀から手を放した。
「ああ、そうさせてもらおうか」
理解できない行動だった。
今までの攻防で、体捌きにおいてはフェブラリーの側に軍配が上がっていることは自明。
トリヒトにとって最大の利点であるリーチと武器を、何故捨てる必要があるというのか。
木刀での一撃にこちらが反応しないのを見て、打撃が無効と勘違いをしたのか。だとすれば、あまりに蒙昧。
いずれにしろ、フェブラリーにとっては、思ってもみない好機であった。
やはり、トリヒトは冷静な判断を失っている。
この状態で、どのような奥の手があったとて、事態を挽回するには至るまい。
トリヒトの左手は未だポケットの中。
おそらくは、そこに何か凶器の類を仕込んでいるのだろう。
ナイフか、大きさからすれば、小型拳銃という可能性もある。
しかし、どんな武器であるとしても、使われる前に、手首の腱を断てば使用不可能。
勝てる。
公安調査庁最強の男と言われた人間も、所詮はこの平和な国で恵

まれた生に耽溺した者。
負けるはずがない。
トリヒトが無造作に踏み込む。
先ほどのフェブラリーのように、反撃を意に介さぬ前進。
単なる物真似だとすればあまりに愚昧。
先のフェブラリーの前進は、肉を斬らせて骨を断つといった精神論で為したものではない。
フェブラリーにのみ許された、彼のみの戦術。
同じことをしようすれば、無駄に相手の刃に身を晒すのみ。
トリヒトの左腕が動く。
ポケットから抜きはらわれた左手には、親指ほどの何か。
それが自分へと向けられる前に、フェブラリーのナイフが鞘から放たれる。
手首。一閃。固い感触。腕時計にでも当たったか。だが、確かな手ごたえ。断った。確信があった。
噴出する赤が、べっとりとフェブラリーの胸を濡らす。
落ちる、左手にあった「何か」。
力を失ったそれを、トリヒトは右手で支え、ゆらゆらと突き出した。
赤子のそれほどにも満たない、掌打とも呼べない一撃が、フェブラリーの脇腹を掠め。
そのまま、トリヒトは、壁にもたれかかるように、後ろへと倒れこんだ。
落ちたトリヒトの「奥の手」を一瞥する。
それは、何の変哲もない万年筆だった。

「これが、貴方の奥の手ですか」
「……ペンは剣より強し、なんていうのは、どうだ」
「何が才能を見せる、ですか。失望しましたよ。これが日本の守りの誇る人間だというのですから、笑えません」

トリヒトの手首からの出血はひどく、見る間に床を赤い液体が濡らしていく。
この出血量だ。殺すつもりはなかったが、もう助かるまい。
あまりに呆気ない幕切れ。ひどく冷めた感情が胸を満たす。

「遺言があれば聞きますが」
「……一つ聞きたい」
「どうぞ」
「スパッドは、小娘一人監禁して何を企てている？」

最後の質問がそんなことか。

「平和を。アレは、誰もが誤解なく理解しあえる世界を作ろうとしているのですよ。理解はしてもらえないでしょうが」
「子供一人犠牲にして生み出す平和か」
「あれは最後の犠牲です。儀式に捧げる子羊と言い換えてもいい。世界中、互いの想いが理解できぬが故に死ぬ何万を考えれば、安い代価でしょう」

この言いぶり。この男はおそらく、B計画の内容について、ある程度の情報を掴んでいるのだろう。
無論、正確なところを理解していたからといって、それを現実問題の危機として認識できるかどうかは疑わしい。
何と言っても、フェブラリー自身、オカルトめいたこの計画の実現可能性には若干な疑問を呈しているところであるのだから。
だが、しかし。
B計画の鍵である小娘の異能の存在が、その計画が完全に荒唐無稽なものではないことを示している。
計画の核であると同時に、計画を推進せしめるための援助を受け

るための証拠。それが、フェブラリーの守る少女の価値だった。

「それが、スパッドと、その使徒が掲げる正義ということか」

しばしの逡巡。

スパッド。

自らの上司であり、欠落を抱えた自分を拾い上げた男の思考を、フェブラリーは完全に把握しているとは言い難い。

両の手と色素を持たず生まれ、親に捨てられ、ただ己の才覚によってその欠落を跳ね除けて立ち上がった男。

権力、財力、暴力。欠落を埋めるようにあらゆる力を求め、一方で世界の平等を望む危うい均衡。

だが。それでも他に信じるに足るモノもない。

自由と平等を謳う母国において、厳然と存在する不平等を覆しうる旗印は、あの男しかありえない。

「世界を平等に変えるのは、持つ者ではありえない。欠落して生まれた者こそ、その価値を知っているのですから」

フェブラリーの言葉に、トリヒトは口元を力なく歪める。

「そうして、鳥になることを望むのか。鳥になればまた、人を羨むというのに」

「死人の口から語られる言葉に、揺らされるほど青くはありませんよ」

答えてから、気付く。

トリヒトが手首を斬られてから、どれほどの時間が経過した？

これほどの血が流れ出して、人は言葉を発することができるのか？

「死人、か」

その違和感が結実する前に。

致死量をとうに超える血を流したはずのトリヒトは、おもむろに身体を起こした。

「その認識が間違いだ」

一歩。確たる歩みで、こちらへと踏み出す。

防御を。間合いを。

脳からの指示に、何故か、腕と脚が従わない。

否。この感覚を、知っている。

フェブラリーが、卓越した戦闘技巧を持ちながら、戦闘を専門としなかった理由。

謀られた。

こちらの欠落。その間を、抉られた。

フェブラリーの持つ欠落。

ＣＩＰＡ。痛覚と発汗機能に関する生得的な障害。

彼は、己の身体に及ぶあらゆる危害に対する痛覚を持っておらず、また、それ故にそこに対応するための体温調節機能が機能していない。

苛烈な運動によって上がりすぎた体温を低下させることのできる環境でしか戦闘をこなすことができず。

また、自己の損傷状態を常に視覚等で把握しなければ、ダメージの深さを理解できない。

故に、元々ダンススクールとして使われていた鏡張りの部屋で空調を効かせ、迎撃を行った。

ナイフを最も得意としながら、ぎりぎりまで使用しなかったのは、揉み合いになった際に自らの死角に傷がつくことを避けるため。

組み合いでなく、打撃にこだわったのも同じ理由。

常に鏡で己をモニタリングし、自らの出血には意識を払っていたはずだった。
だが、今のこの状況は、出血による虚脱症状。
いつ。どのタイミングで、攻撃を受けた？
何故自分はその事実に気付かなかった？
相手は、一度として刃物を振るってはいない。こちらのナイフは、一度も奪われていない。
その状況で、どうやって、これだけの出血を引き起こす一撃をトリヒトは繰り出した？
そして何より。
あれだけの出血で何故、トリヒトは立ち上がることができるのか？
トリヒトが、左手に嵌めていた手袋を外す。
そこにあったのは、

「……義手……っ」

プラスチックの類で作られた、作り物の人形の手。

「切られても痛みなどない。沢山の暗器を仕込んでも怪しまれない」

トリヒトが右手で肘に触れた瞬間、左手の掌から刃が飛出し、再び収納される。
手首からは、赤い液体。だがそれも、おそらくはダミー。

「こいつが俺の刀、世界に誇る欠落（サイノウ）だ」

理解する。
攻撃を受けたのは、木刀を放り投げた後の攻防。
万年筆を握って、奥の手は左手に握る武器だと思わせ、手首を断たせた。

ダミーの返り血でこちらの身を濡らし、死に体を装って、返り血を浴びた部分を、義手に仕込んだ刃で斬りつけ。
あとは、出血が一定の量に達するまで、無駄話で時間を稼がれた。
衝動的に鏡を壊したと思ったのも、おそらくは計算の上。
返り血で服が濡れていても、正面に鏡があれば、血の染みの広がりでフェブラリーは己の出血に気付いただろう。
鏡の破壊は、それを防ぐための、予防線。
迂闊だった。
そして、何より。
相対していた者が、自分たちの望みを断ったのが、自らの同種であることが、フェブラリーを打ち据えた。

「……私は、誰かの痛みっていうのを、知りたかっただけなのですがね」

トリヒトは笑う。
誇るように。フェブラリーの懊悩を笑い飛ばすように。

「フェブラリー。痛みっていうのが知りたくて苦しんだなら、その感覚が、痛みだろう」

左手指に走る青白い光。
フェブラリーの意識を閉じたのは、緩く触れられた、トリヒトの左手だった。

8

最上階の部屋には、二人。
ベッドに横たわる少女と、一人の青年。

「……アンタは、何だ？」

部屋に踏み込んだトリヒトに、青年は俯いたまま問いかける。
痩せこけた頬。青白い肌。目の下の隈。
憔悴と諦観。
虚ろな目からは、単に拘束されたことによるストレス下というだけでは説明のつかない「何か」があった。

「君が軍の味方なら、俺は君の敵ということになるな」

青年が顔を上げる。

「二月は毎日顔を変えてこの場所にやって来る。信用できない」
「信用せずとも構わないが、今を逃せばまた、軍の増援がやってくるぞ」
「この子を解放するのか？」
「そういう約束でね」
「コイツは、軍が一枚噛んでいる計画の中核だ。オレもその歯車の一つだが、代えが利く。だが、この子はそうじゃない」
「それで？」
「こいつを連れ出せば、軍が世界の果てまでアンタを追い回すぞ」
「確かに高いハードルだが、約束を破っていい理由にはならないな」

麻酔薬か何かが含まれているのだろう。
ベッドの少女の腕から点滴を抜き、トリヒトは彼女の拘束具を外していく。

「どれだけの金を積まれた？」
「死人から金は取れないな」
「正義感か？」
「そいつは違うな。今は正義の味方はお休みだ」
「なら」

抱え上げた少女はひどく軽く、トリヒトには、これが軍に重要視される存在だとは俄かに信じがたい。
友人の手紙によれば、この世界には存在しないはずの技術によって遺伝子を組み替えられた、異能の担い手。
本来死すべき命を、友人が救った際に、そういった形にする他、手段がなかったのだという。
結果、実の両親によって軍に売られ、実験動物となる運命であった、人ならざる人の少女。
トリヒトは、個人を捨てて国を救うことしかしてこなかった人種である。
そんな男に対して、友は、高宮賢治は、この少女に兵器ではなく、人としての幸せを与えよと言った。
それは即ち。

「君は、この娘さんの名を知っているか？」

青年の口から語られたのは、少し風変りな名。
苗字が漢字三字で、名前は平仮名で二字。
少女の名を確認し、自分の苗字と続けで呟いてみる。
それが、今日から自分の娘となるモノの名前。

「行くあてがないなら、君も来るか？　名は変えて、しばらくは不自由な生活をすることになると思うが。それでも、軍からの安全は約束しよう」
「……アンタは、何だ」
「ヒーローだよ。ただし、パートタイムの偽物だが」

かくて、ここで幾つかの物語が終わる。
新山悠太。高宮賢治の後継者として軍に確保された若き研究者が失踪。
上代藤次。公安調査庁で「トリヒト」と呼ばれたエージェントが姿を消し。
ＥＸ－ＴＡ－００。高宮賢治の作り出した、古痕初のエクストラは存在しなかったことになり。
Ｂ計画と呼ばれた、古痕と軍の共同プロジェクトは、中核となる存在を失ったことで頓挫した。

かくて、ここから幾つかの物語が始まる。
荒山鳥人。起源覚醒の資質を持った青年が、古痕に接触。
神代藤次。二人の養子を連れた一人の僧が、鎌倉の寺を継ぐこととなり。
上代まり。ほんの少し人の感情の機微に敏感な少女が、錬鉄の職人の下に弟子入りし。
凍結されたＢ計画は、高宮賢治の娘の古痕入団を契機に、その鍵を作り出すための研究を「ＥＸ計画」と名を変えて、軍に内密に始動した。

パートタイム・ヒーロー。

利益も。正義も。打算も。あるべき理屈を全て蹴飛ばした男の愚行。

多くの人間の運命が、それによってほんの少しずつ捻じ曲がったこと。

その事実を彼が知ることになるのは、もうしばらく後。

引退した元ヒーローの寺(いえ)に、津名川宗慈という名の、一人の青年が訪れてからのことである。

1

「ミシェル。私はね、人の心は、金平糖に似ていると思うんだ」

ジョーの言葉はいつでも唐突だ。

彼女とうまく付き合うコツは、その飛躍にいちいち驚いたりしないことだと、僕はこの数か月の経験で理解している。

多分、ジョーの頭の回転は速すぎて、言葉がその論理展開に追い付いていかないのだ。

僕は、差し入れのあった漫画雑誌を読みながら、適当な返事を返す。

分厚い国民的漫画雑誌の中では、生まれたときから自分の意思に関係なく封じられた制御できないバケモノの力を持て余しながらも、前向きに努力する少年忍者が活躍していた。

最近始まったばかりの、お約束な展開満載の漫画ではあるが、なんとなく共感できる設定の主人公が、僕のお気に入りだった。

「甘くて脆くて、棘があるあたり？」

「なるほど、その発想はなかった。ミシェルはロマンチストだね」

その反応に、少し恥ずかしくなる。

なんだかこれでは、僕がひどく乙女趣味なようではないか。

「……振ってきたのはジョーの方じゃないか。それじゃあ、なんで金平糖なのさ？」

半ば文句めいた口調の僕を全く意に介した様子もなく、ジョーは言葉を続ける。

僕はジョーが焦ったり、戸惑ったりしたのを見たことがない。

マイペースという言葉を超えて、単に世界に対して鈍感なだけではないかと思うことがある。
まあ、周囲のあらゆることに過敏過ぎる小心者の身としては、その在り様は少し羨ましい。
今週の分のお気に入り漫画を読み終えたので、僕は雑誌を置いて、ジョーとの雑談に集中してやることにする。
どうせ、時間は持て余していたのだ。少しくらい彼女の話を聞くのも悪くない。

「金平糖っていうのはね、最初、本当に小さな芥子の粒や、もち米を砕いた欠片なんだ。大きさにしておよそ０．５ミリの、小さな小さな核。それを、蜜の入った窯に放り込み、ぐるぐると窯を回す。そうすると、核に、蜜がまとわりつき、一回転ごとに一層ずつ、核は大きくなっていく。まあ、雪だるまの作り方に近いかもしれないね。雪の上をごろごろ回すと、雪玉は大きくなっていくだろう？あれと同じさ。時間をかけて、核は蜜の層をまとっていき、だいたい製品になるまで、二週間くらいかかるらしい。気の長い話だね」

ジョーは手元の日記帳にすらすらと文字を書き込みながら、手元も見ずに話し続ける。
まるで曲芸だけれど、彼女にとっては必要に迫られて身に着けた、生きるために必要な最低限のスキルだ。
それにしても、彼女はいったいどこから、そういうわけのわからない知識を得ているのだろう。
彼女は僕よりもこの場所では古株だ。
外界から遮断されたこの施設で、自由に情報を入手できるとは思えない。

「まあ、金平糖の作り方はわかったけど、それが、どうして人の心に繋がるの？」

「同じだよ。人は、生まれたときには遺伝子に規定された方向性の通りにしか、外界の刺激に反応できない。まるで剥き出しの小さな核が、世界に転がっているようなものだ。それが、時間を重ね、外から様々な刺激を受けることで、経験という層を身に着けていき、心の在り様を形成していく。最終的に核は、経験によって覆い隠され、形と口当たりの良い砂糖衣に包まれる」

言われてみれば、まあ似ていると言えなくもない。

けれど、その理屈はあまりにも単純で、僕の回答の方が、よほど洒落ているような気がする。

「たとえ核の形が違っても、同じ窯（カンキョウ）で作られた金平糖（ココロ）は似たものになる。核の形が同じでも、別の釜で作られた金平糖は、色も形も異なってくる。概ね人間の心において、遺伝要因（ウジ）よりも生育環境（ソダチ）の方が、最終的な人格には強く影響を及ぼすというのが、最近の心理学の定説らしいね。乱暴に言えば、遺伝要因が3〜4割、生育環境が6〜7割といったところだそうだよ。それはとても救いのある考え方だろう？　生まれによって、全てが規定されているなんて、今を生きる動機をなくす野暮な考え方だよ」

というか、彼女は一体何を言いたくて、そんな比喩を持ち出したのか。

こちらの疑問を敏感に察したように、ジョーの目が細められる。

彼女が、核心を口にするときの癖。

最近になってようやく気が付いた、小さなサイン。

「……でもね、ミシェル。世界には、ごく稀に、まっとうな金平糖（ココロ）を作るには、あまりにも生まれ持った核が大きすぎる、そんな存在が生まれてくるんだ。生来の方向性に、後天的な成長が引きずられてしまうほどの、歪で強烈な起源（カク）を抱えた生命が、この世界にはた

まに生まれついてしまう」

彼女が、何かとても大切なことを口にしていることは、頭の悪い僕にも理解できた。

相手の感情を察することは、僕の最も得意とすることだ。

けれどその意味は、残念ながら欠片もわからなかった。

ジョーの言葉はいつも抽象的で漠然として、少なくともティーンになったばかりの僕には難解でありすぎる。

けれど、向けられる彼女の気持ちがあまりにも真摯だったから、僕は、精一杯頭を働かせて、相槌を打った。

少なくとも、生来の異質、という言葉は、僕にも思い当たる部分の大きい問題であったし。

「それは……悲しいね」

「うん。私もそう思う。その生来の異形を、世界が四葉のクローバーのように祝福できればいいけれど、そうでなければ……死をもってしか、業を断つことができないわけだから」

ジョーは大きく頷くと、日記に走らせていた筆を止めた。

ここから先は、彼女の記憶には残らない。明日になれば彼女自身、僕に話したことを忘れてしまう、本当の内緒話。

「大きくて歪なその核は、ごく薄くしか砂糖衣を纏うことができず、少し爪でつつけば、容易に中身が剥き出しになってしまう。そういう存在のことを、ある種の人間は、こう呼ぶ」

誰にも言ってはいけないよ？

そう前置きして、ジョーは真面目くさった顔で、徹底的に怪しい単語を口にした。

「心に古痕を抱くもの。――起源覚醒種（オリジナル）、と」

沈黙。

真っ直ぐに覗き込んでくる瞳。

何を答えたらいいかわからない僕に向かい、彼女は耐えかねたように噴き出した。

「まあ、嘘なんだけどね」

まったく。

今日も相変わらず、僕の同居人は、邪気のない嘘吐きなのだった。

2

僕がジョーと出会ったのは、１３の春のこと。
生まれつき身体に異常を抱えていた僕は、第二次性徴でホルモンバランスが崩れたせいだとかで、本格的に生きるの死ぬのという線を彷徨った。
その後、血液型だか何だかが特殊だということで、普通の病院には入院できず、郊外のいかにもな施設に隔離され、静養するはめになったのである。
まあ奇しくも、実家は父親と義姉の関係が悪化して雰囲気が悪かったし、家を離れる理由ができたのは正直ありがたくもあったのだが。
そうして、連れて行かれた先、僕と相部屋になった先輩少女が、希代の変人だったのである。

「ねえ、君。これは皆には秘密にして欲しいんだけれど、私にはね、前世の記憶があるんだ」

のっけからこれである。
この施設には精神的に病んだ人間も多く療養しており、彼女もその類だろうと僕はあたりをつけた。

「前世の私は類稀な科学者でね。超能力の普及によって歪んだ世界を正すべく、世界征服を目論む悪の超能力者に対抗すべく生み出した改造人間とともに悪の組織に立ち向かった、ヒロインなんだ」
「へえ、それはすごいな。超能力者って、どんなの？　念動？　瞬間移動？　発火能力？」

暇だったので、適当に話を合わせてみる。

実害がないうちは、変に機嫌を損ねるより、相手の好きに話させる方がいいと思ったのだ。
自己紹介やその他の前置きをすっ飛ばした会話は、あまりに非日常的で、その雰囲気に当てられて、僕もどうにかしていたのかもしれない。

「違うね、彼らが使ったのは念話、テレパスってやつだよ。いや、テレパス自体は、その世界の人間は誰にでも使えた。当時の人類はとある大規模な装置を作り上げて、誰もが言葉によらず分かり合えるようにしたんだ」
「みんなが使えるなら、悪の超能力者って言っても、大して怖くないんじゃないの？」
「……テレパスは誰にでも使えた。けれど、悪の超能力者は、テレパスで「嘘をつくことができた」んだ。心の声を偽ることは、当時の人にはできなかった。というか、そもそもが「平和に互いに分かり合うため」の装置で作り上げた超能力だから、嘘をつくための機能が削られていたんだね」

こちらの指摘によどみなく答える女の子。
ぱっと聞いた限りでは、多少の御都合主義はあるが、致命的な矛盾はないように思える。頭の回転自体は速いらしい。
興が乗って、僕はもう少し、彼女の妄想の理屈がどこまで理路整然としているのか、聞きたくなった。
本物の妄想を聞くのは初めてだから、それがどういうものか、野次馬根性があったとも言える。

「悪の超能力者は、どうしてテレパスで嘘がつけたんだい？」
「前世の記憶があったからだよ。私みたいにね。テレパスを生み出す装置を作り出した科学者の記憶を持った者達だったから、彼らはその装置の機能を悪用して、自分達だけが嘘をつけるようにした。

さて、誰も嘘がつけない世界で、嘘がつける人間がどれだけ有利だと思う？　彼らはそれを利用して、世界を支配しようとしたんだ」

前世の記憶、はちょっと強引で減点だが、まあまあ面白い設定だと思った。

プロの漫画や小説には全く及ぶべくもないけれど、女の子が病室に閉じこもっている中で生み出した妄想としては、悪くない。

「それで、君の前世の科学者が立ち上がったってわけなんだ」

「そう。彼女も悪の超能力者と同じ、前世の記憶のおかげで嘘をつけるテレパスだったんだけれどね。彼女は、それを私欲に使うのが気に喰わなかった。そして彼女は考えたんだ。人間は、余計な力に手を出したんだって。もしもテレパスなんてなければ、人は普通に嘘も真実も交じっていることを承知で言葉でわかりあおうとしたはずだ。変に新しい力に手を伸ばしたからこそ、こんな混乱が起きたんだってね」

「それで、彼女はどうしたの？」

「彼女は協力者と、悪の超能力者に対抗するための人造人間を生み出した。そして……」

「それで、悪の超能力者を叩きのめした？」

僕の先読みに、女の子はにやり、と悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「いいや、違うね。自分を、悪の超能力者たちに売り込んだんだ。自分はあなたたちと同じ「嘘がつける」人間で、さらにこんな私兵も持っていますって」

「……は？」

「そして、彼女は悪事を積み重ね、悪の超能力者集団の中で地位を確立した」

脈絡が破綻し始めた展開に、僕は内心でため息をついた。
やっぱり、所詮は妄想。お話として起承転結なんて求めてはいけなかったらしい。
悪に対抗しようとした主人公が結局悪の組織で幹部になりました、なんて、お話としてはあまりにも救いがなさすぎる。
だが、そんなこちらの落胆を知ってか知らずか、彼女はなおも物語を話し続ける。

「やがて、彼女は悪の組織で、一大プロジェクトを計画した。それは、テレパスを生み出す装置の改良。目指すのは、世界人類の全てからテレパスの能力を吸い上げて、悪の組織の構成員をパワーアップさせること」
「で、その計画は成功したの？」
「もちろん。こうして、世界中の人々はテレパス能力を喪失し、彼女の目的は達成されましたとさ、めでたしめでたし」

……ちょっと待て。
それは、おかしい。

「ちっともめでたくないよね。悪の組織の超能力者は、世界中から能力を吸い上げてパワーアップしたんだよね？」
「したよ。その瞬間に、殺されたけど」
「……誰に？」
「決まってる。言ったよね。私の前世の科学者は、悪の超能力者に対抗するための人造人間を作り出したって」
「ってことは」
「そう。彼女は、世界から消し去るべき超能力を一か所に集めて処分するために、悪の組織に潜り込んだってわけだ」

多分、この時の僕は、随分と間抜けな顔をしていただろう。

話の展開としては三流以下だが、ただの妄想として片づけるには、少しばかり、形が整い過ぎた空想。
余りにも唐突な語りで、てっきり彼女は精神を病んでいると思っていた。
けれど、もしかして彼女は……
「……まあ、嘘なんだけどね」
曖昧な笑顔を浮かべて返すべき言葉を探していたこちらの様子を見て、彼女は耐えかねたように噴き出した。
「妄想だとか思ったかな。まあ、作り話も妄想も、第三者には変わりはないよね。違いは本人が信じているか否かだけだから。ということで、安心するといい、君の同居人は空想癖はひどいけれど、少なくとも精神の統合を失調はしていないよ」
……やられた。
悪戯っ子めいた表情で舌を出す彼女の様子を見て、謀られたことに気付いた。
「いいよ君。そういう反応、私は好きだな。ねえ、名前を教えてくれない？」
ころころと変わる口調に飲まれて、思わず素直に名前を答えてしまった。
すると彼女はしばし首を炊げた後、さもいいことを思いついたかのように、胸の前で手を叩いた。
「うん、決めた。これから君のことは、ミシェルと呼ぼう。私のことは、ジョーでいいよ」

振り返ってみれば、あんまりな出会いである。
けれど、何故かそのときの僕は自然に、その無茶な出会いを受け入れてしまった。
もしもこの邂逅で、僕が彼女と一線を引いていれば、彼女の舞台はもう少し長く続いたのかもしれない。
それでも、そんなことを知らない僕はジョーという少女と出会い、ミシェルという役として彼女の舞台に立ってしまったのだ。
嘘と本当の間に差異を求めないジョーと、何の力もない平凡なミシェル。
演目に名をつけるなら、金平糖の少女。
脆くて甘くて、ほんの少しいびつな棘を持った、砂糖菓子のような物語。
それは、僕が初めて得た、風変りな友達との日々の記憶でもあった。

3

「結論から言おう。君の体というヤツは、極めて異常だ」

サナトリウム入院から一週間後の診察。
白衣を着た伊達男の言葉に、ボクは言葉を失った。
理解できなかったわけではない、そうではないか、という思いはあった。
むしろ、言葉の内容については、今までの疑問に対する明確な回答であったと言っていい。

小さな頃から、体だけは丈夫だった。
いや、丈夫過ぎたと言うべきか。
子供同士の遊びでよくできる擦り傷の類は一晩で痕もなくなっていたし、ガキ大将の拳を痛いと感じたこともなかった。
幼い頃は、それが当然で、自分以外の子供も自分と同程度には、丈夫なのだと思っていた。
義父が自分に堅く暴力を禁じるのも、単なる躾の一環だと思っていた。

それが、この身の異常性故と理解したのは、数年前のこと。
事件そのものはさして珍しくもない。
遠足で列を作っていた児童の只中へ、居眠り運転のトラックが突入した、そんな悲劇。
ただ、その事件の結果は、事態から予測されるどのようなものとも違った。
死者、０人。
重軽傷者、０人。
トラック、大破。

そのとき何が起きたのか、ボクは覚えていない。
目を覚ましたボクの目に飛び込んできたのは、スクラップと化したトラックと、クラスメートたちの怯えた視線だけ。
バンパーには、無数の陥没。その大きさは、ちょうどボクの拳ほどのサイズだった。
子供は正直だ。動物的な感覚で、自分と差異のあるものを敏感に嗅ぎ分けて遠ざける。

どういうわけか、事件は「なかったこと」になった。
だが、それからボクは、学校で一人になった。
間もなく義父が転居を決め、新しい学校へと通うことになった後も、ボクは友人を作ることを諦めた。
自分は、バケモノだ。
幸い、周りの雰囲気に合わせて自分を使い分けることは得意だった。
誰とでも適当に距離を離し、適当に距離を詰め、ドーナツのような対人関係に安定していた。
そんな中、この体の不調が始まったのだ。

「奥平先生、この病気は治るんですか？」
「ああ、君の不調は治るよ。君の状態は非常にレアケースなんだが、たまたま今はこのサナトリウムに君の病状に関する専門家がいてね。彼女のアドバイスを受けて私が君専用に薬を調整する。半年か一年程度経過を見ながら服用を続けてもらえば、状態は安定するだろう。ただし」

私の心を見透かしたような笑みを浮かべて、奥平という名の意思は言葉を続ける。

「君の身体性能をして異常と言うならば、それは治らない。何故な

ら、「その異常こそ君の正常（ケンコウ）」だからだよ。いつの時点かはわからないが、君はそういう形に作り替えられてしまった。これだけ定着しているということは、おそらく産声を上げたときには君はその肉体を持っていたはずだ。君からその力を切り離すことは、カフェオレから牛乳を抽出する行為に似ている。可能性はゼロではないが、世間的には無理というカテゴリに括られる試みだな」

その言葉の意味を咀嚼し、理解するのに、一呼吸ほどの時間を要した。

多分、今まで生まれてきて最も長い、呼吸であったように思う。

「……ボクは、何なのですか」

「それを説明することは、俺にはできないな。まともな医者なら、この検査結果は何かの間違いだと断じる。踏み越えた科学者なら幾らでも「真っ当な」結果を求め、君をいじくりまわすだろう。俺はあんまり自分の毒で苦しまない人間には興味がないから、こうして君を普通の患者として扱っているわけだが」

人として、明らかに「踏み外した」奥平の言葉もろくに耳に入らない。

自分は、異常だ。

それは、病でも何でもなく、そういうふうに生まれてきたから、だという。

素手で、高速で走りくる車を破砕するような人間は、いない。

「君はただの人間だ、なんて気休めは言わない。俺の柄じゃないしね。だがまあ、うちの上司（ジジィ）の話じゃ、君はまだ、キゲンがいい部類だ。自覚しても飲まれることはないだろう」

最悪の戯言だ。

こんなことを告げられて、機嫌がいいままでいられるはずがない。
完全に上の空のこちらに、奥平は背を向けると、カルテにペンを走らせながら、これで終わりだ、とばかりに言い捨てた。
「肉体が異常な存在と、精神の方向性が異端な存在。個人的には、後者(オレラ)より前者(キミ)の方がまだ、救いがあると思うがね」

◇　◇　◇

検診を終えたボクを迎えたのは、いつも通りベッドに腰掛けて日記をつけている、ジョーだった。

「おかえり、ミシェル。顔色が悪いけど」
「ああ、ちょっとね。検査の結果が思わしくなかったんだ。命に係わるもんじゃないって話だけどね」

ジョーとの会話の相手であるミシェルという役回りに、こんな異常な力はない。
平凡で単純で愚鈍な、ただのティーンである。
だから、何喰わない顔で、ボクは彼女の言葉を否定した。
罪悪感はあまりなかった。
多分、彼女がボクに嘘をついているように。ボクも彼女に嘘をついているだけのこと。
この小部屋の中だけは、平穏で甘やかな日常であるようにと。
きっと嘘というより、これは演技の類なのだろう。
この部屋という舞台で、ジョーとミシェルという役回りが交わす会話は、かくありかしという願いの形だ。
けれど。その日の奥平の台詞は、思いのほかボクを苛立たせてい

たらしい。
　ミシェルが本来口にするべきではない言葉が、ジョーの前でこぼれてしまった。

「ねえ、ジョー。この前言ってたよね。世界には、まっとうな金平糖（ココロ）を作るには、あまりにも生まれ持った核が大きすぎる存在が生まれてくるんだって」
「ああ、起源覚醒者（オリジン）のこと、話していたんだ。いつの私だか知らないけど、日記にも書いてないなんて随分と迂闊ね。まあいいや。それがどうしたの？」
「生まれた時から、そういう異形で、それをどうにも矯正しえない生き物って、どうすれば幸せになれるのかな」
「……難しい質問ね。それは私の方こそ誰かに問いかけたいことなのだけど」

　ジョーはそう言うと、流麗な筆記体で書かれた日記を閉じた。
　魔法瓶から湯をカップに注ぐと、ティーパックを放り込んで小首を傾げる。
　その表情はいつになく強張り、「ジョーではない彼女」の欠片を覗き込んだような気がして、ボクは思わず目を逸らした。

「核に飲まれればそもそも幸せ云々と語る自我が消滅する。故に起源覚醒者（オリジン）が幸せになるためには、核を自覚しながら起源覚醒種（オリジナル）にならず、その異常を抱えていかに日常にしがみつくかが重要なの。でも、そもそもが起源覚醒とは、自分の「他の可能性」を自分のモノのように受け入れてしまうこと。自我の境界が脆くなっている状態でいわゆる日常を過ごすのは困難ね。いっそ今の生を「演じているのだ」と割り切るか、核から押し寄せるエピソード記憶を「なかったことにしてしまう」くらいしか、私には対応策が思いつかないな。理想は、その異常も内部に包括した自己を確立することだけど、人

一人でその境地に至るには、人間は弱いよ。残念ながらね」

ジョーの言葉は難解で、何を言おうとしているかの半分も理解できなかったが、それでも。

「平穏な生を演じるか、異常をなかったことにしてしまうか」

自らの異常を抱えた上で、世界の中で役割を演じるか。

自らの異常に蓋をして、なかったことにして平穏を享受するか。

その選択肢は、とても腑に落ちる気がした。

「まあ、ミシェルには縁のない話じゃないかな。これは私や明日ここにやってくる新入り君みたいな、キゲン切れ間近の人間が気にするべきことだから」

日記を閉じ、ジョーは魔法瓶の中のお茶を、2つのカップに注ぎだした。

ここで深刻な話はお終い、というサインだ。

ボクの方にも異はない。

彼女もまた、ボクとは違えど似たような何かを抱え、それに対して答えを模索しているらしい。

錯覚かもしれないそんな感触を得ることができただけで十分。

「このサナトリウムに、新入りが来るの？」

「ああ。奥平君の言葉だから、間違いないね。一人は午前に写真も見せてもらった。年は私達よりも少し上かな、太宰を思わせる細面の美形だよ」

「ジョーが男の顔のことを言いだすとは思わなかったな」

「私だって花も恥じらう年頃の娘さんだからね。興味はあるよ。まして、ここに入ってくる時点で私らの同類だから」

ちくり、と胸が痛む。
それは、二人だけの世界に異物が混じりこむ予感。
安っぽい独占欲だ。自分が情けなくなって、ボクは熱い紅茶を喉に流し込んだ。

4

サナトリウムでの生活にも慣れだした、ある日。
とある少女を前にして、ボクの意識は、とある圧倒的な感覚に支配された。
ぞわり、と。
背筋から全身に電流が走り抜ける錯覚。
鼓動が加速し、呼吸が浅くなる。
血流は興奮作用を賦活する物質を乗せて駆け巡り、全筋繊維が爆ぜるための指令を待つ。

「はじめまして」

肉体が告げている。これは、よくないものだ。
だが、意味がわからない。
目の前にいるのは、ただの少女だった。
何も持たず、微笑みを浮かべ、会釈をしているだけの女の子だ。
にも関わらず。それに対して、何故、自分の体は、まるで獣の類に遭遇したかのような反応を、見せているのか。

「――さん、ですよね」

名を呼ばれた、と、一瞬理解できなかった。
この場所では、奥平医師を除いて、ボクを本名で呼ぶ人間はいなかったから。

「あ、ごめんなさい。言葉が通じる同年代の人がいるって聞いたから、名前を教えてもらっちゃったんです」

理由もわからず焦げる感情を遮断し、改めて相手の外見を観察する。
義姉とよく似た、緩くウェーブのかかったオリーブ色の髪。
血の色が透けそうな、白く透き通った肌。
こちらの瞳が映りこむ、青い瞳。
全く、欠片も、警戒を誘うべき要素などありはしない。

「……うふふ、困った顔も可愛いなあ、食べちゃいたいくらい」

にも関わらず。
愛玩用の犬が牙を磨いているのを見たような、そんな、得体のしれない感触が、ボクの全身を覆っていた。
いけない。これは、いけないモノだ。

――　一刻も早く　これを　消して　しまわ　ないと

……愕然とする。
思考に湧き上がった、獰猛な感情。
真正面から一歩踏み出し相手の反応よりも早く喉を握りつぶす様を、ボクの脳は描き出していた。

思考の空白を縫うように。
ボクの脳に描かれた、殺戮を鏡写しにしたような歩みで、彼女はいつの間にかボクへと歩みより。
ぺろり、と。
まるで、つまみ食いでもするような気楽さで、ボクの頬を舐めた。

「いい感触。君はおいしそうだね」

どこまでも可憐な笑顔に、言葉が出ない。

「ワタシはジュン。ジュン・ミナヅキ。短い付き合いになると思うけれど、よろしくね」

◇　◇　◇

一刻も早く、相部屋へと戻りたい。
足早にサナトリウムの廊下を駆けていたボクは、ある光景を見て思わず足を止めた。
相部屋の前で、ジョーが笑っていた。
向かいに立つのは、同じくらいの年の少年。
すらりと背が高いが、線の細さのせいか心持ち頼りない印象だった。

「……っ」

ジョーが、日本語で会話をしている。
ボクは、あまり日本語で会話をする彼女が好きではなかった。
とつとつと舌足らずな不自由な言葉では、彼女の知性は相手に伝わらない。
それが、他人事ながらもどかしかったからだ。
けれど、それ以上にボクを苛立たせたのは、彼女の表情だった。
笑顔。
屈託のない微笑み。
サナトリウムの医者たちに見せる余所行きのものではない。
部屋の中でボクに見せるジョーとしてのものでもない。
きっとあれが、彼女という存在の素の表情。
それを引き出したのが、自分ではなくて、見知らぬ少年だということが、寂しかった。

そういう少年がいるのは聞いていた。
この数週間、彼女はしきりに彼のことばかり話していたから。
彼女は、少年を「マグロ」と呼んでいた。
ひどい呼び名だが、内向的で神経質にも見える彼にはふさわしいあだ名だと思った。
わかっていたはずだ。
ミシェルとジョーの物語は、あの相部屋の中でのみ紡がれるお伽噺。
そこを出てしまえば、ボクにはボクの。彼女には彼女の現実があるのだと。
そのはずなのに。
いざ、実際に二人の幸せそうな笑顔を見て、ボクが感じたのは、単純な疎外感。
二人に挨拶をして相部屋へと入る、そんな単純なこともできず、ボクは軽やかな談笑に背を向けた。

あのとき、ボクがちゃんと部屋に戻っていれば。
二人は似合いだよと、笑って話せていれば。
その夜の破滅は、起きなかったのかもしれない。

けれど、あの日のボクはまだどうしようもなく子供で。
かくて、砂糖菓子（コンペイトウ）の弾丸は装填され。砕け散るまでの秒読みを迎えたのだ。

◇　◇　◇

深夜、日付が変わる直前。
奥平医師の部屋で時間をつぶし、ボクはようやく、相部屋の扉の前に帰ってきた。
多分、ジョーはもう眠っている。
朝になれば何もかも忘れて、元通りに話せる。

そんなことを思いながら、ノブを捻ろうとして、とある匂いに気が付いた。
鉄の匂い。
違う。これは、もっと生々しいモノの香り。
思わず息を殺し、扉の隙間から中を覗き込む。

月明かりの中、人よりも鋭敏な視覚が、惨状を認識する。
中心にいたのは、ジュン・ミナヅキ。
昼にボクの頬を舐めた、新参の少女。

「御機嫌よう、黒の女王（クイーン）」

ジュンは微笑むと、大仰な素振りでスカートの裾をつまみ、一礼した。
口元には朱。口紅ではない。ただ、赤い液体が、唇を濡らしている。
鉄の匂い。軋り、と。脳の何かがズレるような錯覚。
倒れている人々を、見たことがある。
皆、このサナトリウムのスタッフだった。

「夜分の闖入者には対応が手荒になるよ、剣の長い手」

血と湿度と殺意が立ち込める異常な空間の中。
血まみれの少女（ジュン）の前に立っているのは、従者のように一人少年を

連れた、ジョーだった。

5

ジュンに相対するジョー。
彼女の口調はどこまでも静かで、この異常な空間に全く心を揺らしていないかのようだった。
これが、ジョー。
否。ボクの知らない、ジョーとしてではない、彼女の本当の顔。
口調は冷たく、まるで男性のようなものへと切り替わる。

「仮にも古痕の護衛を子供一人で殲滅できるとは思えない。……起源憑きか」
「よくおわかりですね」
「剣がグラハムの能力を解析していたのは、人為的な起源覚醒を行うためだったってわけだ」

ジョーの隣には、金髪の少年。
見たことはなかった。少なくとも、サナトリウムの患者ではない。
彼は一歩前へと踏み出し、ジョーを守るように両の手を緩く構えている。

「推察するに野生寄りの起源。狩猟動物の身体運用を再現しているだけじゃないな。その具合じゃ、肉体自体も作り替わっているか」
「御明察。ジューンは六月の使徒。起源は「捕食」、欠落は「味覚」。以後、お見知りおきを」
「私を狙う目的はなに？　軍としては私より奥平君の価値の方が高いんじゃないか？」
「「精製」の起源ですか。そんなもの、貴方と比べれば遥かに安い。「変革」の起源と幸福の名を持つもの。我が主が貴方を御所望です」

ジュン、いや、ジューンと名乗った少女の指から、鋭い爪が伸びる。
まるで時を早回ししたかのような異常。
「古痕も情報管制が甘いな。さすがグラハム、ユダに泣くとは、メシヤの系譜は伊達じゃないね」
「起源に目覚めた者は起源に生を方向づけられる。貴方が変革を望むなら、グラハムよりも剣につくべきだ」
ジューンの言葉に答える代わりに、ジョーは脇の少年に声をかけた。
「デュラ。高速神経ネット起動」
「了解です。母様」
その言葉が意味することはわからないが、デュラという少年の姿勢から、臨戦体制になったことは見てとれた。
「わかりませんね、この提案で貴方に損などないでしょうに」
「オリジナルに、オリジンのことは理解できないだろうが、言っておく」
瞬間的に、デュラと呼ばれた金髪の少年の姿がぶれる。
人並み外れていると自負のあるボクの目でも、初動を認識するのがやっとの速度で踏み出したのだ。
「起源に呑まれて種としての人を外れた起源覚醒種（オリジナル）と、あくまで起源覚醒を経験した人間である「起源覚醒者（オリジン）」は、全く別物だ。剣が私を望むということは、軍の起源覚醒法では、オリジンが作り出せないということだろう？　それはそうだ。外部からの乱暴な刺激で

強引に覚醒する起源は、多くが野生よりで、かつ生命の危機から起源覚醒種となる。他種の身体性能を得ることはできても、人としての他生の知識を得ることはできない。言ってみれば北風と太陽って話さ」

ジョーの言葉のように間断なく放たれる拳打。
それに対応したジューンをこそ、褒めるべきだろう。
デュラが繰り出した掌打を腕で止め、一歩後ろへと下がる。耳障りな音と共に、細い腕が在り得ない方向へと捩れた。

「……同種？　いや、グラハムの下に野生寄りの起源持ちはいないはずだ」
「デュラ。逃がすな」
「了解です。母様」

デュラの姿が再び霞む。間断ない音がその打撃速度を告げている。
身を逸らし、捻り、払い、およそ人間には不可能な動きでそれを生き延びるジューン。
圧倒的。
だが、それでも。ボクには、漠然と理解できてしまった。
ジューンはまだ、何かを、隠している。
それはきっと、ジョーを危険にさらす。
叫ぼうとした瞬間。
脳裏に浮かんだのは、昼間の笑顔。
マグロとジョーとが、微笑みあう姿。
理解ができない。なんでそれが今、ここで出てきてしまうのか。
一瞬の逡巡が、機を奪う。

「アウグスト、やれ！」

叫ぶ、ジューン。
落ちてくる影。
弾かれたようにデュラが跳ね、同時に赤い液体が虚空に舞った。
一閃。ごく浅い傷が、デュラという少年の首筋に走る。
瞬間。
ぐらり、と。
彼の体は崩れ、リノリウムの床へ倒れこんだ。
いつの間にか、矮躯の男がジューンの傍に立っていた。
手には奇妙な色に濡れた刃。これが、デュラを切り裂いた凶器らしい。

「デュラに通常の毒は意味を為さない。奥平くんと同種……いや、知識ではなく体機能として対象に効果的な毒を精製するタイプの覚醒種か」
「……あ、アウグストは八月の使徒。起源は「毒殺」、欠落は「声」」

人工声帯から漏れる音がひゅうひゅうと呼気混じりに響く。

「アウグスト、その子供を捕獲して。それもオリジンの産物だろう」
「……へ、「変革」は？」
「足の腱を切って連れて行け。毒は麻痺系を使え。説得は本国でもできる」
「……し、承知」

思考が止まる。
わからない。目の前の彼らが何を語っていて、何を目的としているのか、欠片も理解できない。
それでも、確かなことは。
ボクの友達に対して、明確な悪意が向けられているということ。

そして、自分のつまらない躊躇いが、彼女を守るモノを傷つけたということ。
ふざけるな。
腹の奥で、ぐるりと熱いものが爆ぜる。
ふざけるな。
怒りと名をつけるにはあまりにも荒く獰猛な感情。
ふざけるな。
背筋から全身に電流が走り抜ける錯覚。
ふさげるな。
鼓動が加速し、呼吸が浅くなる。
ふさげるな。
血流は興奮作用を賦活する物質を乗せて駆け巡り、全筋繊維が爆ぜるための指令を待つ。

肉体が告げている。これは、排除すべきモノであると。
遺伝子が告げている。これは、敵性存在であるのだと。

――　一刻も早く、これを消してしまわないと。

かつて、ジューンと初めて出会ったときに湧き上がった感情。
あのときは理性がブレーキをかけた。だが、今は違う。
そんな理性（モノ）、とうに怒りで灰になっている。
イメージするのは、過負荷で弾けたブレーカー。
全てが切り替わる。手動的が自動的に。能動的が受動的に。
アナログで思考していた脳が温度を下げ、0と1、悉無の法則で演算を開始する。

――　排除対象。起源覚醒種（オリジナル）2体。

武器はない。数では劣る。そして自分には守るべきモノがいる。

状況では圧倒的に不利。だが、それを恐ろしいと感じる機能など捨てている。

――興奮状態から生命の危機と判断。自動的にモードを移行。

「ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

――ＥＸ－ＴＡ－００は、高速神経ネットを起動します。

扉を蹴り破り部屋へと飛び込む。
驚愕の表情でボクを見る、ジェーンとアウグスト。
そして、茫然とこちらを見る、ジョー。

「なんで……ミシェル！？」

ジューンが口を開き、鋭い牙を剥いて跳びかかってくる。
だが、遅い。否。そんな感想を抱くまでもない。
目隠しをするように手を伸ばし、突撃してきた少女の腕を掴む。

――握潰。

手から伝わる、不快な感触を最後に、ボクは意識を失った。

6

「……ごめんね、カミシェロ」

茫とした意識の中で、友達の声を聴く。
久しぶりに、彼女が愛称ではなく、ボクの名を呼ぶのを聞いた。
米国暮らしが長い彼女はボクの名を正確に呼べなくて、いつも、こんな呼び方になるのだ。

「まさか、カミシェロが、高宮の遺産だなんて、思わなかった」

舌足らずできちんと呼べないのを隠したくて、それで、彼女はボクを、ミシェルと呼んだんだっけ。
だからボク同じようにも、彼女の苗字から頭を除いて、呼んだのだった。

「……覚悟は、していたはずなのに。色んな人の運命を巻き込んでもでも、弄んででも、成し遂げるって。なのに今さら、マグロや君。身近な人がこうやって巻き込まれると思うと、躊躇うなんて、ずるいよね」

ミシェルとジョーの物語。
互いに仮面であることはわかっていて。
期間限定の舞台と知っていて。
それでも、とても幸せで。

「沢山、人が死ぬ。傷つく。……でも。たとえそれが間違いだとしても。私は多分、同じことをする。いつかの私がそうだったように、何万の人から恨まれてもいい」

夢のような日々。
……そして。

「ごめんね、カミシェロ。友達でいてくれて、ありがとう」
夢というのはいつだって、いつかは醒めるようにできているのだ。
「じゃあね、カミシェロ。高宮の遺産（エクストラ）。次は、バベルで」

◇　◇　◇

目を覚ましたボクに、奥平医師は淡々と告げた。
ジョーが、自殺をしたと。
殺されたのだろう、と詰め寄ったボクに、彼は首を振った。
ボクが目撃者の一人だからか。彼は率直に色々なことを話してくれた。

ジョーは「患者」としてサナトリウムにいたのではない。
この施設は彼女という「科学者」のための研究機関であり、施設であったこと。
彼女こそ、ボクの身体を調整する技術を持った唯一の人間であったこと。
彼女は、自分が治療している人間が誰かは知らなかったこと。
その技術を望む他研究機関が、彼女を引き抜くため、以前から乱暴な接触を取ろうとしていたこと。
昨晩、他研究機関に雇われたと思われる人間が、彼女を誘拐しようとしたこと。

誘拐犯はサナトリウム内で撲殺されており、警備の人間と相打ちになったものと思われていること。
ボクは、その犯人の近くで気を失っていたこと。
ジョーは、それらの騒動の後で、自ら命を絶ったらしいこと。
あまりに唐突で、聞こえてくる言葉を飲み込むだけで手一杯だった。
どうして、そこまで話してくれたのか、と問うと。
「君はもう、俺ら古痕と一蓮托生なのさ」
手にした小瓶を振って、奥平医師は肩を竦めた。
それはボクの肉体を安定させるための特効薬。
ジョーがレシピを作り、彼が精製した、ボクの命を繋ぐ液体だった。

◇　◇　◇

その場所には、先客がいた。
ひょろりと線の細い少年。ボクよりも少し年上だろうか。
眼前の墓石に、手を合わせている。
捧げた花は、白詰草。
ちょうど、ボクの持ってきたものと同じだった。
足音を殺し、彼の後ろに立つ。
「……泣いてらしたんですね」
日本語でそう声をかけると、彼はぎこちなくこちらを振り返った。
人慣れしていない様子を、妙に好ましく思った。
多分、この人のこんな素振りを、ジョーは好きだったのだろう。

「涙の、匂いがしましたから」

言って、四葉のクローバーと、白詰草の花を捧げる。

「……彼女は、私が殺したんです」

ボクの言葉に、彼……マグロとジョーが呼んでいた青年が、息を飲んだのがわかった。

手を合わせ、目を閉じる。

この行為にどれだけの意味があるかはわからない。

彼女を助けられなかった自分に。

もしかしたら、暴走のあまり、彼女を殺してしまったのかもしれない自分に。

「彼女は、君を、恨んでなんていないと思う」

躊躇いがちに、彼が言葉を絞り出す。

多分、彼は初対面の女性と話すのは苦手なはずだ。

それでも。これだけは口にせねばという気持ちが、声から伝わってくる。

「彼女は、クローバーに、なりたかったんだろう」

強張って、不器用で、それでも真っ直ぐに。

「彼女は、人とは違った。けれど、四葉だから、他と違うから、与えられる幸せもある。みんなが違うから、ある意味がある。彼女を見ていると、そう、思えてくる。だから」

全くタイプの違うはずの、親友と、この少年の姿が、重なった。

「僕は、ここを出るよ。彼女のように『四葉のクローバー』であること。そうなるように努力すること。それが、彼女への供養にもなると思うんだ」

真っ直ぐに進む。揺れながら、悩みながら、それでも立ち止まったら、死んでしまうから。

多分それこそが、彼の在り方。

「……ごめんね。意味が、わからないよね」

ああ、だからマグロ。

捕らえられて冷凍されたソレではなく、海原を泳ぐソレとして、ジョーは彼をそう呼んだのだろう。

「いいえ、そんなことありませんよ、マグロ（ツナ）さん」

「ありがとう、ミシェルさん」

ジョーという少女が繋いだ、ほんの少しの共感。

もう、二度と出会うことはないだろう。

ボクらの道を結びつけるはずの彼女は、金平糖のような脆さで、砕け散ってしまったのだから。

◇　◇　◇

何の力もない普通を望んだ、上代（カミシェロ）まりという少女が演じた、ミシェル。

嘘と本当に差異（サイ）がないことを望む、西条倖（サイジョー）という少女が演じた、

ジョー。
二人の金平糖の少女の物語は、これで終わる。

正直に言えば。
あのときのボクは、西条倖という人間を、甘く見ていたのだろう。
彼女が死んだのは、世界に絶望して全てを投げ出したからではない。
目的のための全ての準備を終え、自分の存在が未来に悪影響を与えぬために、舞台から降りたのだというだけのこと。
数年後、ミシェル（ボク）という役を捨てた上代（あたし）まりは、それを思い知ることになる。

二度と会うこともないだろうと思っていた、あたしとマグロ（ツナ）との再会も。
数年の空白を経て再開された、十二月のエージェントの暗躍も。
中断されたはずの「B計画」の復活も。
デュラという少年の彷徨も。
古痕の崩壊も。
多分全て、西条倖（ジョー）という少女が、あの日までに撒いた種から、始まったのだということを。

しかし、それはミシェルとジョーの物語とは別の話。
マグロ（ツナ）と呼ばれた青年が、白詰草（クローバー）の生き方を望んで足掻く物語で、語られるべきことである。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9624o/

白詰草紙

2011年6月10日23時39分発行